

# 日本地質学会 **News** Vol.1 No.2 February 1998

The Geological Society of Japan News 日本地質学会/〒101-0044東京都千代田区鍛冶町1-10-4丸石ビル 電話 03-3252-7242 Fax 03-5256-5676 E-mail:geosocjp@ra2.so-net.or.jp ホームページ http://www.soc.nacsis.ac.jp/gsj/

## ontents

ロンドン地質字会の動向 植村 武2
執行体制整備委員会報告 (中間答申について)
執行体制検討委員会委員長 小松正幸3-5
日本地質学会の財政状況に関心を(その2)
97年度決算(案)と98年度予算(案)報告と会計上の
問題点 会計委員会6-9
会計委員会
掲示板:中央構造線「月出露頭」のアクセス紹介
<b>諏訪兼位・大岩義治</b> 9
<b>贊助会員のページ</b> 10-11
株式会社大和地質研究所・秩父小野田セメント株式会社
OD21, IODP, CONCORD について 木下 筆12
学協会・研究会報告:IGCP350野外討論会報告:デカン高原中西部
<b>の白亜紀堆積盆 坂井 卓</b> 13-14
韓国地質学関連学会連合英文誌 " Geoscience Journal " の創刊
<b>岡田博有</b> 15
博物館紹介 千葉県立中央博物館 熊代(岡崎)浩子16-17
<b>博物館だより(企画展紹介)</b> 18
ホームページの紹介 スミソニアン自然史博物館のホームページ
<b>中田節也</b> 19
紹介20-22
Gondwana Research 誌 創刊号/日本地質図大系(全8巻) 第1
巻:日本の地質総図/火山噴火と災害
ご案内22-23
Methane Hydrates Potential Resources in the near Future?/第33回
日本水環境学会セミナー「生き物から水環境を見る( )」/ 科学
者フォーラム 第5回アジア会議「アジアにおける学術の直面する
課題~持続可能な発展に向けて~」/日仏KAIKO-TOKAI国際シン

財団法人神奈川科学技術アカデミー研究助成募集のご案内(第一段 赌)

### 公募......24-25

筑波大学地球科学系教官の公募/九州大学理学部地球惑星科学科岩 石反応循環科学講座所属助教授の公募/九州大学理学部地球惑星科 学科海洋底地球科学講座所属助教授の公募/熊本大学理学部環境理 学科の教官公募

#### 委員会報告......25-26

第17期第1回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録/構造地質 研究会97年冬の例会報告

地学英語雑感 嶋崎吉彦.......26

**委員会だより.....**27-32

「地質学と地震」研究委員会報告/環境地質研究委員会報告

**専門部会記事.....**33

層序部会/地域地質専門部会

支部コーナー.....34

関東支部第9回地質汚染(土壌を含めた地層汚染・地下空気汚染・ 地下水污染)技術研修会報告

会員の声......35

「地質学会の民主主義を守る会(準備会)」に思う 周藤賢治 **学会記事(1997年度第3回定例評議員会抄録).......**36-43 執行委員会だより/評議員会の開催お知らせ......44 日本地質学会ホームページ開設のお知らせ.......45 編集後記......45

### お詫びと訂正

The Island Arc だより.......46

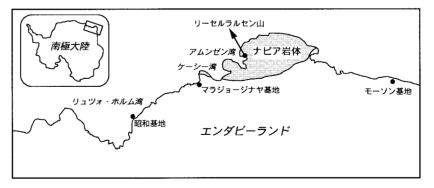
The Island Arc 新規購読申し込み・送付先住所変更届け用紙 法人化Q&A(5)

日本地質学会第105年総会・シンポジウムプログラム

### 

ポジウムのご案内 各賞・研究助成......23-24

東南極ナピア岩体・リーセルラルセン山地 域に分布するサフィリン+石英+斜方輝石の 鉱物組み合わせを持つ変成岩の露頭、写真で は,右上から左下に産出する黒色の塩基性片 麻岩の見掛け上、上位の灰白色を呈する部分 に上記の組み合わせが認められる. 同地域に は,この鉱物組み合わせのほかに,大隈石や 転移したピジョン輝石,あるいは珪線石+斜 方輝石 + ザクロ石などの超高温変成作用 (1000 以上)を特徴づける鉱物や鉱物組み 合わせも産出し、超高温変成作用の研究にと って絶好のフィールドである.一方,ナピア 岩体の原岩は地球上で最も古い(39.3億年) クラトンに属し,地球初期の大陸形成過程に 関する研究にとっても重要なフィールドであ る.手前は,約3000羽におよぶアデリーペ



ンギンの営巣地の一部である.

白と黒の露頭,白と黒のペンギン,そして 空の青色 いつもの南極.

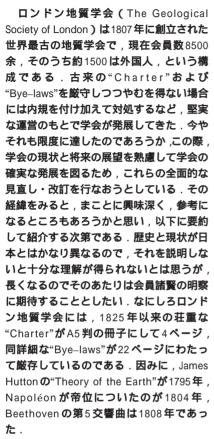
(高知大学 石塚英男)

位置図:ナピア岩体の調査・研究は日本南極地 域観測隊夏隊地学の隊員によって1996年から開 始され,2001年まで継続される予定である.

表紙デザイン:渡部芳夫 レイアウト:村松雅子

## ロンドン地質学会の動向

植村 武



ロンドン地質学会は1991年以来,それ までの学会ニュースに代わって "Geoscientist"という立派な広報誌を刊行 し,全会員に配布している.当初は隔月刊 であったが、1997年から月刊となった、 この広報誌のなかに,「評議員会・学会二 ュース」という欄があって,以下に紹介す る内容の多くはそこに掲載された記事によ っている. ロンドン地質学会には, 年次総 会のほかに,特別総会,通常総会,の3種 類の総会があるが、会則の変更などの問題 は特別総会で扱うことが規定されている. 特別総会は、必要に応じて開催されるが、 開催の目的は少なくとも3週間前までに, 英国に在住する全ての会員に知らされなけ ればならない、また、この総会は評議員会 議長,もしくは24人以上の会員の署名に よって召集される。

"Bye-laws"等の問題が議論されるようになったのはかなり以前らしいが、部分的な修正は別として、広報誌でみる限りでは、大幅な変更を考慮することが評議員会から提起されたのは、1992年6月10日の特別総会においてであった、広報誌の開催予告記事と報告記事をみると、特別総会をかなり頻繁に開催して、この問題を討議している、1997年5月の広報誌によると、それま

での検討結果をまとめた "Governance Report"に基づ いて.6月5日の特別総会に "Bye-laws"変更提案の提示 を行なうことになったとい う. その主な内容は, 既存 の12ほどの委員会を6つの 大きな"Management Board" に統廃合するために必要な "Bye-laws"の変更を考える (consider) ためであるが それに先立って、会員たち に前記の"Governance Report"を議論する機会を 与えるため,5月23日に特 別総会を開催することが予 告されている.提案する (propose) のに先立って、そ れを提示する (present) と いうことがあり、さらにそ れより前に議論の機会 (opportunity to discuss)を 設定する、という慎重さで ある. なお特別総会での討 議時間は6月5日のものを

含めると,実に1400時間に達するという. 英国人の「議論好き」ではすまされない想像を絶する重みがそこにある.

ところで, 広報誌の1997年10月号はこ う述べている. "Bye-laws"等の変更に関す る"Governance Report"は活発な討論を刺 激し、それは学会の将来についての健全な 関心を示すものであった、評議員会は会員 諸氏の意見に感謝し、示された多くの関心 に勇気付けられ、励まされた、さて議論を 重ねて夏が過ぎてみると,この問題は,多 年にわたる付加条項などが一貫性を欠いた り、相互に矛盾するところがでてきて、当 初の目的が曖昧になっているものがあった りして, 抜本的な検討が必要なことが分か ってきた. そこで評議員会としては, 広報 誌の5月号に掲載した案を本号に示すもっ と簡単な案に取り替え,問題解決のための 作業委員会 (Working Group) を設置して "2年後の1999年10月"までに報告を求め ることにした、というまことに気の長い話 である.英国人が保守的なのではなく,熟 慮を重ねた上で断行した大改革は,長期に わたって変更する必要がない、という自信 があるためで、そういう努力を惜しまない 種族なのだとみるべきであろう.

その後,ロンドン地質学会からは,広報誌の1997年11月号と同時に,評議員会がこれまでの経験などからまとめた運営体制



### The Geological Society

### GOVERNANCE - URGENT NOTICE

As reported in the October Geoscientist, Council has decided to appoint a small committee to examine the Charter and Bye-laws, in order to consider the benefits of a supplemental Charter so that the Society can discharge its responsibilities with regard to the profession, and to revise the Bye-laws which over the years have been added to piecemeal so that the original intention has become blurred.

The Society is most fortunate in that Sir John Knill has agreed to chair the committee to carry out this task. In view of this, the presentation of the governance items at the Special General Meeting on 10 November 1997 now seems inappropriate.

THE SPECIAL GENERAL MEETING WILL NOW START AT 1700 HOURS, IN ORDER TO ELECT A SUCCESSOR TO DR SUMMERHAYES FOLLOWING HIS RESIGNATION FROM COUNCIL.

It will close at 1730 hours.

Using powers contained in the existing Bye-laws, Council will however introduce the board structure as outlined in the following pages, to obtain experience of the benefits and drawbacks of the system. This experience will then be passed to Sir John Knill's committee, to be taken into account when revising the Bye-laws.

Sir John's committee, which will be drawn from a representational cross-section of the Society, will report to Council and through *Geoscientist* to the membership at large <u>before</u> any changes are proposed at a Special General Meeting.

案の要約を紹介するということで、図のよ うな「緊急連絡」という表題付きの15ペ - ジの小冊子が送付されてきた. 前文では 広報誌10月号で報告したように,評議員 会は学会の"Charter"および"Bye-laws"を検 討する (examine) ための小委員会 (Small Committee)の任命を決めたことと, 幸いにもその議長にはSir John Knill が就 任してこの仕事を遂行することに同意して くれたことを報じている。この小委員会は "Sir John's Committee"と呼ばれるらしい。 問題は今や抜本的な改訂を検討する状況と なったので、評議員会は本年11月10日に 開催する特別総会では、当初予定していた "Bye-laws"等の改訂を提案するのは適当で ない、と判断し、当面、必要最小限の修正 にとどめることにしたという.また,評議 員会は既存の規定に含まれる権能によっ て、現行システムの長所と欠点に関する経 験を取り入れるために、この小冊子に要約 した運営体制草案を提出し、参考のため Sir John's Committee にその経験を引継ぐ ものであり、また学会を代表する各階層か ら構成されるこの小委員会は"Bye-laws"の いかなる変更も、特別総会への提案に先立 って評議員会に報告し、さらに広報誌を通 じて会員に対して詳細に報告するであろ う,と述べている.

(1998.1.6 受付)

## 執行体制整備委員会報告(中間答申について)

執行体制検討委員会委員長 小松正幸

### これまでの経過について

本委員会設置の経緯及び第1回委員会で 検討した基本的考え方の概要については, 地質学雑誌第103巻9号掲載記事を参照さ れたい、1997年9月22日に第2回委員会を 行い,主に執行委員会の現状と問題を踏ま え.

- a . 常置委員会の業務と問題
- b. 執行体制の全般的問題と改革

について検討した.この間,委員および関係者の間でメールのやり取りを行って,意見の調整を図ってきた.さらに,現執行委員会及び事務局と意見交換を行ってきた.これまでの討議結果などを考慮すると,任意団体としての現体制のもとで執行体制を改善するためには,現行運営体制の改善が必要であり,それらに係る一部の会則や運営細則等の規約の改正を行う必要があるものと判断した.

これらを検討の中間報告としてまとめ, 10月9日福岡で行われた臨時評議員会に提出し,検討の中間段階として,評議員会及び幅広い会員の議論を踏まえ,次回評議員会に中間的な答申を行うことにしていた.しかしながら,臨時評議員会では他の緊急を要する案件の討議に時間を取られ,本件については報告もできずに終わった.その ため、評議員会議長は止むを得ず学術大会終了後、評議員全員に報告書の各項目についてアンケート形式で意見を求める措置を取った、本委員会はアンケートの締切り後の11月15日に会合をもち、アンケートの集約を行うとともに、評議員の意見分布と個別意見を参考にして先に提出した「中間まとめ」に必要な修正と補足を加えた、これを「中間まとめ」と合わせ12月の1997年度第3回定例評議員会に委員会の中間答申として提出した、

12月評議員会では特別に時間を取って執行体制整備委員会報告と討議が行われた.

冒頭に評議員会議長が臨時評議員会の後にアンケートを取った措置について一部の評議員から手続きとして不適当ではないかとの疑義がだされ、議論があったが、議長から臨時評議員会の議事運営について率直な釈明があり、アンケートによる意見の集約は次善の方法として必要な措置であった。ことが了解された、なお、アンケートに記述された評議員のすべての意見は、項目毎にまとめられて全評議員に配布された

また,会員諸氏から臨時評議員会での議論ができなかったことに関連し,広く意見を聞くために当初立てた検討・討議の日程

を変更すべきではないか,との要望書が評議員会議長および執行体制整備委員会委員 長宛に寄せられた.これらの方々には,整備委員会に課せられた任務は今年度内に答申をまとめ,評議員会に提出することであり,その結果を判断するのは評議員会であること,整備委員会が直接総会に提案するものではない,旨の返書を差し上げた.これらの要望書およびこれに対する議長および委員長の返書は評議員会において回覧,または資料として配布された.

討論においては中間答申(別記)に対して,種々の意見が述べられ活発な議論がなされた。今回の答申は検討の中間段階であり,方向について意向を聞くという性格上,中味(とくに執行委員会の体制)がよく煮つめられていない点もあり,イメージがつかみにくいきらいがあったが,この中間の方向で広く会員や執行委員経験者の要見を聞ききながらさらに検討を加え,必要な会則や運営細則の改正についても検討をな会則や運営細則の改正についても検討を行い,次回評議員会議事抄録参照)。なお,これを受けて1998年1月24日にこれらに関する検討のための委員会が開催された.

(1998年1月24日)

## 地質学会の執行体制整備に関する中間答申

(1997年12月20日)

執行体制整備委員会

10月臨時評議員会において執行体制整 備に関して本委員会の討議内容の「中間ま とめ (検討の方向)」を報告して討議をお 願いし、その結果に基づいて12月定例評 議員会において中間答申を行う予定でした が、遺憾ながら臨時評議員会では報告する 時間もとれませんでした(このことについ ては評議員会議長の説明が別に付されてい ます). そのため周知のように, 議長の判 断で評議員全員からアンケート形式で「中 間まとめ」について意見を求めました.そ の結果,32名の評議員から回答がよせら れ、評議員会席上での議論では到底正確に は記録できない多様な広範囲の意見を得る ことができ、結果的には、福っとなすこと ができました、これらの意見は全文をコピ - して今定例評議員会に報告することにし ました、本委員会はアンケートに寄せられ た意見分布と個別の提案や意見を最大限活 かすべく,11月15日に会合をもって「中

間まとめ」の再検討を行いました.今定例 評議員会においては,先に臨時評議員会に おいてすべき「中間まとめ」の説明を改め て行いますが,再検討の結果を報告し,こ れらを合わせて委員会の中間答申としま す.

### 「中間まとめ (検討の方向)\*」 (10月9日臨時評議員会)

(\*注;本報告に基づいて評議員のアンケートを集約した.本文に引き続く中間答申はアンケートの結果によって修正したものである)

### 総会について

現在総会開催時期は春季(4月)である. 一方,他学会との関連で会員が集まりやすいのは秋季であり,その時期に総会を開催してはどうかとの意見がある.そうすると,役員の任期と会計年度の設定にずれが生じる.総会に多くの会員が参加しやすい条件 を考えることも含め,この問題について引きつづき検討する.

### 会長の位置付けについて

現行規約では、会長は学会を代表する者であり、対外的(外注先との契約・支払い、労基上の契約など)には、会長が責務を負う立場にありながら、評議員会での採決に参加できない、過去に歴史的な経緯があったにせよ、一定の責任をもつ代表者を擁することが民主的な団体のあるべき姿と考える・したがって、会長、副会長を正式に評議員とし、会長が学会及び評議員会を代表するべきではないか・それに伴い、評議員会議長は会長が兼務し、場合によって副会長が代行する案を検討中である・

### 評議員会の定数について

選出方法,任期については,現状どおりで問題がないと判断される.支部活動を活発にするため支部を代表する評議員枠を設けるべきではないか.支部について,活動を活性化するためには現状の地域区分が妥当であるか検討すべきではないか,他学会では行政区分の地方区分とほぼ一致させている例がみられる.そこで,仮に行政方区分同様の支部区分を行うと,8支部(北海

道,東北,関東,中部,関西,中国,四国, 九州)となり,支部枠として8名の増員と なる.

以上のように,現行50名に加え,会長・副会長3名,支部枠8名の計61名体制 (但し,支部数については検討中)が妥当ではないか

#### 執行委員会について

現状、執行委員は評議員のなかから必要 定数を選出し,任期1年で会務の執行を担 当している.しかしながら,任期1年では 会務執行の継続性に支障をきたすことが予 想され,委員会開催頻度が月1回程度であ るので在京の評議員が執行委員会とならざ るを得なく、必ずしも適切な人選とならな いことについては先に報告した。また、定 数選出された執行委員のなかで任務分担を 決めることも必ずしも適切な人選とならな いことがあわせて予想される。さらに、会 務の実務の多くは事務局が行っているにも かかわらず、事務局長が執行委員でないこ とは労基上の監督者という立場からみても 問題があるものと判断される(9月号委員 会ニュース参照).

これらの点を改善するため,執行委員会 及び常置委員会を次のように整備するべき ではないか.

- a. 組織案を別紙に示す(この案はあくまでも検討の中間段階であり,最終答申案ではない ことに留意されたい).
- b. 会務の執行を効率よく,かつ確実に行うため,従来の常置委員会を統合・再編して部(会)を設置する.部は「運営財政部」、「学術研究部」、「編集出版部」及び「普及・教育事業部」の4部からなり,各々執行委員が正・副の長を担当する.この案には,各体制で表しにより,必ずしも在京者では、各体制になっても適性のある評議員が担当できるようにすること,正・副部長の評議員任期をずらすことにより会務の継続性をもたすことのねらいがある.
- c. 下部組織の各種委員会の委員長及び委員は必ずしも評議員でなくともよいことにし,人材を広く求めることとしたい.
- d. 事務局長は評議員ではないので,現行 の会長・副会長のように選挙で直接選 出し,人事の公正さを守るようにす

### 各種委員会について

各種委員会の詳細な役割については,現 状検討中である.

これまでの議論のなかで,地質学雑誌編集委員会(現行の編集委員会)の委員については,専門性を高め,専門部会を活発化させる観点から,各専門部会が推薦する委

員と執行委員会が推薦する編集事務を行う 委員とを評議員会が承認して,構成する意 見が出されている.

### 中間答申

#### 1. 総会について

### 1) 開催時期

補足説明

現在総会・年会開催時期は春季(4月)であるが,つぎのような理由から秋に開催してはどうかという意見がある.

- ・地球惑星連合学会への参加者が年々多く なり,近接した時期では負担が多い
- ・コンサルタント等の企業は4月(あるい は3月末)は参加が困難.
- ・開催地が北陸,東北,北海道の場合,巡 検ができないために春に年会が行えない

この場合には春に総会を別に開催しなくてはならず,集まりも少なく,負担が大きい

<アンケートの結果は,従来通り春開催 (3月末~4月初)と秋開催はほぼ同数であった.これには所属する職場の事情を強く 反映している(学校関係者は春,企業関係者は秋が出やすい.>

2) 会計年度,予算・決算の承認,役員 任期の問題

秋に総会・年会を移した場合には会計年度(現行1~12月)と役員任期(現行4月~3月)の設定にずれが生じる.

< アンケートで秋に総会を移すことに賛成の人の間で,会計年度を移す,会計年度は現行のまま,の両方の意見があった>

### 修正提案

どの時期に開催すれば会員が最も出やすいか,つぎの質問内容で会員アンケートをとる.

- A. 春に行う. イ)3月末,ロ)4月初 この場合,現行では,1~3月は裏付けなしに予算の執行が行われているので,1 ~3月の暫定予算の決定を前年12月の評議 員会に委任する.
- B. 秋に行う. イ) 9月末, ロ) 10月初 この場合,
- (1) 会計年度は現行(1月~12月)のままとし,総会で次年度予算を決める.決算は8月(または9月)までの暫定決算とし,最終決算の承認は評議員会に委任する.
- (2) イ)役員任期は10月~9月とする. 口)役員任期は1月~12月とし,秋の 総会で次年度の役員を決める.
- 2. 会長の位置付けについて

<アンケートでは,会長・副会長を評議 員とすることに賛成の表明は16,反対9, その他3であった.また,会長が評議員会 議長を兼務することに対しては賛成9,反対19であった.会長・副会長を評議員とすると2種類の評議員ができることになる.そのため,評議員の中から会長・副会長を選出したらどうか,という意見もある.また,委員会のなかでは,会長・副会長を評議員とした場合に,執行委員に選ばれる可能性もあり,借りに執行委員長になった場合には過重な負担を強いることになる,などの意見があった.>

#### 修正提案

現行規約では、会長は学会を代表し、会務を統括する者であり、対外的(外注先との契約・支払、労基上の契約など)には会長が責任を負う立場にありながら、評議員会での採決に参加できない、歴史的な経緯があったにせよ、一定の責任をもつ代表者を擁することが民主的な団体のあるべき姿と考える。したがって、会長・副会長は評議員会のメンバーとする。執行委員および評議員会議長は従来のように、会長・副会長を除く評議員から選出するのがよい。

### 3. 評議員会の構成と定数について

<この件についてアンケートで問うた内容は,イ)支部枠を設けるかどうか,ロ)支部枠を仮に8とし,現行の50にこれを上乗せするか,どうか,の2つである.イ)に対して賛成15,反対13,ロ)定数の拡大について賛成9,反対ないし要検討19であった.委員会としては,要は支部活動の活性化とそのために支部意見を評議員会へ反映させるシステムを整備することにあったが,説明と設問が不明瞭であったきらいがある.評議員の構成と定数についてはさまざまな意見があり,統一した結論を得ていないので,意見や問題を以下に並列した.引き続き議論をお願いする.>

- 1) 支部枠より地方区選出とすべき意見がある.この場合,地方区をどう設定するか(会員数に比例させる,行政区分で機械的に割り振る,など),選出方法,当選の決め方,などが問題となる.
- 2) 評議員を現在以上に拡大することに多 くの疑問がある.この場合,現行枠の見 直しを行うか.
- 3) 多くのひとに出て貰うためには評議員 の多選を止め、2~3期連続したら1期 休むなどの制度が必要ではないか.

### 4. 執行委員会について

<「中間まとめ」では(1)執行委員会の組織体制と役員について,イ)会務を効率よく行う,口)従来欠けていた部門を補う,ハ)在京評議員でなくとも執行委員を担当できるようにする,二)評議員でなくても適正ある会員に会務に参加してもらう,ために,「執行委員会に関するb,c」の提案を行った.また,(2)事務局長の重要性に

てらし選挙で選ぶことを提案した.アンケートでは(1)について賛成19,反対ないし要討論(広く意見を聞くを含め)8であった.(2)については賛成6,反対18>

#### 修正提案

- 1) 執行委員会組織体制は「中間まとめ」をそのまま提案する(組織図の一部は不足を加え,誤りを訂正).ただし,執行委員会のもち方,部(会)の正副委員長と委員会の委員長との連携,委員会の役割と会議のもち方については意見を聞いた上で更に検討する.
- 2) 事務局長は執行委員会の推薦によって評議員会が承認し、会長が委嘱することにしたらどうか、また、事務局長の任務、位置付けが規定されていないので、運営細則に盛り込む必要がある。
- 5. 各種委員会について

<「中間まとめ」では,ここで示した執行体制改革の全体像について意見をきき,

また、とくに編集委員会について検討が進んでいるので、この方向でよければさらに各種委員会について整理することにしていた、この項は4と関連しているので、4の方向でよければ12月以降、細部の検討を行いたいが、運営財政部と、検討が進んでいる地質学雑誌編集委員会については以下に提案する>

#### 修正提案

- 1) 運営財政部 現在の執行委員会の中から行事,編集委員を除き,広報委員会を加えた組織.学会の日常的運営に関する業務を担当する.庶務,会計・会員,広報の3つの委員会で構成される.部の正副部長は庶務,広報の委員長を兼任することが必要であろう.
- 2) 地質学雑誌編集委員会について次のような案が出されている.
- ・複数(2人)委員長制とし、任期をずらし2年任期とする、委員長は投稿された

- 論文を,その専門分野に適任の編集委員 に送って(編集事務より)担当を依頼す る
- ・専門分野をカバーするに十分な数(8~10)の編集委員(editor)を置く、編集 委員は在京に限らない、編集委員は送られた論文について査読者を決め、原稿の 送付を編集事務に連絡する、査読結果を 検討し、修正の指示を執筆者に編集事務 を通じて連絡、受理、拒否等の判断を行い委員長に送る。
- ・最終判断は担当した委員長が行う。
- 複数の在京編集事務局員 (executive editor) を置き,テクニカルなチェックおよび編集印刷事務に必要な助言を行う。
- ・編集委員長,編集委員,編集事務局員は 編集委員会を必要に応じて開催する(年 2~3回?)
- ・編集委員会は出版編集部会と相談し,委員長および委員を執行委員会に推薦し, 評議員会で承認する.

#### 日本地質学会 組織 (案) 執行体制整備委員会 : 常置 評議員会 : 設立期間限定 会長・副会長 紀 会 運営財政部(会) 執行委員会 庶務委員会 群職員 事務局 会員•会計委員会 支部長連絡会議 広報委員会 - (ニュース誌編集小委員会) │ □ (インターネット運営小委員会) - 各支部 地質災害等の緊急性 を要する各種委員会 学術研究部(会) 行事委員会 (地球惑星科学関連学会連絡会) - (構造地質部会) (房序部会) (情報地質部会) (地域地質部会) - (応用地質部会)(環境地質部会)(堆積地質部会) (火山部会) 各當潜去委員会 - (日本地質学会論文賞築選素委員会) 専門部会連絡委員会 - (日本地質学会表彰等選考委員会) (岩石部会) (地質過程部会)(海洋地質部会) (優秀講演賞選考委員会) 国際交流委員会 選挙管理委員会 環境地質研究委員会 Tectonic Map of Asia 研究委員会 監查委員会 テクトニクス研究委員会 ヒマラヤ地質研究委員会 地層命名規約制定委員会 事業計画委員会, 研究 企画委員会等の学会の 将来を検討する委員会 「地質学と地震」研究委員会) (南極地質研究会) 模集出版部(会) 地 質 学 雑 誌 編集委員会 女性地球科学者の未来 を考える研究委員会 地質学簡集企画 ||出版参昌会 学術会議連絡委員会 The Island Arc 概算委員会 注1) 執行体制改善のためには、現行組織体制や規約の改正を行う必要があるものと 判断し、その案を検討したものである。 現状、検討の中間設備であり、最終答申案ではない。また、図中の各種委員会 については、現在組織されていないものがあり、将来の必要性を考え記載して 普及・教育事業部(会) 普及教育実行委員会 注2) 執行委員会は、阡篷員から選出され、委員長 (1名)、副委員長 (1名)、 各部の部長 (各1名計4名)・副部長 (各1名計4名) 及び別に選挙により選 出される事務局長 (1名) の合計11名で構成される。 地学教育研究委員会 注3) 常置の各種委員会、設置期間限定の各種委員会の委員長及び委員は必ずしも評 職員でなくともよい。ただし、執行委員会が推薦の上、評議員会が承認するも 地質基準策定委員会

## 日本地質学会の財政状況に関心を(その2)

97年度決算(案)と98年度予算(案)報告と会計上の問題点

会計委員会: 滝田良基(委員長), 足立勝治・上砂正一・佐々木和彦(委員)

97年12月の評議員会において,12月の収支金額が未確定ではありましたが,暫定的な97年度決算(案)と98年度予算(案)を報告し,承認いただきました。このたび,97年度の収支金額が出そろい,97年度決算(案)が確定しましたので,98年度予算(案)とともにその概要を報告し,併せて会計状況が逼迫していることを紹介します。ただし,ここで報告する97年度決算(案)と98年度予算(案)は,3月の評議員会で報告・承認をうけ,さらにその後の地質学会総会での承認が必要な会計報告の原案であることをお断りしておきます。

1.1997年度(平成9年度)収支決算 (案)について(1997年3月~1997年 12月)

97年度は、会費年度と会計年度とを一致させるための移行期間として、1997年3月から97年12月までの10か月間を会計年度としています、収支決算(案)を第1表に示します。

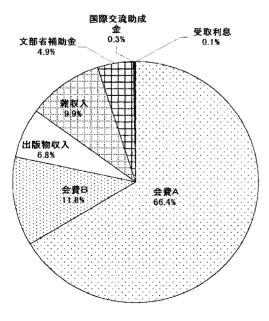
### (1) 収入の部

97年度の収入は8,603万円(対予算費 99.5%)で,ほぼ予算通りでした。

収入内訳は次の通りです(第1図).

### <増収科目>

- ・会費A:会費収入は3,967万円で67万円 の増収です、収入の2/3を占めていま す、会員みなさんの協力で増収となりま した。
- ・雑収入:590万円(構成比10%,以下同様).広告料・別刷代収入で88万円の



第1図 97年度収入内訳

第1表 1997年度(平成9年度)決算書(案) 1997年3月1日から1997年12月31日まで

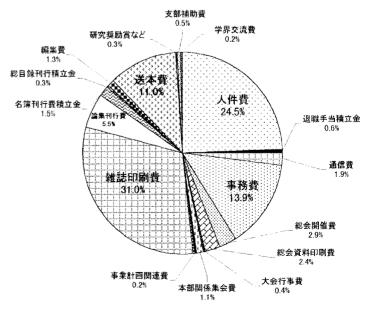
			<u>(単位:円)</u>
I. 収入の部	予算	決算	増減
受取利息	30,000	32,836	2,836
会費A	39,000,000	39,671,872	671,872
会費B	7,450,000	7,035,621	-414,379
出版物収入	4,800,000	4,050,246	-749,754
文部省補助金	2,920,000	2,920,000	0
国際交流補助金	1,000,000	150,000	-850,000
雑収入*1	5,029,658		875,897
当期収入合計	60, 229, 658	59, 766, 130	-463,528
前期繰越収支差額	26,270,342	26,270,342	0
収入合計	86, 500, 000	86,036,472	
44 /- \ IV	DE VELLA (4 0 4 4 6	200 TT \ A-+- +	4-11-11

\*1:アイランドアーク購読料ー時預り金(1,644,000円)含む。ただし、支払いは98年度。

Ⅱ.支出の部	予算	決算	増減
一般費	28, 180, 000	26, 491, 579	1,688,421
人件費	16,900,000	15,832,270	1,067,730
退職手当引当金	400,000	400,000	0
通信費	1,380,000	1,253,174	126,826
事務所賃貸料	9,500,000	9,006,135	493,865
集会費	7,850,000	4,654,540	3,195,460
総会開催費	1,800,000	1,880,836	-80,836
総会資料印刷費	2,400,000	1,547,445	852,555
大会行事費	400,000	284,760	115,240
本部関係集会費	1,200,000	703,753	496,247
研究委員会等	1,050,000	125,396	924,604
事業計画関連費 * 1	1,000,000	112,350	887,650
出版費	32, 350, 000	32, 693, 411	-343,411
雑誌印刷費	18,800,000	20,037,916	-1,237,916
論集刊行費	4,100,000	3,570,000	530,000
名簿刊行費引当金	1,000,000	1,000,000	0
総目録刊行費引当金	200,000	200,000	0
編集費	950,000	807,573	142,427
送本費	7,300,000	7,077,922	222,078
研究奨励費	200,000	200,000	0
役員選挙費 * 2	900,000	6,000	894,000
支部補助費	300,000	300,000	0
国際交流助成費	1,000,000	150,000	850,000
学界交流費	500,000	98,000	402,000
予備費	1,000,000	0	1,000,000
当期支出合計	72, 280, 000	64, 593, 530	7, 686, 470
当期収支差額	14, 220, 000		-7, 222, 942
次期繰越収支差額	14, 220, 000	21, 442, 942	-7, 222, 942

\*1:リーフレット出版なし

\*2:本年度は会計年度移行期であったために支出は郵送費のみ。



第2図 97年度支出内訳

第2表 1998年度(平成10年度)収支予算書(案) 1998年1月1日から1998年12月31日まで (単位:円)

I. 収入の	<b>≐</b> (	予算額	前年度実績	増減
1. 会費収入		51,000,000	39,671,872	11,328,128
替助会!		2,640,000	33,011,012	11,520,720
正会員	•	44,300,000		
院生会員	1	3,800,000		
学生会		260,000		
2. 事業収入	-	19,750,000	11,085,867	8,664,133
論集収入		5,500,000	7035621	-1,535,621
雑誌販売		5,500,000	4050246	
別刷収入		1,700,000		
広告料収入		3.000,000		!
予稿集組	<b>東布収入</b>	2,500,000		
負担金	以入	1,500,000		
普及資料	4等販売収入	50,000		
3. 補助金等	<b>手収入</b>	4,120,000	3,070,000	1,050,000
文部省于	『行補助金収入	2,920,000	2,920,000	. 0
文部省分	\$開講演会補助金収入	1,000,000	0	
国際交流	充補助金	200,000	150000	50,000
その他即	<b>加成金</b>	0	0	
4. その他		2,587,058	5,938,391	-3,351,333
受罪	双利息	30,000	32836	-2,836
雑川	又入*1	257,058	5905555	-5,648,497
is Arc 聯	読料預り金	2,300,000	0	
寄代	<b>†金</b>	0	0	
5. 基本財産	<b>霍受入収入</b>	0	0	
6. 敷金保証	E金解約収入	0	0	
7. 特定引	当金預金取崩収入	1,300,000	0	
名》	<b>等刊行費預金より</b>	1,300,000	0	
当期収入合調	t	78,757,058	59,766,130	18,990,928
前期繰越収3	<b>支差額</b>	21,442,942	26,270,342	-4,827,400
収入合計		100,200,000	86,036,472	14,163,528

注) 前年度は1997年3月~12月の実績

\*1:98年度予算にはIs Arc購読料預かり手数料を含む。97年度は別刷収入、広告料収入を含む。

Ⅱ. 支出の部	予算額	前年度実績	增減
1. 事業費	45,850,000	36,895,951	8,954,049
(1) 集会費	6,950,000	4,529,144	2,420,856
総会・年会開催費	2,500,000	1,880,836	619,164
資料印刷費	1,700,000	1,547,445	152,555
諸集会費	-	703,753	
事業計画関連費	1,000,000	112,350	887,650
研究委員会等	-		C
旅費・交通費	200,000	284,760	
負担金支出	1,500,000	,	
<b>雑費</b>	50,000		
(2) 出版費	37,800,000	31,493,411	6,306,589
雑誌印刷費	22,300,000	20,037,916	2,262,084
論集印刷費	2,000,000	3,570,000	-1,570,000
名簿刊行費	2,300,000	-,	.,
総目録刊行費	2,000,00	_	
編集費	1,200,000	807,573	392,427
送本費	10,000,000	7,077,922	2,922,078
(3) 研究奨励費	200,000	200,000	
(4) 補助費	600,000	425,396	174,604
支部補助費	300,000	300,000	,
研究委員会・専門部会費	300,000	125,396	
(6) 学会交流助成費	300,000	248,000	52,000
国際交流助成費	200,000	150,000	50,000
学会交流費	100,000	98,000	2,000
2. 管理費	34,630,000	26,097,579	8,532,421
人件費	21,000,000	15,832,270	5,167,730
通信費	1,700,000	1,253,174	
役員選挙費	900,000	6,000	894,000
旅費·交通費	10,000	0,000	054,000
<b>ポリ・ス</b> 通月 会議告	750,000		
事務所賃貸料 * 1	6,700,000	9,006,135	-2,306,139
子勿乃其其代 * :	120,000	3,000,133	-2,500,155
ル	1,900,000		
11 辞课明具证符 消耗品费	1,520,000		
維曹	30,000		
##買 3. その他	2,300,000	0	
		0	
is Arc 購読料預り金支出	2,300,000	-	
4. 基本財産繰入支出	0	0	
5. その他の固定資産取得支出	0	1 600 600	1.000.000
6. 特定引当金	600,000	1,600,000	-1,000,000
退職手当引当金	400,000	400,000	
名簿刊行費引当金	0	1,000,000	-1,000,000
総目録刊行費引当金	200,000	200,000	C
事務所移転引当金	0	0	1 000
7. 予備費	1,000,000	0	1,000,000
当期支出合計	84,380,000	64,593,530	19,786,470
当期収支差額	15,820,000	21,442,942	-5,622,942
次期繰越収支差額	15,820,000	21,442,942	-5,622,942

注) 前年度は1997年3月~12月の10ヶ月間の実績

\*1:前年度は光熱費、什器傭品賃貸料、消耗品を含む

増収です、ただし、今年度はアイランド アーク購読料一時預り金(164万円)を 含んでいますので,実質は減収です.

### <減収科目>

- ・会費B: 704万円 (12%). 地質学論集 の販売代金で41万円の減少です.
- ·出版物収入: 405万円 (7%). 地質学雑 誌、リーフレットの販売代金で75万円 の減少です.
- ・国際交流助成金:85万円の減少です. 助成利用者が減少したためです.ただし, 支出も少なくなりますので実質的な収支 には影響ありません。

### (2) 支出の部

支出は7.728万円の予算に対して6.459万 円と減少しました.事務局や会員諸氏の協 力によって,支出を予定より720万円ほど 低くおさえることができました(第1表). 支出の内訳は次の通りです(第2図).

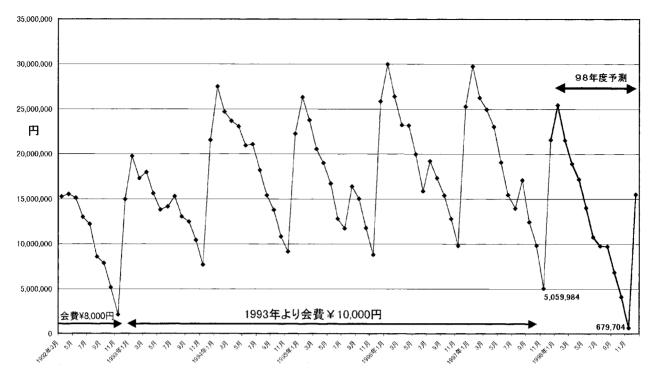
### <超過科目>

・出版費: 3,269万円で34万円の超過で す. 支出の51%を占めています. 超過 したのは雑誌印刷費が増えたためで、論 集刊行費、編集費、送本費などは減少し ています.

### <節減科目>

- ・一般費: 2,649万円で,169万円の減少 です. 支出の41%を占めます. 人件費, 事務費などの節減が大きく、事務局の努 力に負うところ大です.
- ・集会費: 465万円 (7%) で320万円の 減少です.総会資料印刷費(85万円), 本部関係集会費(50万円),研究委員 会・専門部会費 (92万円), 事業計画関 連費(89万円)が減少しています.事 業計画関連費は予定していたリーフレッ トの出版が無かったため、増刷費用の支 出のみでした。
- ・国際交流助成金:85万円の減少です. 前述したように、実質的には収支に影響 ありません.
- ・役員選挙費:予算は90万円でしたが、 会計年度移行期であるために郵送費以外 には支出はほとんど発生しませんでし た.
- ・学会(界)交流費:40万円の減です.
- 予備費:執行せずにすみました。 以上のような支出節減の結果,次年度 事業準備金(繰越金)を1,422万円の予 算に対して, 2,144万円を残すことがで きました.
- 2.1998年度(平成10年度)予算(案) について(1998年1月1日~12月31 日)

予算(案)を第2表に示します。パソコ ンによる会計処理を98年度から導入する のに伴い、収支内訳をより明確にするため



第3図 運用財産の推移と98年度予測

に一般的に使われている会計科目にしましたので,従来の科目とは異なっている箇所があります.

#### (1) 収入の部

当期収入は7,856万円を見込みました. 繰越金を含めれば1億円の予算です. 内訳は次の通りです.

- ・会費収入:従来の会費Aです.95%の 納入率を見込んで,5,100万円としました
- ・事業収入: 1,975万円を見込みました。このうち論集収入は従来の会費B, 別刷収入・広告料収入は従来雑収入に含まれていました。本年度の広告料収入には、会員名簿の広告料が含まれています。
- ・補助金等収入:従来の文部省刊行補助金のほかに,本年度は文部省公開講演会補助金(年会時の普及講演会等への補助)を100万円見込みました.国際交流補助金は97年度実績なみとしました.
- ・その他:約240万円を見込んでいます。 97年度実績に比べて減少しているのは, 従来雑収入としていた別刷収入・広告料 収入を事業収入としたためです。今年度 はアイランドアーク購読料一時預り金等 が雑収入に含まれています。

### (2) 支出の部

当期支出合計は8,448万円を予定しました.この結果,次期繰越金は1,582万円となり,97年度からの繰越金2,144万円を562万円ほど食いつぶすことになります. 内訳の概要は次の通りです.

・事業費: 当期の事業費は,集会費695万

円,出版費3,780万円,研究奨励費・補助費・学界交流費(110万円)から構成され,計4,580万円を計上しました。

- ・集会費:695万円.従来集会費に含まれた諸集会費は管理費,研究委員会・専門部会費は補助費として当期は計上しています。負担金支出とは年会時に徴収した年会参加費を年会実行委員会に渡す費用です。
- ・出版費:3,780万円.雑誌印刷費と編集 費は実績相当分を予定しました.論集印 刷費は,当期刊行予定の3件分で,印刷 費の50%を計上しています.送本費は, 実績相当分に名簿の送料を加えたもので す.今年は名簿を刊行するので,名簿刊 行費を積立金から支出します.
- ・学界交流助成費:実績相当分です。
- ・管理費: 3,463万円を計上しました.このうち,61%を占める人件費は昨年実績相当分の2%増しとしました.事務所賃貸料,光熱費,什器備品賃貸料(コピー機,パソコン等リース料),消耗品(印刷紙等)は従来事務費として一括されていたものです.
- その他: Is Arc講読料預り金支出は,会費と一緒に徴収し,一時預かり金としていたアイランドアーク購読料のBlackwell Science 社への支出です.
- ・予備費:従来通り100万円を計上しました。

### 3.会計上の問題点

地質学会の会計上の問題点が2点ありま

す.

#### (1) 構造的問題

一つは構造的な問題です.97年度決算 案で見ると主要な収入源である会費収入 (会費A)は約4,000万円でした.これに対 して、学会の基本的な活動を支えるのに必 要な一般費(人件費等)と出版費とを合わ せると約5.900万円となります。これだけ で、会費収入を越えます、地質学会の他の 活動は,会費B(論集収入)や出版物収入 等の事業による収入によってまかなわれて いることになります、このように、現在の 地質学会の財政は構造的に赤字体質となっ ています、これが、前年度の繰越金を食い つぶしている原因です.97年度は単年度 決算での赤字は483万円でしたが,来年度 の単年度赤字は590万円程度になる見込み です

このように,地質学会の財政は,前年度からの繰越金を食いつぶすことによって成り立っています.この構造的な問題点は,97年12月の評議員会で設けられた財政問題検討委員会(野村哲委員長)によって現在検討されています.

### (2) 運転資金の不足

問題点の二つ目は,手持ちの運転資金 (運用財産)が11月末から12月中旬にかけ て最も少なくなる点にあります。97年度 の支出でみると,12月には期末手当を含 めた人件費(330万円)と事務局賃貸料60 万円,雑誌印刷費・発送料約260万円,計 650万円が少なくとも必要でした。ところ が,11月末の手持ちの運転資金は506万円 でしたので、これだけでは不足しました.しかし、支払いを少しずらすことによって何とか急場をしのぎました.12月には次年度の前納会費が入りますが、月末に集中しますので、上記費用の支出には時期的に間に合いません.このように、地質学会の毎月の支出は、前年度末から年度始めに納入された会費収入を主な財源としていますので、これが、会費の前納をお願いしている理由です.一般の企業ですと、このような一時的に資金が不足する場合には銀行から融資をうけて急場をしのぎますが、任意団体である地質学会ではこれができません(貸してくれません).

### 3. 財政破綻は時間の問題

98年度予算案をもとに,98年度の毎月の運用財産の推移を過去5年間(92~97

年度)の実績をもとに予測してみました. 第3図に92年~97年度の実績とともに示します.

第3図に示すように,今後これまでと同じような会計状況が続くと,今年度の11月末には運用財産が70万円程度となり,12月の支払い資金が600万円近くも不足することになります.もちろんこのような事態にならないように支出を押さえる必要がありますが,この傾向はさけられないでしょう.たとえ,今年度は何とかしのいだとしても,99年度はとてもやっていけません.99年度末には赤字となってしまい,財政は破綻します.

## 4.会費値上げのみで対応できるのか?

今のままでは、少なくとも99年度には

会費を値上げせざるを得なくなるでしょうが、それで解決するでしょうか。たとえば、会費を2,000円値上げした場合5千人の会員で1,000万円の増収となります。しかし、毎年500万円の単年度赤字を出すような財政状況では、値上げによる増収分は2年分にしかなりません。どうしたら良いでしょうか。さらに、会費を上げるしかないのでしょうか。皆さんはいくらまでなら会費を払いますか。抜本的な解決策はないのでしょうか。

現在,赤字体質の問題もふくめて財政問題検討委員会で検討をお願いしていますが,委員会にまかせるばかりでなく,会員皆さんにも考えていただきたいのです.なにかよい方策はありませんか.多くのご意見をお寄せください.

## 掲

## 示

## 板

### 中央構造線「月出露頭」のアクセス紹介

地質学雑誌1997年11月号(vol. 103, No. 11)の口絵で,紀伊半島中部,中央構造線の大露頭(三重県飯南郡飯高町月出ワサビ谷)を紹介した.各方面から,さらに詳しいアクセスを紹介してほしいとの要望があるので,ここに改めてアクセスの紹介をしたい.

飯高町の中央部には、紀の川との分水嶺・高見山を源とする櫛田川が東流している。この櫛田川を遡るようにして、松阪市から国道166号線が東西に走り、県境の高見トンネルを抜け 桜井市を経て大阪府羽曳野市に至る。古くは、和歌山街道として賑わいを見せた、主な集落は、櫛田川の河岸段丘地に点在する。

### 1. 車を利用する場合:

伊勢自動車道「松阪IC」から国道166号線を通り,桑原まで約55kmである.

また,名阪自動車道「郡山IC」から桜 井市を経て国道166号線を通り,桑原まで 約65 kmである.桑原から町道月出線を通 り,月出露頭まで約5 kmである.所要時 間は大阪から150分,名古屋から150分で ある.

### 2. 鉄道・バスを利用する場合:

JR・近鉄線「松阪」駅西口から,三重 交通バス 波瀬方面行きに乗車する.

上木梶行 (1日3往復) 桑原バス停で 下車する (松阪 桑原間 約100分).



桑原から月出露頭まで徒歩5kmである。

ホテルスメール行 (1日5往復) 森バス停で下車する(松阪 森間 約90分). 森タクシーを利用して,月出露頭まで行く.森タクシーは予約しておいた方がよい.電話 05984-6-0074. 飯高町役場行(1日19往復) 飯高町役場前で下車する(松阪 宮前間 約55分). 飯高タクシーを利用して,月出露頭まで行く.飯高タクシーは予約しておいた方がよい.電話 05984-5-0050.

なお,三重交通松阪営業所への問い 合わせは,電話 0598-51-5240.

### 3. 宿泊施設:

グリーンライフ山林舎(波瀬)

電話 05984-7-0326

民宿「月出の里」(月出)

電話 05984-7-0827 ホテルスメール(塩ヶ瀬)

電話 05984-5-0003

4. お問い合わせ:

〒515-1592 三重県飯南郡飯高町宮前 180 飯高町役場企画調整課

電話 05984-6-1111 Fax 05984-6-1092

(諏訪兼位・大岩義治)



## <sup>糕</sup>大和地質研究所

当社は3人の地質技術者により,平成3年4月に設立されました.創立時の社員数は6名でしたが、現在は13名になりました. 小規模ではありますが,地質路査を基本とした解析主体の地質コンサルタント会社をめざしております.

近年,建設工事や地域開発計画を実行に移すそうとすると、規模の大小に関わらず、行政当局の許可ばかりでなく、地元の人々の理解が必要となっております、しかし、周辺環境の保護や防災上の理由、人々の意見の多様化などで、所定期間内に関係各位の理解を得ることが困難になってきました、理解を得られるかどうかは、科学的資料に基づく適切な計画がなされているかどうかによります、また、その考慮すべき項目も多様化しています。

こうした状況に対処するために,当社では,社員各自に1)学界レベルでの論議にひるまない学識と技術力,2)様々な分野の研究方法や成果を自分の仕事に活用できる頭脳の柔軟性を身につけることを求めています.上記2点に関して,当社は会社をあげて次のようなサポートを実行しております.

### 1) 社員の技術力向上

当社では、社員各自の技術力が向上することによって、発注者の意向を的確に把握でき、よりよい解決策を提供できると考えています。そこで、社員各自が日々の業務を通して技術力の向上に努めることに加えて、技術力の更なるアップを目的として、大学の社会人留学制度などのシステムを活用しております。現在、当人の希望と業務とのかかわりから、新潟大学の博士課程に1名、ボーリング専門学校に1名を留学・入学させています。このような意欲的な社員の技術力向上の努力は全社員が支えています。

### 2) 研究方法や成果の活用

大学などとの共同研究成果を実社会に応

用できる形に加工したり,成果を発展させるなどして,当社が研究機関と社会をつなぐ架け橋となることをめざしています.そのため,現在の学界の研究状況に注目し,その適用可能性の検討を行っています.当社はこれらの活動及びその成果の発表についても積極的でありたいと考えています.

業務の一部が発注者と共同の学会発表あるいは公表論文とされた具体例として,ここでは 光ブリーチングと パイプロコアリングについて紹介いたします.

#### 光プリーチング

自然および人工放射線の照射に伴って増加する石英結晶中の信号強度は,太陽光などの刺激光を浴びるとゼロセットされるとされています.TL(熱ルミネッセンス)年代測定において,aゼロセットを可能にする刺激光は紫外線であるが,地質時代を通じてゼロセットさせるに足る強度の紫外線が地上に降り注いでいたかは不明であること,b太陽光の場合,日本では完全にゼロセットされていないが,広域テフラを合んだ海岸砂を例にとると広域テフラの年代値に相当する年代が算出可能であることを明らかにしました.

#### バイブロコアリング

これは高知大学の岡村先生が沖積層などの軟質土を簡単に採取するために考案された方法です。この方法を用いて,多数の地点で厚さ数mの沖積層(細礫サイズの粗粒な堆積物でも採取可能)を,短時間で容易に、しかも低コストで採取することができ,露頭欠除区間でも地層の層相変化を追跡するという,調査の目的を果たすことができました。

当社は株式会社である以上,存続し続けるためには金銭的な土台を確保しなければなりません.そのためには社員の学識と技術力を伸ばすことが最重要と考えています.技術力向上に取り組む社員の努力が学界に通じるレベルの研究内容となりうるよう,全社員が切磋琢磨できる会社をめざしています

#### <主な業務内容>

資料調査,地表調査,環境調査,総合解析, 安全審査・地盤関連環境アセスメント・裁判 対応,火山灰・岩石薄片・微化石鑑定,年代 測定(14C,ESR,TL),古地磁気測定,電磁 探査など

### <会社概要>

設 立:平成3年4月 資本金: 30,000,000円

登 録:地質調査業者/建設コンサルタント

有資格者:技術士3名,理学博士1名

事業本部:〒960-8043

福島県福島市中町 4-20 ユナイテッド福島中町ビル 404号

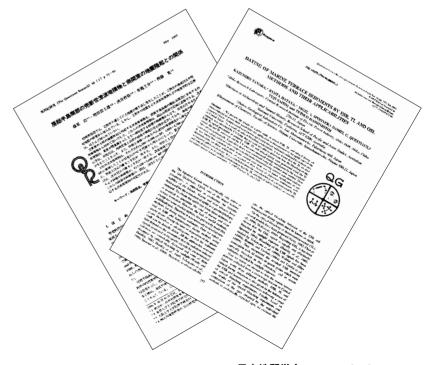
電話 024-528-5735

Fax 024-528-5733

研究本部:〒980-0824

宮城県仙台市青葉区支倉町2-51 ウエストパークビル5F

**電話** 022-222-2145 Fax 022-222-1884





秩父小野田(株)は,明治14年創業の小野田セメント(株)と大正12年創業の秩父セメント(株)の合併によって平成6年10月に誕生したセメントのトップメーカーです.

私たちは21世紀の豊かな未来を実現するため約250社の独創的な企業集団を形成し、資源の有効利用、環境保全へ向けて、その技術をさまざまな事業に生かしています。

超低発熱セメント,超速硬セメント,高流動・高強度セメントなど付加価値の高いセメント製品を開発すると同時に,その技術を生かして,新建材,機能材,ファインセラミック,パイオテクノロジー,そして環境資源問題を捉えたリサイクル事業なにも取り組んでいます.また,こうした多角化の一環として,東京ウォーターフロントをはじめとする,当社保有の不動産開発と事業展開にも着手しています.

セメントの歴史は古く, エジプトの建造に使われた焼石膏と砂からなるモルタルに始まると言われています. その後, 多くの工夫・改良が重ねられ, 1824年英国の煉瓦工ジョセフ・アスプディンが現在の組成に近いポルトランドセメントを発明し, これを基礎にさらに改良研究が行われ今日のポルトランドセメントができあがりました.この間, セメントの製造技術も長足の進歩をとげ, コンピューターコントロールによる今日の大量生産方式が確立しました.

しかし、大量生産、大量消費時代が終わり、低成長期に入った現在、セメントに課せられた使命も多様化してきており、省エネルギー化への取り組みはもちったのこと、さらに高炉スラグ、フライアシュ、廃タイヤ、汚泥、都市ごみ等さまな廃棄物の資源化活用へも積極的に取り組み大きな成果をあげています。またダムや建造物の基礎などのマスコンクリート高、動・高強度セメントの開発も大きな課題となっており、今後も基礎資材としてセメリトの重要性は増していきます。私たち以上の重要性は増していきます。私た財務力をさらに未来に活かそうと考えています。

また、私たちは、いちはやく環境保全に目を向け、産業廃棄物の再資源化技術を開発・実践してきました。この経験をもとに、一般廃棄物の分野においても、都市ゴミ焼却灰や下水汚泥からつくるニューセメント「エコセメント」の開発など、自然を手本にした資源の循環を事業活動のテーマに積極的に取り組んでいます。

石灰石資源を排煙脱硫材として火力発電 所,化学会社などのユーザーに供給し,大 気汚染,酸性雨などの環境破壊の防止の役 割を担うとともに,その過程で生成された 石膏を石膏ボードやセメントの原料として 再活用しています.

石炭火力発電所で発生する石炭灰はセメントの粘土原料の代替や混和材として利用されてきましたが,近年の技術開発により土木・建築の人工骨材,シールド工事の高性能裏込材,河川の浄化用の媒体など,多様な分野での貴重な産業資源となっており,私たちは再資源化の成果を着々とあげています。多様化する産業ニーズに応えるため当社は卓越した粉砕,分級技術を駆使し,各種加工製品から,製品づくりに不可欠な無機材料まで次々に開発,時代にあわせた商品を提供しています。

私たちは創業当初から海外市場へ目を向 けてきました、今日では高品質のセメント を各国へ輸出するのはもちろん、世界各地 で合弁工場をはじめとするさまざまな事業 を展開しています。アジアにおいては1958 年,三井物産(株)と現地会社との3社によ る合弁会社、シンガポールセメントを設立、 現地の需要に応え高い評価を得ています。 また,1987年には,初めて米国(アメリ カ合衆国)への投資を行い、米国北西部に おけるセメント販売、生コン骨材事業を開 始. '90年に南カリフォルニアのカリフォ ルニア・ポートランドセメント社を買収 セメントから生コン、骨材にいたる事業を 展開,米西海岸一体をカバーしています -方,中国では大連と南京でいずれも三井 物産(株)と現地パートナーとの合弁による セメント工場の建設に着手,大連は'92年7 月,南京の工場は'96年5月に竣功し,い ずれも順調に生産を続けています.さらに 南京,上海,宜興,深巨の各市でセメント ターミナル及び生コンクリートの合弁会社 を設立するなど,川下の事業展開を積極的 に進めています. '96年9月にはフラン ス・ラファージュ社と中国側パートナーと の3国合弁による上海での石膏ボード事業 への進出も決めています、これら、中国で の各事業を統括し効率的な運営を進める目 的で'96年には北京に秩父小野田投資有限 公司を設立しました。

### 鉱 業 部

秩父小野田(株)で資源開発・調査の担当 部は鉱業部です。

鉱業部は採鉱技術者からなる鉱業グループと地質技術者からなる資源技術グループ から構成される鉱業・資源技術者の集団です.

鉱業部は各工場のセメント原料地の調査・開発・採掘・選鉱・原料供給の総括, 中長期原料政策の立案・実行,骨材等資源 事業・海外事業の原料に関する業務を行っています.

また,当社グループの鉱業・資源技術センターとして,国内外の鉱物資源・骨材等の調査開発計画並びにグループ関係会社に対する資源技術の支援も実施しています、中でも資源技術グループは,地質技術者の集団であり地質学会に最も関係も深く,地質学雑誌の論文も資源調査のデータの一つとして利用しています.

鉱業部は鉱山・資源に関する新技術を積極 的に取り入れています.ここ数年の実績を 紹介しますと次のテーマが挙げられます.

「鉱山作図システム「MINESCAPE」の開 発・導入」

「鉱山開発における自生植物種の保存と 増殖」

「採掘切羽の地下空洞探査への地下レー ダーの導入による保安確保」

これらのテーマは工場(鉱業所)或いは 研究所との共同研究で,石灰石鉱業協会の 業績賞を受賞しました

また,石灰石をはじめとするセメント原料の採掘に伴って形成される残壁の緑化についても現在,研究所と共同で研究・試験を実施しており,自然と調和した鉱山運営を目指しています。

秩父小野田(株)は来年10月には日本セメント(株)との合併を予定しています。より社会に貢献でき国際競争力のある企業を目指し、現在準備を進めています。

今後も秩父小野田(株)は社会のニーズに 的確に応え世界に貢献していきます。この ページをご覧になって興味を持たれた方は 是非秩父小野田(株)のホームページにアク セスしてみてください。

### 会社概要

社 名 秩父小野田株式会社

本 社 〒105-8408 東京都港区西新橋2-14-1 資本金 347 億円

売上規模 2,774億円(平成9年3月期,関係 会社は含まない)

代表者 代表取締役社長 平賀一次 従業員 4,147人(平成9年3月31日現在在籍) ホームページUR L http://www.iijnet.or.jp/COC/ 事業内容

セメント,レディーミクストコンクリート 土木建築材料 土石鉱物採掘加工 ファインセラミック

電気・通信・電子機器 情報処理 , ソフトウェア

廃棄物処理・再生利用 不動産業



### OD21, IODP, CONCORD について

### 1. はじめに

米国主導で開始された深海掘削計画 (ODP: Ocean Drilling Program)は, 21 か国が参加する国際共同研究計画へと発展 してきましたが, 平成15年(2003年)に 計画の区切りがつけられようとしていま す.現在,世界中で21世紀における地球 科学の推進、それに連携した深海掘削研究 についての新たな取り組みについて検討が 始まっています 海洋科学技術センターは, 泥水循環装置と防噴装置 (BOP: Blow Out Preventor)を導入したライザー掘削船の 開発とそれを用いた国際共同研究計画「21 世紀の深海掘削計画 (OD21: Ocean Drilling in the 21st Century )」を提案して います. 本計画は, 世界の地球科学コミュ ニティから支持を受け、現行ODP計画と 統合し,新たにIODP (Integrated Ocean Drilling Program) として,現行ODP の発 展的後継としてその実現を目指そうという 共通認識ができ上がりつつあります。ここ では、この経緯と概要について紹介しま す.

### 2. OD21 **の経緯**

1980年代の後半に,科学技術庁/海洋科 学技術センターは,21世紀の地球科学関 連研究の飛躍的な発展を目指して、その最 も効果的な施策とは何であるかとの検討を 行いました. 当時は地球環境変動研究 (Global Change) の重要性が次第に広く認 識されてきた時代であり、1985年から開始 されたODP計画の成果が次第に公表され てきた時代でした、この検討の中で、 ODP計画が果たしている地球科学への重 要性が再確認されるとともに技術的な制限 (掘削深度2,000mを越す地殻下部への掘削 の困難さと炭化水素賦存域での掘削不可能 等)が認識され、これを解決することによ って地球科学へ大きな寄与が期待されると いう提言がなされました、海洋科学技術セ ンターは、1990年度から「深海掘削シス テム」の研究を開始しました、そして 1993-4年までに技術の一通りの検討を終 え、ODP計画の技術的制約を克服する技 術として泥水循環を可能とするライザーシ ステムと防噴装置を導入することを基本と した開発計画案の作成およびその技術的実 現性についての自信を深めてきました.こ

れを契機に,現行ODPとの交流を緊密に 行いはじめ、各国の掘削関連研究者や研究 機関等とも連携を深める努力を開始しまし た.1994年6月には,科学技術庁の深海掘 削研究会(委員長:奈須紀幸東大名誉教授) により,本計画の全体構想の骨子(科学目 標,技術開発等)を設定した報告書が発表 されました.この報告書によって「OD21 計画」という名称が初めて使われました. なお, OD21 計画の全体構想は, 1994年夏 のODP執行理事会(EXCOM)に提案さ れ、ODP側は本計画を支持する決議を行 いました、ODP 側も独自に純粋外部研究 評価 (The Ocean Drilling Program Mid Term Review Committee Report/1996年1 月発表)や次期計画 (ODP Long Range Plan: 1996年3月公表)の検討作業を実施 し、将来計画に対してOD21を見据えた提 言を行っています. いずれの評価・検討も 2003年以降(ODP第3期終了後)に, OD21計画と連携し、ライザーレス掘削船 (現行ジョイデス・リゾリューション号相 当)との2船(あるいはマルチ)運用体制 を基本とした計画の実現を目指すことが、 今後の地球科学の発展に不可欠であるとの 提言・報告でした、海洋センターでは、そ の後もライザー科学掘削船を総合的な観点 から検討し、問題点やそれらの解決策を研 究する全体システムの検討を現在も継続中 です. 一方, それと平行して, OD21 計画 が国際・国内的な幅広い理解,支持をさら に受けることを目指して、様々な国際会議 を開催・参加し, ODP と連携して, 計画 の根幹である科学、技術、運営に関する共 通認識を構築する努力・作業を続けていま す.

### 3. OD21 計画の目的

1997年6月には新たに科学技術庁の深海掘削懇談会(座長:奈須紀幸東大名誉教授)により報告書がまとめられ,ライザー掘削船による,(a)地球変動予測への寄与,(b)海洋プレートの成因やそのダイナミクスの解明,(c)地震等の地殻変動プロセスの解明,(d)新しい資源の探求,(e)人類の活動領域の拡大等を目指した基本全体計画と計画運用の指針がまとめられました.計画の根幹となる科学計画の検討については,海洋センター/東大海洋研/ODPと共

催で1997年7月に、外国から第1線の科学者80名以上を含む150名以上の参加により、ライザー掘削会議(CONCORD)を開催し、ライザー科学掘削船を用いた科学計画の大目標を設定しました。なお、国内の検討準備体制としては、ODPの日本代表機関である東大海洋研と協力して、ライザー掘削会議国内連絡委員会(委員長:久城育夫岡山大教授)のもとに、WGメンバーを広く募り検討を行いました。3日間にわたって開催されたCONCORD本会議(共同議長:久城育夫教授/H.C. Larsen (Denmark))において、

- ・地震発生帯の諸過程の直接的な掘削・ 計測による地震活動の理解
- ・地下深部生物圏研究
- ・中生代地層の標準情報作成
- ・テクトニクスとモンスーン気候発達・ 関連の解明
- ・温室地球 (Greenhouse World) の解 明
- ・海洋地殻下部とモホ面への超深部掘削 研究
- ・マントルダイナミクス,地球変動,大 陸リソスフェアの分裂の研究
- ・掘削孔利用の計測技術開発

等の具体的研究項目が設定されました.特にライザー掘削船を用いた地震発生帯の研究について高いプライオリティをつける必要があることが合意されました.

本計画の実現に向けては、国内外ともに大きな課題が残っていますが、地球科学において掘削船は、今や生物学における電子顕微鏡、天文学における電波望遠鏡ともみなされる基本研究設備になろうとしています。その実現のため皆さんの支援およびご意見をお願い致します。なお、深海掘削懇談会報告書およびCONCORD報告書(英文)をご希望の方は、海洋科学技術センターOD21準備室(電話 0468-67-3477、kyokoa@jamstec.go.jp)までお知らせください。

海洋科学技術センター OD21 準備室田中武 男

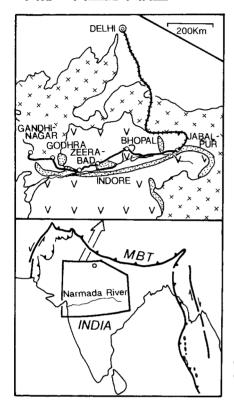
Japan Marine Science and Technology Center (JAMSTEC), 2-15 Natsushima-cho, Yokosuka 237, Japan, E-mail: tanakata @jamstec.go.jp, JAMSTEC Home Page: http://www.jamstec.go.jp Tel: +81 46867 3909, Fax: +81 468 66 5541

(深海研究部長 木下 肇)



### 学協会・研 究会報告

### IGCP350**野外討論会報告:デカン高原中** 西部の白亜紀堆積盆



第1 図、巡検コース と周辺の地質概略、 先白亜系基盤岩類 (×),上部白亜系 (点部),デカントラ ップ(V)

今年度が最終年度となるIGCP 350の国際研究集会が,昨年12 月7日から同15日の日程でインドで開催された、今回の研究集会 は、インド亜大陸上に形成された白亜紀堆積盆についての現地討 論会を主な内容とし,7日間の巡検とその後の討論会が企画され た.日本からは,IGCPリーダー岡田博有以下,平野弘道(早大), 木下 修(大阪府大),久田健一郎(筑波大),鈴木茂幸(岡山大), 八木信幸 (ソーワソフト(株)), 坂井 卓 (九大)の7名が参加 した.他,韓国,フィリピン,中国,ロシア,スペイン,フラン ス,ドイツ,アメリカなど9か国20名の参加であった(写真1). この野外討論会のために受け入れ側のインドでは、インド古生物 学会,ラクノー大学,インド地質調査所ならびにインドIGCP 350のワーキング・グループの総勢29名に及ぶ組織委員会(議 長: B.S. Tewari教授)が準備され,万全の体制で臨んで頂いた。 また、インド国内からは多数の案内補助者の協力があり、大がか りなパーティとなった.ここに長距離の巡検のご案内を頂いたS. Kumar 教授, U.B. Mathur 博士, D.M. Mohabey 博士, M.P. Singh 教授, S.K. Tandon 教授を始め, 多くの関連各位に心より 感謝します.

この討論会は、集合場所のニューデリーを出発点としてジャパプールへ南下した後、西に向かってボパール、インドール、ジーラバッド、ゴディラ、を経由し、最後にガンディナガール(アーメダバード)にて解散という、全行程が約2000kmに及ぶほぼインド亜大陸横断の旅となった、デリーからジャパプールへは夜行



写真1.インドIGCP350野外研究集会の全メンバーのスナップ Zeerabadのゲストハウス前、当地では寝袋で2夜を過ごした。

列車(ゴンドワナ号)で移動し、その後は、ラクノー大学の大型パスを使用させて頂いた。ゴディラでは狭い悪路のためにインド地質調査所のジープを用意して頂いた。初日のジャパルプールでは内外の全メンバーが一堂に介して自己紹介を行い、主案内者のKumar 教授から巡検計画と地質のアウトラインの説明を受けた。最終日の15日は、ゴディラ州ゲストハウスにてテクニカルセッションが開催され、白亜紀問題について整理・討論した。インド中西部に分布する白亜系は、これまでに我々がIGCP 350で見学してきた東・南アジアのむしろ活動的縁辺域の白亜系とはかなり異質な内容をもち、大いに興味をそそられる対象であった。本報告では紙面の都合上、2、3の関心事についてのみ触れる。

#### 1. インド亜大陸中西部の白亜紀堆積盆

インド亜大陸に発達する白亜紀堆積盆のうち、中西部のデカン 高原を東北東-南南西の走向で西側に開いたナルマダ盆地 (Narmada Basin) は白亜紀前期に始まった地塊断層運動によっ て形成された顕著な地溝盆にあたるとされている、堆積盆の起源 や帰属の問題については、最終日の討論会でも重要課題の一つに 挙げられた、堆積盆のテクトニックな位置づけについては明確な 結論を導くに至らなかったが、インド亜大陸がジュラ紀末にイン ド洋の拡大を伴ってアフリカ大陸から分離した際にトランスフォ ーム断層の大陸側延長における破断性地溝盆にあたるかも知れな い、この地溝を埋積する堆積物は上部ゴンドワナ系に対比される 下位の上部ジュラ系 ~ 下部白亜系(東部のJabalpur 層および西部 のNimar 砂岩層)とこれを被覆する上部白亜系 (Lameta 層およ びBagh層)が識別されている.さらにこれらを覆うデカン・ト ラップには溶岩流間に非海成の最上部白亜系 (Intertrappean)が 挟まる、特に, Lameta 層は恐竜の骨格および卵の化石を多産す ることで良く知られている.最近,Lameta層の古環境に関する 研究が急テンポで進行している中で、この巡検はインドの白亜紀 研究の最前線を見せていただく好機であった.

### 2. ナルマダ地溝の白亜紀堆積物

ナルマダ地溝の堆積物は先カンブリア紀の結晶片岩,結晶質石灰岩,花崗岩類などを基盤とし,これらを顕著な不整合で被覆するごく緩傾斜の砂質 ~ 石灰質堆積物からなる.東部と西部とで若干岩相・生物相の特徴に違いが認められ,西部に海成層が広く出現する.

東部のジャパルプール地域の中生界層序は,下位より上部ジュラ系~下部白亜系 Jabalpur 層,これを不整合に被覆する Lameta 層,さらにデカン・トラップが重なる層序をもつ,Lameta 層は下位より緑色砂岩層,下部石灰岩層,班点状ノジュール層,上部石灰岩層および上部砂岩層の層序に区分されている.西部の

Bagh地域では,下部白亜系Nimar砂岩層とこれを不整合に覆う上部白亜系Bagh層,その上位のLameta層,これらを覆うDeccan Trapからなる層序に区分されている。本巡検は,ジャバルプルからアーメダバード付近に至るナルメダ川およびその支流域を西方へ移動しながら,東部のLameta層およびこれに対比される西部地域のBagh層を中心とし,その上下の層序を幾つかのコースで観察した。

東部地域のLameta層の堆積環境に関しては、海成か非海成かでインド国内で論争が展開されている。これまでの研究ではLameta層は海成層とみなされ、その根拠にThal assinoidesによる生物擾乱作用が挙げられていた。最近、Tandon氏らは生痕とみなされていた鉛直の構造が植物根による石灰質ノジュール(Rhizoconcretion)であること、石灰質堆積物中に干裂構造が見いだされることなど土壌化のプロセスを反映した堆積相を識別し、Lamata層最下部の緑色砂岩層が分岐河道に、また、上位の石灰質堆積物は湖沼の蒸発乾湖および湖沼縁辺でのsheet floodの堆積物とする説明を示した。

一方,西部地域では潮汐堆積物からなるNimar砂岩層,浅海性石灰質堆積物のBagh層,石灰質砕屑岩層を主とし,河口砂州,潮間帯,そして最上部に河川相をもつLameta層を観察した.ここでは,各累層間ならびに珪化木層を含むLameta層最上部などの層序・岩相境界のシークェンス層序学的問題点が議論となった.シークェンス層序学的アプローチに関しては,現在,インド国内で高いレベルの議論が展開されている.堆積相や酸素同位体組成の解析結果と合わせて,遠からず優れた研究が出されるに違いない.

### 3. 恐竜の谷

これまでにナルマダ地溝の白亜系からは,数多くの地点から恐竜の骨格化石とともに卵の化石の産出が報告されてきたが,その層準は上部白亜系 Lameta 層に集中している.卵化石はこれまでに約8,000 個が確認されているとのことである.

我々が最後に訪れたゴジュラット州 Balasinor 地方 Rahioli はまさに恐竜の谷と呼ぶのにふさわしい場所であった。小丘状の高台の露出全体が恐竜骨を含む地層で,足元には大小の無数の夥しい骨片,卵の破片,そして恐竜の巣の化石が散在している(写真2)、恐竜の骨格には,肉食竜のメガロザウルス,竜脚類,鳥脚類などが含まれ,恐竜の巣の一産地では,わずか50m×10mの面積に,8種類40個の巣が確認されている。卵の表面には元々の生々しい表面構造も認められるものもある。卵化石はしばしば複数個が集合した産出状況を示すことから,恐竜の巣にあたるもの考えられている(写真3)、当地の恐竜骨を含む Lameta 層は土石流的な性



写真2. ゴジュラット州Rahioliの恐竜骨格化石の産状. 手前に大きな 脊椎骨の断面, 先に骨格破片が含まれている. 白い骨は比較のために おいた現世の小動物のもの.



写真3. ゴジュラット州 Rahioli の恐竜の巣の産状.7個の恐竜の卵の化石(露頭断面でほぼ完全な円)が集合した巣で,周囲は淘汰の悪い石灰質砂岩.

質を示し、骨化石の産状も若干移動した様相をもつ.しかし、破損を免れた卵化石の豊富さとおびただしい恐竜骨格から見る限り、このナルマダの谷が当時の恐竜達の大繁殖地であったことを疑う余地はない.

インド古生物学会とインド地質調査所はこの地域を恐竜公園として保存する働きかけを行っている.現在,これらの化石は何ら保全も計られず放置されたままになっているが,一日も早く露頭の保護・保存が計られ,世界有数の恐竜化石公園が誕生する日を待ちたいものである.

(坂井 卓)



### 日本地質学会ニュース読者の皆さまへ

新しい日本地質学会News をご覧いただいた皆さまのご意見をお待ちしております。地質学会事務局またはニュース担当宛に,ニュース誌でお読みになりたい情報や記事などのご要望,掲載記事や企画へのご意見など,ファックス・電子メールでお送りください。また,ニュース誌の表紙を飾る地球科学的な写真のご投稿もお待ちしています。

なお,いただいたご意見はニュース誌に掲載させていただく場合がありますので,ファックスでご意見をいただいた場合には追ってフロッピー等で原稿をお送りいただければ幸いです.

日本地質学会編集事務局 Fax: 03-5256-5676 E-mail: geosocjp@ra2.so-net.or.jp

### 韓国地質学関連学会連合英文雑誌"Geoscience Journal"の創刊

韓国地質学会は1997年に創立50周年を迎えたのを機に,地質 学関連学会連合の英文雑誌 "Geoscience Journal"を創刊したの で紹介したい.

韓国地質学会ではこれまで韓国地質学会誌 (Journal of the Geological Society of Korea)を年8回刊行している.投稿論文は 韓国語・英語論文が混合していたが、基本的には韓国語雑誌であ る. 英文誌創刊に当たり.編集委員長のS.K.Chough 教授は次のよ うに述べている。「当学会もまた世界的な経済危機に伴う天然資 源の探査・開発の縮小に直面した今,この危機を克服し,生活の 質を高めるには基礎科学の振興しかないことを認識しなければな らない、創成的研究の必要性はここにある、次の世紀に直面する 諸問題(地球温暖化,資源枯渇など)克服のためにも基礎科学を 重視しなければならない 地球科学は物理学の派生科学ではなく, これまでの努力で地質学としての基本科学の体系を作り上げてき た、韓国地質学会誌のこの数年来の傾向として、英語論文の急増 があり、雑誌の性格を改める必要に迫られた、そこで新雑誌 "Geoscience Journal"を創刊し,主として韓半島とその周辺海域 ならびに東北アジアを視野においた研究活動を発展させることに した、本雑誌は地質学、地球化学、地球物理学、岩石学、構造地 質学,テクトニクス,古生物学,堆積学,環境地質学,海洋地質 学,資源地質学,鉱物学,石油地質学など地球科学の全分野の質 の高い論文刊行を目指している、斬新で、議論を巻き起こすよう な論文を歓迎するとともに迅速な出版を約束する」と、

"Geoscience Journal"は韓国地質学会のほか韓国資源環境地質学会,韓国地球科学会,韓国古生物学会,韓国鉱物学会,韓国応用地質学会,韓国石油地質学会,韓国地下水環境学会との連合誌で,年4回の発行(3,6,9,12月)となっている。編集委員会には,W.R. Fitches (U.K.), J.C. Ingle, Jr. (U.S.A.) W. M. Moon (Canada), A. Taira (日), T.F. Yui (台湾)などの外国研究者も連なり,意欲的である。

参考までに,第1巻1号(1997年3月)と第2巻2号(1997年6月)の目次を掲げる.

Vol. 1, No. 1 (60p):

K. H. Chang et al. : Cretaceous stratigraphy and geologic history of medial Kyongsang Basin : tectonics and volcanism

- S. Naseem et al.: Lithiophorite and associated manganese mineralization in Lasbela area, Balochistan, Pakistan
- K. Lee and J. Lee : Geoelectric study on the probable seismic segment boundaries of Yangsan fault zone
- K.M. Yu et al.: Albitization of feldspars in sandstones from the Gohan (Permian) and Donggo (Permo-Triassic) formations, Gohan area, Kangwondo, Korea
- W. Kim and J. M. Lee: The equation and properties of a ray path in a linearly varying velocity field
- B. C. Kim et al.: Provenance of Cretaceous sandstones in the southeastern Yongdong Basin, Korea: CHIME geochronology of detrital monazites
- K. Yang : Glass inclusion in quartz phenocrysts of rhyolites, Mt.Jang, Pusan, Korea
- I.S. Lee and K.H. Park: A preliminary sulfur and lead isotopic study of lead-zinc deposits in the Meixian area, Fujian Province, China

### Vol. 1, No. 2 (61p):

- B. C. Kim et al. : The southeastern margin of the Cretaceous Yongdong Basin, Korea: a lacustrine fan-delta system
- S. H. Yoon et al. : Western boundary fault systems of Ulleung Backarc Basin : further evidence of pull–apart opening
- Y. K. Jin et al.: Gravity models for the South Shetland Trench and the Shackleton Fracture Zone, Antarctica
- C. S. Kim and G. S. Kim: Petrogenesis of the early Tertiary A-type Namsan alkali granite in the Kyongsang Basin, Korea
- Y.I. Lee and I.S. Paik: High alumina glaucony from the Early Ordovician Mungok Formation, Korea
- B. K. Khim et al. : Oxygen isotopic compositions of seawater in the Maxwell Bay of King George Island, West Antarctica

なお,本誌の年間講読料は,個人の場合は30,000韓国ウオン,機関購入では50,000韓国ウオンである. Chough編集委員長は日本からの投稿を歓迎している.

(岡田博有)

### 地質学論集の割引について =

1996年度第3回評議委員会(1996年12月14日)は,地質学論集の割引について以下の通り決定し, 1997年4月から実施することに致しました.大いにご利用下さい。

No. 39以前の論集:院生・学生は4割引,正会員は2割引

No. 40 ~ No. 48 論集:院生・学生のみ2割引

今回の割引は、とくに経済的な困難をかかえながらも、日夜研究をつづけている院生・学生諸氏へん優遇を重点におきました.なお、院生・学正会員諸氏への優遇措置は、各号につき一人一冊と限らせていただきます。申込みの際、「院生」あるいは「学生」会員であることを明記下さい。



博物館紹介

## 千葉県立中央博物館

Natural History Museum and Institute, Chiba

地学研究科 熊代(岡崎)浩子

千葉県立中央博物館は,農林水産省畜産 試験場の広大な跡地に建設された青葉の森 公園の一角に,平成元年に開館した,中央 博物館の英語名称は Natural History Museum and Institute, Chiba である. 文字 どおり自然誌科学をベースとした研究博物 館であり、これが当館のコンセプトともい える.これは現館長(沼田 眞;元日本生 態学会会長、現日本自然保護協会会長でも ある)の強い意志によるところが大きい. すなわち, 地域の自然と調和した開発計画 や環境保全がすすめられるためには、地域 の自然環境が詳細に継続的に調べられ、そ のデータが蓄積・利用できる形に整えられ ていなければならない、それを行うのが当 館の役目なのである、そして、さらに日本 の自然誌科学の一端を担うという役割もも つ. これは日本の大学では自然誌科学の研 究はだんだん陰が薄くなり、自然誌博物館 の重要性が高まってきているためである. このため, 県立の博物館としては, 未曾有 の研究者を有している、総勢67名(うち 分館10名)で,自然誌・歴史研究部(地 学,動物学,植物学,歷史学,資料管理研 究科)と生態・環境研究部(生態学,環境 科学,環境教育研究科)および教育普及課 に所属する. その専門分野の内訳は植物分 類11名,植物生態11名,動物分類10名, 動物生態14名,古生物3名,岩石堆積3名, 地理地形4名,歴史系10名と司書2名であ る.また,博士がその7割を占める.

中央博物館の展示は房総の自然と歴史, 自然と人間のかかわりを紹介している. そ して博物館のすぐ隣に,生態圏をもっている.そこでは房総のタブ林,スダジイ林,アカガシ林などの野外展示があり,自然観察路を通って房総の自然を体感することができる.また,自然誌科学は基本的には野外科学であることから,フィールド・ミュージアムの機能をもたせるために,生態圏のほかに,海と山の現地に研究博物館(海の博物館,山の博物館,仮称)を計画している.海の博物館(勝浦市)は平成11年度に開館予定である.

次に中央博物館の5つの機能について簡単にご紹介する.

<展示> 展示面積は4,291 m²で,「房総の地学」,「房総の生物」,「海洋,生物の分類」,「房総の歴史」,「自然と人間のかかわり」からなる.展示物は実物標本をなるべく多く,また,自然あるいは生態系の一部をそのまま切り取ってきたような,ジオラマも多く配置されている.他に小規模ながら生きた小動物の展示も行っている.展示解説は展示解説員によって毎日,学芸員によって随時行われ,来館者に好評である.

常設展示のほかに企画展示が年2回,特別展示が年1回で,これらは各学芸員または館の研究成果に基づいて企画される.ま

た,貴重な標本や大きなコレクションが入ったときも開催している.平成9年度の企画展は地学科担当で「地層は語る・古東京湾の波・潮・流れ・」(平成10年2月10日~3月29日)を予定している.

<調査研究> 学芸員全員でおこなっている総合研究として、房総の自然誌研究、環境科学総合研究、生態園総合研究がある、これらの成果の公表などに研究紀要「Natural History Reseach」、「自然誌研究報告」、「研究報告 人文科学」および「Natural History Research、Special Issue」を発行している。また、年1回自然誌シンポジウムをおこなっている。平成9年度は地学科担当で「形の進化学の現在」(平成10年3月7日)を予定している。

海外学術調査は当館の研究の目玉といえる.これまで,世界初の北マリアナ無人島群の調査を含め,伊豆・小笠原・マリアナ諸島の総合調査や,台湾,沖縄などを中心とした東アジアの照葉樹林の調査,また,現在はカムチャッカ半島の生物調査をおこなっている.また,海外にあるタイプ標本などの調査のために海外標本調査もおこなっている.

<教育普及> ほぼ毎土曜・日曜,祝日にいずれかの講座・講習会,観察・見学会が催されている.また,夏休み子供相談会や生態圏での観察会も人気がある.友の会活動も盛んで,友の会独自の観察会・講座なども企画している.

<資料収集> 収蔵資料は植物,動物,化石,岩石鉱物等の自然誌関係の標本類が中心で,約450,000点以上.その中には二宮泰三収集貝類コレクション,パンクス植物図譜,リンネ関係レンスコーク・コレクションなど貴重な資料も含まれている。また,コンピュターによる情報システムも整備している.

なお、房総の鍵層の所在調査に基づく資



料集「鍵層集」は,房総の地質を調査する 学生や研究者の手引きとなっている.

#### < 房総の地学展示 >

地学展示室は見学順路の最初の展示室で,ここから房総の自然の展示が始まる. 「房総の大地の成り立ち」「地震と房総」 「房総の水と大気」の3部構成からなる.

展示室の入り口はトンネルを模している。これは、砂泥互層(ダービダイト層)の地層をくりぬいた素掘りトンネルで、房総の中部に数多くみられる。地層が重なっている様子や砂層や泥層などを身近にみせ、またタイムトンネルとして房総の大地の成り立ちに誘う。入るとすぐ上総層群市宿層の巨大な斜交層理の剥ぎ取り展示があり、房総の山を構成する地層を実感できる。そして、ここでは房総の各地域(各層準)の概要説明とその構成物、房総半島の基盤やプレートテクトニクス上での位置付けなどを解説している。

房総半島の生い立ちを時代の古いほうか ら(分布地域別に)探っていく.中生代の 地層がみられる銚子地域では,アンモナイ トを展示している。また、ここでは日本最 古の虫入り琥珀が発見され、当館に収蔵さ れている、つぎの嶺岡層群の分布する嶺岡 山地は,房総で唯一火成岩の露出するとこ ろであり,露出展示の岩石,特に蛇紋岩の ツルツルした表面をなでていく人も多い、 そして新生代の保田層群,三浦層群,安房 層群(房総丘陵・安房丘陵の地質)から上 総層群(上総丘陵の地質),下総層群(下 総台地の地質)と解説していく、子供たち に人気があるのは三浦層群から産出するサ メの歯の化石(カルカロドン・メガロドン) や展示室中央に鎮座するナウマンゾウ復元 骨格標本である.ナウマンゾウは,千葉県 の下総層群から産出したオスの成体の完全 な頭骨(下総町猿山,1971年)をもとに 復元されたもので、復元全身骨格標本とし ては日本一大きい. 上総丘陵の地質や下総 台地の地質では、大型の地層の剥ぎ取り展 示(ダービダイト層や貝化石層)によって, 地層の堆積構造や貝の産状などが観察でき る.沖積平野の地質では,"沼サンゴ"化 石を中心に展示している.最後に,房総の 大地が現在どのように変化し続けているか を示すために、隆起・侵食地形、人工地形 や土壌などを解説している.

「地震と房総」のコーナーの関東・東海地方の震源分布模型は、最近の過去5年間に起きた地震の震源を3次元で示したもので、地震の多さと(5年間で57,000回以上)震源の分布が斜めに深くなっていくところ



(プレートの沈み込み)を多くの人が興味深く見いっている、「房総の水と大気」の気象衛星ひまわり画像のモニターでは、博物館の屋上にあるアンテナから画像を受信し、現在の雲の様子がわかるようになっている。

最後によく言われることであるが、日本では、博物館というと建物に展示物を並べれば、それで完成という意識が強いようである。したがって建物は立派でも裏側へまわってみると、人員も予算も仕事スペースも少なく、少数の学芸員がすべての事をしているというところが多い、当館は学芸員の数も多く、展示室、収蔵庫、研究・作業室がほぼ1/3ずつと恵まれているスペースは狭く、収蔵庫もすでに手狭で、学芸員は上記の仕事をおこなうのに行政的事務もこなさなければならない等同様の問題を

抱えている.また,地味でしばしば難解な 研究成果をどう一般の知的需要に応えるようにするか(たとえば,研究成果に基づく 特別展などは概して不入である)など,研 究博物館への模索が続いている.

### [利用案内]

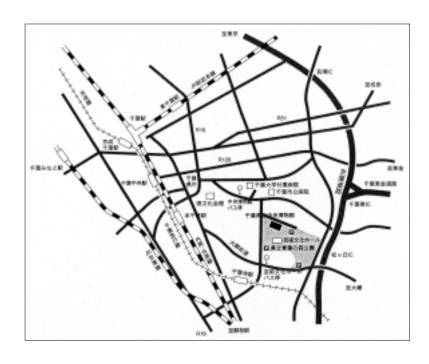
開館時間 午前9時から午後4時30分まで (入館は午後4時まで)

休館日 毎週月曜日(休日の場合は火曜日) 年末年始(12月26日~1月4日) 館内くん蒸臨時休館日

入 館 料 無料(特別展会期中は,会場に限 り有料)

交 通 千葉駅 (JR 総武線・京成線)から,パス「大学病院」or「矢作台市営住宅」行きで「中央博物館」下車,徒歩約5分.千葉急行線千葉寺駅下車徒歩約20分

車をご利用の場合:京葉道路「松 ヶ丘」インターから車で約5分



### 博物館だより

群馬県立自然史博物館第4回企画展「見てみませんか,私が掘り出した自然の宝もの」および特別講演会「化石が語るむかしの地球 群馬の化石と自然史 」のご案内

1. 群馬県立自然史博物館第4回企画展 「見てみませんか,私が掘り出した自然の宝 もの」

群馬県立自然史博物館(群馬県富岡市上黒岩)では下記の要領で第4回企画展「見てみませんか,私が掘り出した自然の宝もの」を開催します.私たちが生命の進化や過去の地球の様子を知る手がかりを与えてくれる自然の宝もの,化石.

群馬県から見つかっている化石では,勢多郡のヘリコプリオンや日本最古の発掘記録が残っているヤベオオツノジカなどが有名です.その他にも,下部白亜系の山中地溝帯や,中部中新統の富岡層群などをはじめ,様々な地層から見つかった化石を材料として多くの研究がされてきました.

しかし,そうした化石以外にも近年群馬県からは様々な化石が見つかっており,さらに多くの過去の手がかりを与えてくれているのです.

今回の企画展では当館所蔵の化石,近隣の博物館所蔵の化石だけでなく,地元群馬県や近県在住のアマチュア研究家の方々が掘り出した自然の宝ものである化石を展示することによって,それらに秘められた太古の群馬や関東地方の大地の歴史をひも解いていきます。

また,これらの化石を通じて,化石は実は 私たちの身近にあり,誰もがその発見者にな れるのだということを一般の方々にアピール していきます。多くの会員の方々にご来館い ただき、見学していただきたいと思います。

日 時:3月7日(土)~5月31日(日)

場 所:群馬県立自然史博物館(群馬県富岡市上黒岩1674-1)

主な展示資料:桐生産腕足類化石/山中地溝 帯産軟体動物化石/富岡層群産化石/埼玉 県葛袋産化石/千葉県名洗層産化石/千葉 県千畑層産化石/兜岩層産化石/瀬戸内海 産ナウマンゾウ/世界の魚類化石など.

入場料: 一般 700円, 高校生・大学生 400円,

小学生・中学生 200円

\* 上記料金には常設展示ならびに同時に開催する特別展「知ってますか,森は緑のダム」

### 2. 企画展特別講演会

の料金も含まれます.

「化石が語るむかしの地球 群馬の化石と自 数中 」

また,上記企画展の開催を記念して,下記の要領で特別講演会を開催します.こちらにもお誘い合わせの上,ご参加ください.

題 目:「化石が語るむかしの地球 群馬の 化石と自然史 」

講師:大森昌衛氏(麻布大学名誉教授,元 日本地質学会会長)



日 時:3月22日(日)午後1時30分~午後 3時

聴講は無料ですが、電話による事前申込をお願いいたします。

問合先:群馬県立自然史博物館

〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1 電話0274-60-1200, Fax0274-60-1250

[ホームページ] http://www.gmnh.pref. gunma.jp

(高桑祐司・長谷川善和・中島啓治・

伊藤 収・野村正弘・高橋武夫・角田寛子)

### 平成9年度千葉県立中央博物館 企画展「地層は語る 古東京湾の 波・潮・流れ」

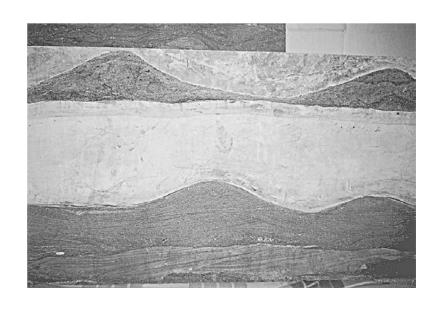
この展示は、約50万年前~10万年前まで 関東平野一円に存在した"古東京湾"の波や 潮,流れの様子を、地層にみられる堆積構造 から探るものです、地層の堆積構造を、野外 で実際の地層を剥ぎ取り、展示しています、 また、実験水路でベッドフォームを実際に形 成し、その様子をビデオで紹介しています、 水の流れ ベッドフォーム 堆積構造と動的 に展示しています。

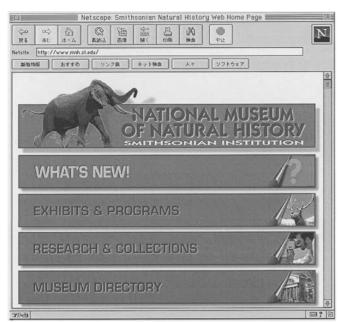
千葉県立中央博物館企画展示室,無料

期 間: 平成10年2月10日(火)~3月29日 (日)9時~16時

月曜休館 (月曜が祝日の場合は火曜日)

交通案内:千葉駅(JR/京成)からパス「大 学病院」行き「中央博物館前」下車 徒歩5分



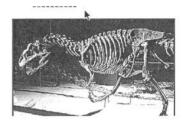


### スミソニアンホームページ表紙

### The Dinosaur Hall National Museum of Natural History



at the Smithsonian's National Museum of Natural History in Washington, DC ==Smithsonian photo by Chip Clark.



恐竜ホールのページ.

劣りはするが, Global Volcanism Program (http://www.volcano.si.edu/gvp/) は世界の 火山噴火情報の発信源になっている.華々し い噴火の写真こそはないが、噴火に関する最 新情報を得ることができる. スミソニアンで は地球上の火山噴火に関する情報をここ数十 年にわたり世界中から集めている。集められ た情報はほとんどリアルタイムで公開され る. これらの情報はBulletin of Global Volcanism Network として毎月発行されてい る. もちろん, ホームページからもアクセス できる.このほか,世界中の火山ごとに寄せ られた噴火情報が検索できる。さらに、ここ 1万年以内に噴火した火山の場所・背景・火 山のタイプ・噴火時期などを、全世界の火山 リストから調べることもできる.

スミソニアン自然史博物館がこのようなデータベースを中心としたホームページを公開していることは、国立博物館の社会への一般的な広報活動というよりは、自然科学研究者への情報提供を重要な目的のひとつにしているためであると強く感じられる.

## スミソニアン自然史博物館のホームページ

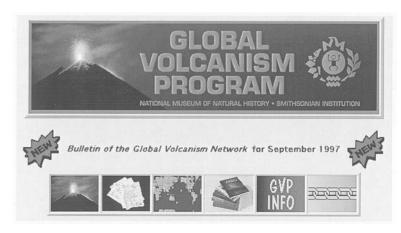
http://www.mnh.si.edu/

東京大学地震研究所火山噴火予知研究推進センター 中田節也

年間600万人も来館者があるというスミソ ニアンの自然史博物館 (Museum of Natural History)のホームページ(http://www. mnh.si.edu/)を訪れてみよう.このページ は1995年にスタートしたらしい. 表紙には, 博物館入り口広場に鎮座するアフリカ像が現 われ、その下にシンプルな3つの選択肢があ る.まず,館内を概観したい人は,Exhibits & Programs から Online Exhibits に進み, Virtual Tour を選べば良いだろう. そこでは 案内図から行きたいフロアーをクリックすれ ばよい. さらに, いくつもある展示室の内の 一つをクリックすると、その展示室全体のワ イド画像が見られる、その展示室のページの 下にはそれぞれの部屋で代表的な展示物の画 像がある.しかし,全体として1億2千万を 上回る数の自然史博物館のコレクションにし ては、ここで公開されている画像の数の少な さに不満を感じるかもしれない. Exhibits & Programs から特別展示を選ぶと,その中に Blast from the Past & Global Volcanism Program がある. 前者は,恐竜絶滅に関係し た6千5百年前の隕石衝突のイベントについ ての展示案内であり、後者はスミソニアンが 手掛けている火山噴火に関するプロジェクト と, Kraffts夫妻が自らの死をかけて行った 火山教育の展示案内である.また, Researches & Collections からはスミソニア ン自然史博物館で行われている研究内容を知 ることができる.

多くの地質学関係者が興味を引かれるのは Department of PaleobiologyのWebサイト (http://www.nmnh.si.edu/departments/pale o.html)であり、自然史博物館の地学関係の サイトの中ではかなり充実している.そこでも,先のBlast from the Past Exhibitのほか,Amber Exhibitをトピックスとして紹介している.自然史博物館で所蔵している幾つかの古生物学的標本はオンライン検索ができるようになっているほか,Dinosaur Hall (http://photo2.si.edu/dino/dino.html)では,3つの恐竜の骨格模型の写真とジュラ紀と白亜紀の恐竜生態のジオラマを紹介している.Blast from the Pastでは,隕石がユカタン半島付近にまさに衝突しようとしている画像が始めに現れ,次のページに進むと,1997年1月にフロリダ沖の深海掘削で得られた,白亜紀・第三紀(K/T)境界を示すコアの写真が解説付で紹介されている.

一方, Department of Mineral Sciencesは Department of Paleobiologyに比べてやや見



Global Volcanism Programのページ.



### 紹介

Gondwana Research 誌 創刊号 (Vol. 1, No. 1)



国際ゴンドワナ研究連合(大阪市立大学 理学部地球学教室内)発行,創刊号は A4判,170ページ,1997年10月発行, 年間購読料は個人6,000円,法人15,000 円.発展途上国の場合,年間購読料は個 人20米ドル,法人60米ドルである

昨秋(1997年10月), "Gondwana Research"と題する国際地球科学学術誌が,日本で創刊された.主編集者(2人)は,大阪市大の吉田 勝教授と,インド・トリヴァンドラムにある地球科学研究センターのSantosh博士である.

この新しい国際学術誌は,ゴンドワナ大陸に関する地球科学的研究に,発表と議論の場を提供することを目的として創刊された.そして,可能なかぎり,廉価提供を目指している.ゴンドワナ地域には発展途上国が多いので,それらの国々の科学者や研究機関が講読できるようにとの配慮である.当然のことだが,先進国・発展途上国の科学者や研究機関に,ともに魅力的な国際水準の学術誌として,広く活用されることが期待される.

この学術誌は、日本とインドの先カンプリア時代ゴンドワナ研究グループを中心として、1995年に日本で発足したInternational Association for Gondwana Research (IAGR)を発行母体とし、主編集局は日本とインドにあり、事務局の中心は日本にある。

この学術誌の創刊号には、11編の論文が載っている・インドから8編,パプアニユーギニア・スリランカ・アメリカの各国から1編ずつである・共著者としてヴェトナムとロシアの研究者が名を連ねている・内容的にみると、岩石学・地球化学的研究が5編,構造

地質学・地史学的研究が2編,構造岩石学的研究が2編,堆積学・地球化学的研究が1編,地球膨張説が1編である、いずれの論文も,最新の研究成果をふまえた,読みごたえのある力作である。

(a) 岩石学・地球化学的研究: Manikyamba (インド)らは、インドSandur片岩帯の変成 火山岩類を調べ、海洋地殻と多様な緑色岩の 形成過程を論じ,27億年前のマントルの肥 沃(液相濃集元素の富化)を論じている. Leelanandam (インド)は、インドAndhra Pradesh の Kondapalli 層状岩体の多数の岩 石・鉱物を詳細に調べ、成因を論じている、 Bindu (インド)は,南インド Kerala Khondalite 帯のグラニュライト相の尖晶石・ **菫青石の組み合わせの生成条件を論じてい** る. Singh (インド)らは,インド中東部 Bastar 地方 Katekalyan 地域の先カンプリア時 代の苦鉄岩を調べ、プレート内部に貫入した、 鉄に富むソレアイトマグマ源であることを明 らかにし、南極との対比を論じている. Rao (インド)らは、インド東Ghats グラニュラ イト帯のVisakhapatnam 地域産のcheraliteを 調べ,変成過程におけるTh, U, Siなどの元 素の濃集を論じている。

(b) 構造地質学・地史学的研究: Valdiya (インド)は、東ゴンドワナの北縁におけるヒマラヤ山脈の形成を論じている。中期原生代から早期始新世までの長い間,北部インド半島では、河川は北方へ流れていたが、晩期始新世にヒマラヤ山脈が出現したために、河川は急激に流路を変更し、南方・南東方へ流れたと述べている。Findlay(パプアニューギニア)らは、北ヴェトナムのSong Ma地域を調べ、インドシナプレートと南シナプレートの境界問題を論じている。

(c) 構造岩石学的研究: Sengupta (インド)らは、東南極 Schirmacher Hills の先カンプリア時代基盤岩中の剪断帯の形成機構と形成史を論じている. Kehelpannala (スリランカ)は、ゴンドワナ大陸の断片である、スリランカの高度片麻岩地帯の変成史を論じている.

(d) 堆積学・地球化学的研究: Udayakumar (インド)らは,インド Karnataka州 Chikmagalur地域の石英礫岩を調べ,ウラニウムの濃集を論じている.石英礫岩は古い Sargur 岩体と新しい Dharwar 岩体との間の不整合に卓越する.

(e) 地球膨張説: Schields (アメリカ)は,二量紀・三畳紀の境界時に,小惑星がコンゴ盆地に衝突して岩圏を破壊し,急激な地球膨張をもたらし,三畳紀後の大陸移動をおこしたと論じている.

この学術誌には、巻末 (pp.143-170) に、Gondwana News Letter が添付されている. これは国際ゴンドワナ研究連合 (IAGR) の公式なニュースレターである.

周知のように,アフリカに関係したゴンド ワナランド研究の論文を載せているJournal of African Earth Sciencesが, Elsevier Sciences社のPergamon Divisionから発行されており、すでにVol. 25まで出版されている. 国際ゴンドワナ研究連合は、Elsevier Sciences社の Journal of African Earth Sciences編集部と協議した結果、お互いに協力関係を保つことになった。そしてゴンドワナ超大陸研究の進展を、お互いにはかることになった。

Gondwana Research **誌の今後の出版計面は** 次の通りである.

Vol. 2, No. 1 1998年1月 通常号 Vol. 2, Nos. 2·3 1998年10月 特別号 (Brazilian Granulites volume by S.S. lyer)

Vol. 3, No. 1 1999年1月特別号

(IGCP368 Madagascar Symposium volume)

Gondwana Research 誌の創刊に努力された 吉田 勝教授をはじめとする,国際ゴンドワナ研究連合の関係各位に敬意を表したい、そして,本誌の今後の発展・継続を保障するために,ゴンドワナ大陸をはじめとする各大陸の地球科学に関心を持つ,多くの諸兄姉の温かいご支援を期待してやまない。

(諏訪兼位)

日本地質図大系(全8巻) 第1巻:日本の地質総図



「監修:地質調査所,総編集:猪木幸男,編集:猪木幸男・加藤碩一(A2判,箱 人り,118ページ,朝倉書店,定価、73,000円+税,1997年12月10日発行

日本の地質調査所は1882年に設立されたので、その100年を記念して1982年に100万分の1地質図を主とした地質アトラスが出版された。それを更に詳細に、広い分野にわたって、新しい知識も取り入れたものにしようということであろう、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の7地方に分けた新しい図集が1989年より逐次刊行されてきた。それらを総括した日本地質図大系が最後に出版され、全部で8巻となった。その途中1992年に日本地質アトラス(第2集)が出版されているが、その中の図もこの「日本の地質総図」の基礎として取り入れられている。

本書は日本列島全体のすばらしいランドサット衛星写真を巻頭(1)に入れて順次つぎのような内容になっている.2)世界の中の日本列島,3)日本及び隣接地域の地形と地質,

4) 東北日本の地形と地質 .5) 西南日本の地 形と地質 . 6 ) 日本列島の地質構造 . 7 ) 東北 日本の地質構造,8)西南日本の地質構造,9) 東北日本の活構造と地震,10)西南日本の活 構造と地震,11)日本及び隣接地域の第四紀 火山とその活動: ,12)同: ,13)東北 日本の地質災害,14)西南日本の地質災害, 15)日本の変成岩・花崗岩,16)日本の地球 化学図:関東地方北東部,17)東北日本の地 球物理学的特性 . 18 ) 西南日本の地球物理学 的特性,19)日本の鉱物資源,20)日本の燃 科資源,21)日本の地熱資源,22)日本の水 理地質,23)日本周辺海域鉱物資源,24)日 本地質図,25)日本地質図変遷の概要.それ ぞれの図には、それを補足する補図が迫力あ る写真も含めて付けられており、要領よくま とめられた説明もある。

全体をかんたんに紹介する、2では海洋も 含めた世界の地質と構造をまとめ、さらに火 山,地震,気象をふくめた自然災害などの条 件の中での日本列島の位置を明らかにしてい る.3では韓国,中国,ロシアの隣接地域, 太平洋の西部も含めた広い範囲を図示し、日 本の地質学的位置,隣接地域との関係がよく 分かるようになっている.4,5には1990年 のコンピューター編集による日本地質図 (200万分の1)(地調:山田・斎藤・村田) が示されている.6は日本の地質構造区分 (磯見:地調,1968)に磯崎・丸山(1991), 市川(1990)の考えが補われている.7,8 には海洋部分も含めた日本地質アトラス(脇 田・岡村・粟田, 1992, 朝倉書店)の図が引 用されているが、そのほかにも補図として新 しいものが加えられている.(日本地質アト ラスはたくさん出てくるので今後はアトラス としておく.)9,10もアトラス(衣笠・ 佃・山崎)の活断層,火山等の図と,同じく アトラス (鈴木・宮崎・川勝・村田) の地震 深度、マグニチュードの図が並べて対応でき るようになっている.11にはアトラス(曽 屋・小野・三村)の火山の分布、性質があげ てあるが, その他いくつかの噴火の写真等は みごとである.12はアトラス(須藤・中 野・高田・川辺・三村・星住・曽屋)の内容, すなはち火山のタイプ,岩石の種類をあげて いる.13,14もアトラス(山崎・釜井・遠 藤)の地震,火山の災害地域,大規模崩壊地 域,軟弱地盤の図を中心に,いくつかの補図 (写真)を使って説明してある.

15は橋本・猪木・関・坂野・小島(地調,1970)の変成相図,アトラス(佐藤・石原・柴田)の花崗岩図を主として,その他の変成帯区分図等が示してある。16には阿武隈南部,八溝,筑波地域の岩石,地層の多数の試料について多くの元素を分析した伊藤ほか(地調,1991)からのデータがあげてある。17,18ではアトラスの重力異常(駒沢ほか),磁気異常(牧野ほか),熱流量・キュリー点異常(松林ほか)の図が対応できるようにあげてある。19はアトラス(須藤ほか),20もアトラス(角井ほか)の図を引用している。

21 では地熱発電所の写真を見せながらアト ラス(山口ほか)の地熱資源賦存区域の図を 説明している . 22 では黒田 (1982)(アトラ ス再録)の水理地質図をあげ,石井(地調, 1989)の2万5千分の1の福井県敦賀平野の水 理地質図を示しながら説明している. 23 は 臼井・飯笹・棚橋(地調,1994)の日本周辺 海域の鉱物資源分布図を引用,海底の団塊, クラストの写真も示している.24としては アトラスの100万分の1地質図が再録されて いるが、いくつかの説明図も入っている、ま た、これはユニークと思われるが新しい5万 分の1の地質図(相馬中村,寄居,美濃,乗 鞍岳,上郡,竜野,北条,椎葉村),20万分 の | 地質図(宇都宮,東京湾周辺,高梁,九 州四万十・秩父帯),30万分の1地質図(東 中国花崗岩地域),50万分の1地質図(東北 南部)も補図として入れてある. さらに北方 領土4島の地質図も25万分の1を中心にコン パイルして、写真とともにいくつか示してあ ることは画期的と言えるであろう. 25 には ナウマン(1887),原田(1890),地調(1900) を始め、いくつかの歴史的に意義のあるもの があげてある。

多くの引用された図,文献,編集者の説明 もほとんど紹介できないのは残念であるが, これだけ膨大なものを編集された方々のご苦 労は大変だったと思われる.とくに総図とし てその構成には意を用いられたであろう.値 段が高いのはやむを得ないかもしれないが, いろいろの機関,団体で購入されて参考にされるよう推薦したい.

(黒田吉益)

### 火山噴火と災害 宇井忠英 編



東京大学出版会 1997 年発行, A5 判 219ページ, 定価3,700円(税別)

日本は世界有数の火山国であり,ここ20 年間でみてもマスコミをにぎわした火山噴火 は数多くあった。にもかかわらず,火山現象 に関する学術上の進展と国民の理解との間の **溝は他分野同様あるいはそれ以上に大きい**. 火山学では基本的熟語となっていた「火砕流」 が、雲仙普賢岳の噴火の衝撃によって、1991 年の"新語"大賞の金賞に選ばれたが、この ことが上記の溝を逆説的に表している、本書 はその溝を火山災害に関わる火山学者や社会 心理学者の手によって埋めようとする意欲か ら作られた本である.また一方,火山学者の 側をみると、日本の大学で火山学の講義を行 っている教員は十分な人数とは言えないまで も一定数配置されている、しかしながら、そ れら火山学者もいざ火山災害の現場に立ち会 うことになると困難を感じることがある、そ れは主に火山学の中でもさらに細分された自 分の専門を越えて総合的な判断をなす必要の あることと,火山防災の社会的仕組みに関す る認識もしばしば要求されることなどに起因 するであろう.一人一人が場数を踏んで長け ていくのだと言えなくもないが、先人の知識 は書物としても継承されてこそ科学といえる であろう.ここに「火山災害学」の確立(本 書まえがき)を目指した本書のもう一つの重 要性がある。

本書の章立てと執筆者は以下のようになっている.

序論 (荒牧重雄著)火山国でありながら国 民が火山を知らないのはなぜか,火山災害 が他の災害に比べて多様性に富むことなど の特殊性から説く.人類と火山の活動空間 の衝突が起こりつつある今,防災の方法に ついての全体像が述べられている。

第1章 火山活動の多様性 (宇井忠英著) 火山災害のもつ多様性を理解するに必要最 小限の基礎知識が記されている. 噴火のタ イプ,火山体の構造,火山噴出物の種類と 成因,噴火の推移と規模などがまとめられ, 火山学のコンパクトな教科書ともなってい る.

第2章 噴火と災害 (字井忠英著)火山活動の種類と対応させて,火山災害の過程について,火砕流・サージ,火山体崩壊,溶岩流,噴石,降下火砕物,マグマ水蒸気爆発,火山泥流,津波,火山ガス,地殻変動・地震,飢饉などに分けて紹介される。実例として,雲仙普賢岳1990-95,プレー1902,駒ヶ岳1929,セントヘレンズ1980,三宅島1983,浅間山1958,ピナツボ1991,タール1965,十勝岳1926,ネバドデルルイス1985,クラカトア1883,プラフ1979,有珠1977などが図入りで挙げられている。

第3章 噴火予知と防災・減災 (岡田 弘・宇井忠英著)噴火予知の歴史から始ま り,予知のための方法が個別に解説され, セントヘレンズ,キラウエア,桜島,イン ドネシア諸火山,雲仙岳,ピナツボなどの 成功事例が吟味されている。その上で,火 山との共生へ向けての計画と課題につい て,特に科学者・住民・マスメディア・行 政の連携を重視する観点からの分析がなさ れる.

第4章 火山災害予測図 (宇井忠英著)火

山災害予測図の目的に始まり,その作成の 学術的方法論,それを活用するための行政 マップ・広報マップなどについて,実例を あげて説明されている.その上で日本の現 状の問題点が鋭く分析されている.

第5章 火山情報の伝達と避難行動 (廣井 脩著)社会心理学の立場から,特に雲仙普 賢岳1991と伊豆大島1986の事例について 分析がなされている.災害を軽く見る心理 と災害を過度に恐れる心理の2側面から避 難行動を分析している.火砕流の用語を例 に住民への普及の目的で学術用語の翻訳作 業の提言がなされている. 第6章 火山の砂防 (水山高久著)火山活動に起因する土砂災害を防止軽減するための火山砂防の方法と課題について,火山活動の種類別に記されている.雲仙普賢岳周辺で展開された施設の例が説明されている。

第7章 火山の制御 (藤井直之著)火山活動の人工的な変更によって火山災害を軽減しようという試みについて,溶岩流の流路変更や火口湖の水抜きなどの例が紹介されている.そして,噴火についての的確な認識があれば決して夢物語ではないという火山の制御についての提言がなされている.

このように各分野の専門家が分担していて 読み応えある。それでいて複数の著者による 寄せ集め的な弱点は感じさせず,専門的説明 は本全体の構成に関して必要十分になされ, かつ各章の関係は重複無くよく編集されている。本書の理解には大学学部での一定の講義 を受講した知識水準を求められる部分もあるが,高校までの理科知識で理解できる部分も 多い、火山と人間との共生に関心のある,研 究者・学生,火山周辺住民,地質関連技術者, 行政・教育・報道の関係者のかたがたに是非 お勧めしたい本である。

(信州大学理学部 三宅康幸)



### ご案内 ≣

Methane Hydrates Potential Resources in the near Future?

At: JNOC-TRC, Chiba-City, JAPAN October 20–22, 1998

Organized by Japan National Oil Corporation (JNOC)

Supported by

Geological Survey of Japan

Hokkaido National Industrial Research Institute

National Institute for Resources Environment University of Tokyo

Japan Petroleum Exploration Co., Ltd.

Teikoku Oil Co., Ltd.

Tokyo Gas Co., Ltd.

Osaka Gas Co., Ltd.

Japan Drilling Co., Ltd.

Telnite Co., Ltd.

Electric Power Development Co., Ltd.

AOC Energy Development Co., Ltd.

Indonesia Petroleum Co., Ltd.

Toho Gas Co., Ltd.

Methane Hydrates Symposium will be held at the Technology Research Center-Japan National Oil Corporation, Chiba-City, JAPAN on October 20-22, 1998. All persons involved with methane hydrates/ gas hydrates are invited to submit abstracts of original papers for presentation at the symposium and publication in its proceedings.

### PAPER DEADLINES:

Abstracts (200 to 300 words in English)
March 20, 1998

Confirmation of Acceptance April 30, 1998
Complete manuscript for the proceedings
July 31, 1998

The maximum desirable length for manuscript is about 8,000 words.

#### NOTE TO AUTHORS:

Please contact Mr. A. Nakamura of JNOC if you have an intention of submittingabstracts. We will send an application form;

### Mr. A. Nakamura

Natural Gas & Unconventional Oil Resources Dept.

Japan National Oil Corporation

Fukoku Seimei Bldg., 2–2–2 Uchisaiwai–Cho Chiyoda–Ku, Tokyo 100, JAPAN

TEL: +81-3-3597-7597 FAX: +81-3-3597-7901 E-mail: nakamr-a@jnoc.go.jp

### TENTATIVE PROGRAM

October 20 (Tuesday) 1998

Opening Session (Methane Hydrate : Potential Resources in the near Future?)

Opening Address (Mr. Satoshi Tono, JNOC)

Keynote Speech (Dr. Timothy S.Collett, U.S. Geological Survey)

### Coffee Break

Technical Session I (G & G/Resources Assessment No. 1)

Keynote Speech (Mr.Scott R. Dallimore, Geological Survey of Canada)

Technical Presentations (30 minutes/ Presentation)

### Lunch Break

Technical Session II (G & G/Resources Assessment No.2)

Keynote Speech (Dr. Yoshihiro Tsuji, JNOC) Technical Presentations (30 minutes/ Presentation)

### October 21(Wednesday) 1998

Technical Session III (Drilling Operation)
Keynote Speech (Mr.Toshihiro Ohara, Japex)

Technical Presentations (30 minutes/ Presentation)

#### Lunch Break

Technical Session IV (Production)

Keynote Speech (Dr.Vidyadhar A. Kamath, University of Alaska Fairbanks)

Technical Presentations (30 minutes/ Presentation)

### October 22(Thursday) 1998

Panel Discussion "Methane Hydrate as a potential Energy Resource in the near Future"

Lunch Break

TRC's Laboratory Tour

(渡部芳夫)

### 第33回日本水環境学会セミナー 生き物から水環境をみる()

生き物は、水質・水量・水辺地と並んで、水環境の重要な構成要素である上に、多様な生き物の保全は、地球環境の重要課題でもあります。しかし、現状では、生き物から水環境をみる観測・研究、および保全への取り組みが各所で十分に行われているとは言い難い状況です。そこで、昨年度のセミナーで要望の多かった、生物の種多様性と保全、その裏打ちとしてのすみ場の多様性について取り上げ、広範な水環境の質を評価する基礎とする一方で、各地での生物の保全・回復への取り組み事例を学ぶセミナーを企画しました。多数の方のご参加をお待ちしております。

主 催:(社)日本水環境学会

期 日:1998年3月2日(月)~3日(火)

場 所:品川区立総合区民会館「きゅりあん」 7階イベントホール(品川区東大井5-18-1) JR 京浜東北線大井町駅中央口,東急大井 町駅下車

### プログラム

第1日[3月2日(月)]

9:15~9:25 受付

9:25~9:30 開会の挨拶

9:30 ~ 10:40

・生物の多様性とその保全…樋口広芳(東京 大)

10:50 ~ 12:00

・生物を保全するということ 植物の視点から … 鷲谷いづみ(筑波大)

13:00 ~ 14:10

・すみ場の多様性の保全 水生動物の視点から …竹門康弘 (大阪府立大)

14 · 20 ~ 15 · 30

・すみ場の多様性の保全 魚類の視点から …水野信彦(愛媛大・名誉)

15:40 ~ 16:50

・すみ場の多様性の保全 すみ場の階層性の 視点から …桜井善雄 (応用生態学研)

第2日〔3月3日(火)〕

#### 事例研究

9:40 ~ 10:40

・矢作川における生命の循環性の現状と対応 策…村山志郎(豊田市矢作川研)

10:50 ~ 11:50

・多摩川における応用河川生態調査…小倉紀 雄(東京農工大)

13:00 ~ 13:50

・都市河川の多自然型川づくり…土屋十圀 (東京都土木技研)

13 · 50 ~ 14 · 40

・霞が浦ビオパーク…相崎守弘(島根大)

14:50 ~ 15:40

・ため池の生物と環境…村上哲夫(名古屋市 環科研)

15:40 ~ 16:30

16:30~16:40 閉会の挨拶

(講師の都合等で内容に一部変更のある場合があります。)

定 員:180名

参加費:(テキスト代を含む)

会 員 15,000 円, 非会員 30,000 円 学生会員 5,000 円

参加申し込み:

参加者氏名, 会員・非会員の別, 会 員の場合は会員番号(但し,学生会員は不 要), 連絡先(所属団体名,住所および 電話・Fax番号)をご記入の上,下記まで お申し込み下さい、参加を受けつけた方に は受付票を送付しますので、参加費を2月 16日までにお振り込み下さい。

申し込み・問い合わせ先:(社)日本水環境学 会セミナー係

〒160 **新宿区本塩町**12 **四谷ニューマン** ション307

電話 03-3351-2272 Fax 03-3351-2317 E-mail: jswe@mb.infoweb.or.jp

### - 科学者フォーラム -第5回アジア学術会議

The Fifth Asian Conference on Scientific Cooperation

「アジアにおける学術の直面する課題~持続可能な発展に向けて~」

平成10年3月12日(木)10:30-17:30 日本学術会議講堂(東京都港区六本木7-22-34 (交通)地下鉄千代田線「乃木坂」駅下車, 青山霊園方面出口徒歩1分)

午前の部

\*日本学術会議会長挨拶

of the Game is to Win"

10:30-10:35

吉川弘之

\* 内閣総理大臣挨拶

10:35-10:40

橋本龍太郎

\*特別講演

10:40-11:00 "Shared Asian Vision and Strategies" rinivasan Varadaraian

(インド国家科学アカデミー会長) 11:10-11:30 「社会的改善に向けての学 術の役割 特にアジア に関連して 」

柏崎利之輔 (日本学術会議副会長) 11:40-12:00 "Science in Asia:The Name

Montri Chulavatnatol (タイ科学協会会長) 午後の部

パネルディスカッション (アジア10か国のアカデミー等の代表者がパネリストとして参加)

13:00-15:00 「学術の研究環境の在り方」 15:30-17:30 「地球的規模の諸問題への学 術の対応の在り方」

(人口問題,食料問題,エネルギー問題, 地球環境問題等)

中華人民共和国、インド、インドネシア、大韓民国、日本、マレイシア、フィリピン、シ

ンガポール,タイ,ヴィエトナム計10か国 無料.一般の方のご来場を歓迎いたします. (同時通訳あり)

#### 日本学術会議

[問合せ先]日本学術会議事務局情報国際課 電話 03(3403)6291 (内線253)

\* 都合により, プログラムが一部変更される 場合があります.

### 日仏 KAIKO-TOKAI **国際シンポ** ジウムのご案内

#### 実行委員会

木下 肇 (海洋科学技術センター)

平 朝彦(東京大学海洋研究所)

平成5年度~9年度にかけて、南海トラフ 沈み込み付加体における地殻構造や流体循環 をターゲットとして実施された日仏共同 KAIKO-TOKAI計画の最終取りまとめとし て、下記の要領で国際シンポジウムを開催い たしますので、お知らせいたします。

記

日 程: 平成10年3月25日~27日

場 所:日仏会館(東京都渋谷区恵比寿3-9-25)

主 催:海洋科学技術センタ - ・東京大学海 注研究所

後 援:文部省・科学技術庁・仏大使館・日 (4)会館

以下の5テーマにわたって,口頭またはポスターによる約60件の研究発表が行われま
オ

- 1) New findings by submersible and ROV observations
- 2) Geological/geophysical structure and tectonics
- 3) Material fluxes: accretion, fluid migration, and biological processes
- 4 ) Development of observation technologies
  - 5) Others

ご不明の点がございましたら,日本国内事務局(loc\_kaikotokai@jamstec.go.jp)までお問い合わせください.プログラム等詳しい情報は,ホームページ(http://www.jamstec.go.jp/index-e.html)に順次掲載いたしますので,ご参照ください.

(蒲生俊敬)

### 各賞・ 研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします.推薦ご希望の方は締切日半月前までに,執行委員会迄お申し込み下さい.

### 財団法人神奈川科学技術アカデミ ー研究助成募集のご案内(第一段 階)

1.助成の趣旨および方法

本助成制度は,意欲ある若手研究者が自発的に計画する先端的科学技術分野の創造的基礎研究に対して助成を行い,地域の創造的, 先駆的な研究の発掘,育成に貢献することを目的とします。 助成の方法:研究の進展により段階的助成 を行います(三段階).

第一段階:研究の性格;探索・シーズ発掘,一件当たりの助成限度額;50万円程度(20件以内),公募方法;公募,研究期間;当該年度末まで

2 助成対象研究課題

研究課題が,科学技術発展のためのシーズとして大切な創造的基礎研究であり,企業利益を直接の目的としないものを対象としま

す.

#### 3. 助成対象者

原則として、神奈川県内在勤または在住の 若手研究者(概ね40歳以下の者)で、勤務 先の承諾を得られる方を対象とします。

4. 助成対象の経費

対象となる経費は,研究に要する物品購入費,旅費,その他必要な経費とします。 申請書提出の締め切り:平成10年3月10日 (火)必着

#### その他

- (1) 第二段階および第三段階は,それぞれ前段階で助成対象となった研究課題で,申請のあった者のうち,その研究成果等に基づき,引き続き助成の必要性が認められる研究に対し助成します.
- (2) 第一段階対象者は,対象となった翌年度から3年の間,第二段階へ申請することが可能です.なお,第二段階の申請が一度不採択となった場合でも,1回目の申請時より研

究に進展があった場合のみ2回目の申請を認めます.

#### 事務局・申請書送付先:

財団法人神奈川科学技術アカデミー 学術 交流部 交流普及課

〒213-0012 神奈川県川崎市高津区坂戸 3-2-I KSP西棟614

電話 044-819-2032 Fax 044-819-2026 E-mail: kast-sc@net.ksp.or.jp

### 公募

教官公募等の求人のニュース原稿につきましては,採用結果をお知らせいただけますようお願い致します.



### 筑波大学地球科学系教官の公募

このたび,本大学地球科学系では,下記の 要領で教官を公募することになりました.

記

公募の対象:地質学分野 講師 1名 専門分野:構造地質学またはテクトニクス

着任時期:1998(平成10)年10月頃を予定提出書類:

- 履歴書(市販のまたはそれに相当するものに写真を貼ったもの; e-mail addressを記入)
- 2) 研究業績リスト(著者名全員の順序を示し、レフェリー制度のある論文に 印,主要論文5編には 印をつける)
- 3) 主要論文5編の別刷またはコピー
- 4) 研究・教育に関する抱負(2000字程度)
- 5) 本人について意見を伺うことのできる2 ~3名の方の氏名,連絡先(推薦書は必要 ない)
- 2,4),5)についてはA4判とすること.

その他:その他の書類の提出をお願いした り,面接を行ったりすることもあります.

応募期限:1998(平成10)年3月末日(必着) 書類の提出先:

〒305-8571 **つくば市天王台**1-1-1 **筑波大学地球科学系学系長** 

(封筒には「地質学分野講師応募」と朱書 し,簡易書留で郵送すること)

### 問い合わせ先:

〒305-8571 **つくば市天王台** 1-1-1 筑波大学地球科学系 小川勇二郎

**電話** 0298-53-4307 Fax 0298-51-9764 e-mail:yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp

### 九州大学理学部地球惑星科学科岩 石反応循環科学講座所属助教授の 公募

九州大学理学部地球惑星科学科は岩石反応 循環科学講座所属助教授候補者を下記の要領 で公募します.

記

職種人員:助教授1名 専門分野:岩石学

着任時期:決定後なるべく早い時期

提出書類:

- (2) これまでの研究概要 (A4 用紙 2 枚以内)
- (3) 研究業績リスト (原著論文,総説,報告書,著書に区分)
- (4) 主要論文別刷3編(業績リストに 印を付す)
- (5) 着任した場合の研究・教育に対する抱 負(A4用紙2枚以内)
- (6) 応募者を熟知し,意見を聞ける方2名 の氏名とその連絡先並びに応募者との 問係

応募締切:平成10年4月28日(火) 書類送付先及び問い合わせ先:

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部地球惑星科学科 岩石反応循環科学講座所属助教授候補者選 考委員会 委員長 柳 哮

電話 092-642-2648

Fax 092-642-2684

E-mail yanagi@geo.kyushu-u.ac.jp

その他:提出書類の内,(4)以外は全てA4 用紙を使用すること.また,封筒に「応募書 類在中」と朱書し,簡易書留で郵送のこと

### 九州大学理学部地球惑星科学科海 洋底地球科学講座所属助教授の公 募

九州大学理学部地球惑星科学科は海洋底地球科学講座所属助教授候補者を下記の要領で 公募します.

なお,海洋底地球科学講座は海洋に限らず 陸域を含め地質学およびその関連分野の教育 と研究を担当しています.地球惑星科学科は 近い将来に5大講座からなる新編成の専攻へ の転換を計画しています.

職種人員:助教授1名

専門分野:海洋底地球科学(堆積学,層序学, 構造地質学)海洋に限らず陸域を含め地質学 およびその関連分野の教育と研究を担当

着任時期:決定後なるべく早い時期

### 提出書類:

- (1) 履歴書
- (2) これまでの研究概要(A4用紙2枚以内)
- (3) 研究業績リスト(原著論文,総説,報告書,著書に区分)
- (4) 主要論文別刷3編(業績リストに 印を付す)
- (5) **着任した場合の研究・教育に対する抱 負(**A4 用紙2 枚以内)
- (6) 応募者を熟知し,意見を聞ける方2名 の氏名とその連絡先並びに応募者との 関係

応募締切:平成10年4月28日(火) 書類送付先及び問い合わせ先:

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学教室

海洋底地球科学講座所属助教授候補者選考 委員会 委員長 柳 哮

電話 092-642-2648 Fax 092-642-2684 E-mail yanagi@geo.kyushu-u.ac.jp

その他:提出書類の内,(4)以外は全てA4用 紙を使用すること.また,封筒に「応募書 類在中」と朱書し,簡易書留で郵送のこと

### 熊本大学理学部環境理学科の教官 公募

当・環境理学科は、人間社会と自然との調 和ある発展を教育理念として, 平成9年度に 新設された学科(学生定員30名)であり、 環境解析学と環境動態学の2大講座で構成さ れています.現在,理学部の既存学科(化学, 地球科学,生物科学)から移籍した8名の教 員が在籍していますが,今回公募する2名の 教員を含め,完成年度(平成12年度)には 教官定員は13名になる予定です.環境科学 は、その守備範囲が広く、自然科学の全領域 にわたっていますので、現スタッフではカバ ーできない領域の専門家に参画していただ き、自然科学のゼネラリストであると同時に 環境科学のスペシャリストたる人材の育成を 目指して、ともに手を携えて、新しい学科を 創設したいと念願しています.

記

### 公募の職名および人員:

- a. 助教授(環境動態学講座)1名
- b. 助手 (環境解析学講座)1名
- \*以下,公募職名(所属講座名)をaおよび bで表記します。

#### 専門分野:

- a. 広い意味での陸域の動物生態学を専攻し, 河川・湖沼・山地・草地などの野生動物 (微小動物を含む)を対象として,フィー ルドワークを主たる研究手法としている方
- b. 化学, 地学, 物理学の境界領域で環境の 解析・評価ができる方

### 応募資格:

- a.40歳前後の方で博士の学位取得者(平成 12年度から大学院博士後期課程を担当し ていただく予定ですので,文部省設置審の 審査をパスできる方)
- b.30 歳前後の方で博士の学位取得者あるい は取得見込み者

#### 授業科目:

a.動物生態学関連科目(野外実習などを含む),自然科学分野の一般教育(全学対象), 大学院自然科学研究科(博士前期・後期課程)

- b. 広い意味での環境解析学(化学,地学及 び関連科目,野外実習を含む)の学生実験 並びに情報教育
- 任用予定日:平成10年6月1日以降の可能な かぎり早い時期

### 提出書類 (A4判):

- (1) 履歴書
- (2) 研究業績目録(査読付き雑誌に発表された原著論文,総説,著書,その他を 区分してリストにする)
- (3) 主要研究論文(10篇以内)別刷各1部
- (4) 研究成果の概要 (2000字程度)
- (5) 今後の研究計画と教育に関する抱負 (2,000字程度)
- (6) 照会が可能な2名の方とその連絡先応募締切日:平成10年4月30日(必着)
- 書類提出先:〒860-0862 熊本市黒髪2-39-1 熊本大学理学部環境理学科 学科長(簡易 書留にて「環境理学科教員応募書類在中」

#### と朱記して郵送)

問N合せ先:書類提出先,電話: 096-342-3384(實政), 096-342-3316(環境理学科事務室), Fax: 096-342-3320(理学部事務), E-mail: sanemasa@aster.sci.kumamoto-u.ac.jp

当学科のホームページ http://www.sci. kumamoto-u.ac.jp/todakei/kankyo.htm

環境理学科には,現在,以下の教員が在籍しています:

環境解析学講座:黒澤 和·教授(有機化学),實政 勲·教授(分析化学),清水洋·教授(地球化学),戸田 敬·講師(分析化学)

環境動態学講座:松坂理夫·教授(動物形態学),石田昭夫·教授(環境微生物学),内野明徳·助教授(植物細胞遺伝学),高宮正之·助教授(植物分類学)



### 委員会報告

本会以外の学会および研究 会・委員会よりのお知らせ を掲載します.

### 第17期第1回地球化学・宇宙化学 研究連絡委員会議事録

日 時:1997年11月13日(木)13:30~16:30場所:日本学術会議第4部会議室(6階)出席者:青木謙一郎(会員),日下部実(地球化学),田中剛(地球化学),中村栄三(岩鉱),野津憲治(地球化学),半田暢彦(地球化学),矢内桂三(地質),山中健生(生化学)

上記出席者に加えて,秋元 肇(化学),藤井直之(地物研連),松田准一(地球化学),宮本正道(鉱物)が今期の委員である。会に先立って自己紹介の後,委員長に野津憲治委員を,幹事に青木謙一郎委員,田中 剛委員,宮本正道委員を推薦により選んだ。青木委員より学術会議の役割と構成の概略について説明があった。

### 1. 報告事項

(1) 学術会議関係 (青木委員より)

7月22日に第17期日本学術会議が発足した.126回総会で会長に吉川弘之, 副会長に柏崎利之輔と佐々木恵彦会員が,第四部長に和田昭允,副部長に大 滝仁志,幹事に土井範久と鎮西清高会員が選出された.

第127回総会で第五部(工学)世話担 当研連のうち12研連は,設置当初の 目的を達したので廃止し,新たに12 研連を設置した.また第三部担当研連 のうち3研連と第七部の1研連を名称 変更した.

第17期活動計画(申し合わせ)(案)

が審議・検討され、承認された.今期の臨時(特別)委員会が取り上げる重要課題は、学術の社会的役割、20世紀の学術と新しい科学の形態・方法、科学技術の発展と新たな平和問題、アジアのダイナミズムの多面的検討、女性科学者の環境改善の推進、少子社会の多面的検討、食問題、教育・環境問題の8課題である。

第四部会が7月22,23日,9月25日, 10月21~23日に開かれ,下記の審議 がなされた

各研連の構成が承認され,各推薦研連の指名会員と非推薦研連の世話人が決まった.地質科学関係では「地質研連」と「古生物研連」が斎藤常正会員,「鉱物研連」と「地化・宇化研連」が青木謙一郎会員,「地質科学総合研連」と「第四紀研連」が鎮西清高会員となった.

第四部と研連/専門委,さらに関係 諸学会との縦の連絡を密にする目的で 「理学総合連絡会議(理総連)」の設立 が承認された。

第四部附置小委員会として,上記理 総連(新規)の外にサイエンス・ミュ ージアム推進小委員会(継続)と新し い方式の国際研究所推進小委員会(新 規)の設置が承認された.

「研連見直し」問題について 第四部の研連は、A. 主として素粒子・物質・材料、B. 主として生命, C. 主として宇宙・地球、D. 領域横断学術、の4つの大枠に取りまとめられる案が承認され、一年間くらいをめどにして研連見直し問題を議論し、それから具体的な検討を行う予定である

ガイアリスト21小委員会の設置 (新規)が承認された。 平成10年度代表派遣会議および代表派遣候補者については、それぞれの研連(専委)において検討し、平成9年12月19日までに書類をだすことが求められている。

### 2. 審議事項

(1) 前回議事録

第16期第11回議事録(案)を承認した.

#### 3 **その**他

- (1) 「研連見直し」問題について,学問分野の重要性から「地球化学・宇宙化学研連」は必要であることを基本とし,自由な意見交換をおこなった.また,部長提案としてそれぞれの研連がカバーしている分野を部会において短時間で説明することとなっている.本研連は元素の循環や化学プロセスが中心になるが,学問領域や特色を明確にしておく必要がある.第四部は国際対応を重視していることから,IAGCへの対応は本研連の持ポイントのひとつであろう.これに関連して,関係分野で国際会議を開くことが望まれる.などの発言があった.
- (2) 今期の本委員会の活動方針については 次回から検討を始めることとなった.
- (3) 研連議事録を学会広報誌などに迅速に 掲載できるようにするため、幹事は連絡 委員会終了後、速やかに議事録(案)を 作り、委員の意見を求めた後、議事録と して関係学会に配布することが了承され た。

次回,第17期2回の委員会は1998年2月 20日(金)に関くこととなった。

### 構造地質研究会 97 年冬の例会報 告

構造地質研究会(以下構造研)の97年冬の例会が,昨年12月20日に日本大学文理学部で開催され,約60名が参加した。今回の

例会は,前日・前々日に,東大地震研でシンポジウム「日本列島の地質大構造と地震テクトニクス」が開催されたこともあり,単日開催となったが,シンポジウム,特別講演,一般講演・ポスターセッションおよび総会と,盛りだくさんの内容であった.

シンポジウム「続: 21世紀の構造地質学 に向けて」では, 今年発刊予定の地質学論集 「21世紀の構造地質学に向けて」(以下論集) の執筆者で、96年の例会で講演されなかっ た6人の方々に、論集論文の内容を紹介して いただいた、木村 学氏(東大)は,海山の 沈み込みなどによる付加体下底のテクトニッ クな削剥を実例を挙げて紹介し, 世界の沈み 込み帯では、付加作用の起こっているものよ り削剥作用の起こっているものの方が多いと 指摘した. 安間 了氏(東大)は,海洋プレ ート沈み込みのアナログモデル実験から,背 弧海盆や付加体などの島弧-海溝系リソスフ ェアの主要な構造形成が、沈み込むスラブに よって発生する、マントルウェッジ内のくさ び流に起因する可能性を示した、高木秀雄氏 (早大)は,脆性-延性遷移領域で形成され たと考えられる断層岩類をレビューし、脆 性 - 延性遷移領域の断層岩研究の重要性を指 摘した.清水以知子氏(東大)は,核生成と 粒界移動による動的再結晶の過程と核生成 -粒成長による微細構造形成を、理論的に解説 した.千木良雅弘氏(京大)は,面構造急斜 地域の岩盤クリープに続く大規模崩壊と、斜 面に平行な弱層に沿う流れ盤斜面の大規模崩 壊について事例を挙げて紹介し、大規模崩壊 の予知のための構造地質学的研究の重要性を 指摘した.長谷川修一(四国総研)・澤田臣 啓(サワソフト)両氏(論集の執筆者ではな い)は,四国中央構造線沿いに見られる,和 泉層群から成る地滑り岩塊が、中央構造線の 断層運動によって生じた長大斜面の一部が、

大地震などによって崩落移動したものと推定した.論集の執筆者で,未だに構造研例会で講演していただいていない方はまだ何人かおり,今後それらの講演も含めて,今世紀末まで「21世紀の構造地質学に向けて」のシポジウムは継続していきたいものである.「重力異常から断層を探る」という特別講演では,萩原幸男先生(日大)が,活断層研究における重力探査の有用性を,松本盆地東縁断層や長野県西部地震の地震断層などの例に基づいて,言葉巧みに紹介された.その他以下の,2つの一般講演と,13の院生・学生によるポスター発表があった.

- Rasoul Sorkhabi (石油公団) 「Collisional tectonic uplift and basin formation: implications for petroleum resources and a view from the western Himalaya」
- •林 愛明 (神戸大)「Tree rings reveal the maximum displacement along the surface rupture associated with the 1931 M8.0 Fuyun Earthquake, northwest China
- ・田中義浩・古姓昌也・金川久一・伊藤谷生 (千葉大)・西澤 修(地調)「日高変成帯 北部パンケヌーシ川流域における下部地殻 岩石の弾性波速度」
- ・高梨 将・三池 力・金川久一・伊藤谷 生・Adel M. Morsy (千葉大)・西澤 修 (地 調)「日高山脈中央部における日高衝 突帯構成岩石のP波速度」
- ・古姓昌也・田中義浩・金川久一(千葉大) 「日高変成帯北部に露出する島弧地殻構成 岩類の変形」
- ・菊池初絵・大友幸子(山形大)「宮城県鳴 子町寒風沢周辺の鬼首-湯沢マイロナイト 帯・
- ・鈴木淳一・大友幸子 (山形大)「福島県小 高町南部の双葉破砕帯周辺の断層岩」
- ・近重史朗 (日大) 「異地性変質岩体の残留

- 磁化と移動過程 関東山地北縁部寄居溶結 凝灰岩を例として 」
- ・廬 志強・清水以知子(東大)・板谷徹丸 (岡山理科大)「北部秩父帯のナップ構造: K-Ar年代による検討」
- ・小先章三・荒井良祐・河村知徳・伊藤谷生 (千葉大)・渋谷昭栄(地科研)「重力探査 による淡路島北部の地下構造」
- ・市川果奈・小坂和夫 (日大)「野島断層の 断層ガウジ」
- ・吉村浄治・高木秀雄(早大)「四国西部三波川帯,唐崎マイロナイトの構造解析と K-Ar年代」
- ・曹 奎煥・高木秀雄(早大)・鈴木和博(名大)「韓半島,淳昌剪断帯のマイロナイト化の時期」
- ・真砂英樹・金子慶之・太田 努・丸山茂 徳・磯崎行雄(東工大)「原生代大陸衝突 帯西オーストラリアカプリコーン造山帯の 変成作用とテクトニクス」
- ・竹村貴人(日大)「岩石中の微小割れ目の マルチフラクタル解析」

ポスターセッションと同時に行われた懇親会には42名が参加し、豪華な料理と豊富な酒類が用意され、皆口と喉を潤しながらポスターを見学した、ポスター発表が院生・学生に限られていたことと、懇親会費に格安の学割料金が適用されたことにより、院生・学生には良い交流の場所となったように思う、今後も院生・学生諸君には、どんどん例会で発表していただきたいものである。

最後に,冬の例会の開催準備と運営にご尽力いただいた,世話人の小坂和夫氏,および日本大学の院生・学生の皆さんに,厚く御礼申し上げたい。

(金川久一)

## 地学英語雑感

はじめに

地質学会が,このニュースを創刊するにあたり,編集部から「何か地学英語について実践的な,役に立つものを書かないか?」と言うお誘いをいただいた。これは,一見面白いものができそうに思えないこともなかったが,地学英語については,幾つかの有用な指南書が出版されているし,科学・技術英語にされている。この上,筆者が屋上に屋根を重ねてもあまり意味があるとは思えない.

しかし,何か地質学会の諸兄姉が興味を持 たれるようなものを書けないか.

些か乱暴かも知れないが、大まかに言えば、近代科学の国際的中心はルネッサンスのイタリアからフランス イギリス ドイツと20世紀初めにかけて移ってきた、同時にラテン語、フランス語、英語、ドイツ語とその時々の中心国の言語が科学の国際語であったと言っても差し支えなかろう、それでは、現在、良質の研究成果を最も多産している、多人種国家アメリカの研究機関では地学英語をどう

扱っているか、

我々にとって自国語の日本語でも,科学的 調査研究の成果を,正確な,読みやすい,理 解しやすい、簡潔な文章に纏めるのは簡単な ことではない .これは ,何処でも同じらしく 最も多数の地学屋を擁している米国地質調査 所(USGS)では, Suggestions to Authors of the Reports of the United States Geological Survey という200ページ以上の出版物をだし て、所員に詳細に報告書の書き方を指示して いる、その中では、英語の表現や言葉の使い 方、文章の構成などに相当なスペースを割い ている.これは, USGS の友人によると, suggestion などではなく,相当な強制力を持 ったもののようである、1909年に初版が出 以後十数年ないし二十年ごとに改訂され、最 近では,1991年に第7版が出た.何事もマニ ュアル化するのが好きな米国人らしいと言っ てしまえば、それまでかも知れないが、これ は、極めて便利なものであり、また、米国の 大学では,院生の各種レポート,論文をこれ に従って書かせるため、地質教室の図書室に 嶋﨑吉彦

は、指定図書として数冊置いてある所も珍しくないようである.したがって、いわば、英語の地学関係の論文、報告書の形式と文章については、権威ある指南書と考えて良いと思う、筆者の手元に第5(1958年),6(1978),7(1991)版の三冊がある.これをもとにして、内容の変遷と面白そうな事項を何回かに分けて紹介するのも、英語国人の地学屋達が間違え易い英語の問題点なども推察され、多少は興味を持っていただけるかと思える.

そうは言ったものの,実は筆者は,この "Suggestions"を読んだことはなく,必要に 応じて辞書のような使い方をしていたに過ぎないので,これから内容を概観しながら,また同時に国連などの英語の扱い方,その他を 含めて地学英語について感じていることを述べ,責めを果たしたいと思う.ただし は 第 は プロの語学屋ではないので,文法には訳すなるく,日・英両語ともに文法的な説明は おろか,間違いの多い文章になると思う.この点はご容赦願いたい.

## 委 員 会 だ よ り

### 「地質学と地震」研究委員会報告

本研究委員会の最初の公式な活動として、「日本列島の地質大構造と地震テクトニクス」と題するシンポジウムを、昨年末に地震研究所において開催した。シンポジウムの目的・研究課題・プログラムは、本稿の最後に掲載されている。シンポジウムの準備が非常に遅れたにも関わらず、延べ128名の参加者があり、日本列島と周辺地域の地質構造・活断層・地震テクトニクスなどに関して33の研究発表と熱心な議論がおこなわれた。シンポジウムの講演要旨集は本年3月頃に印刷する予定である(50部くらい余分に印刷する予定;希望者は住所ラベルを添えて本研究委員会・事務局まで;無料、先着順に送付)。

### 「地質大構造」シンポジウムの背景

わが国の最近の地震予知研究の流れの1つは,日本列島と周辺部の地殻変動をモデル化し,地殻変動・地震活動などのデータと比較することによって,より短期的な地震発生予測を探る方向に進んでいる.このような予測を可能にするには,少なくとも次の4つの段階の研究が必要である.(1)断層系の幾何学的モデルの確立(地質大構造と活断層・地震活動の対比),(2)断層系の運動学的モデルの確立(断層の変位速度,総変位量,断層系の運動像),(3)断層系の挙動のモデル化(理論,シミュレーション,モデル実験),(4)地殻変動のデータとの対比,断層系の挙動の予測,地震発生の予測.

これらの課題の中で、(1)と(2)はとくに地質学者が取り組まない限り、断層系の形態とそれらの地質時代における運動像は明らかにはならないと思う。また、地震が地下深部で発生することから、このような地震テクトニクスの体系化においては、地表の活断層のデータが不可欠である一方で、本質的には基盤地質の構造に立ち入って検討する必要がある。最近は、「断層系の挙動のモデル化」、「地殻の変形過程の解析」といったプロジェクトが始まっているが、地質学者がほとんど関わっていないために、断層系の実体が明らかにならないまま、つまり解析するべき系の幾何学的形態が決まらないまま、断層系の挙動の解析法が模索されつつあるのが現状である。このような現状をもたらしたのは、地震の問題に関わってこなかった地質学者の責任である。

今回のシンポジウムは、このような現状認識に基づいて企画された、講演者の多くにとって地震に関連した研究は初めてであったために、萌芽的・模索的な研究発表がほとんであった。しかし、シンポジウムの雰囲気は、1997年3月の日本地質学会・総会における「地質学と地震シンポジウム」に引き続いて熱気を感じさせるものであった、以下、シンポジウムの講演内容を簡単にまとめ、私(嶋本)の個人的な印象を述べておきたい(敬称は省略)。

### シンポジウム: 講演内容の要約

最初の2つの講演(村田,早坂・三浦)では,最近起こった2つの中規模地震の地質学的位置が論じられた.今後は,地震ごとに,活断層との対比だけでなく,地震の発生場所の地質学的位置が検討されるべきである.精度の高い余震分布は,地質断層が深部にどう延長するかの判断材料ともなりうる.山口県北部地震の余震域は地下約15kmまでほとんど垂直である(早坂・三浦).

初日の主題は、フォッサマグナから日本海東縁を経て、極東ロシアへと続く地震活動帯の地質構造と活断層であった。この地帯は長くプレート境界と言われながらもその実体は明確ではないし、北部フォッサマグナ地域以北は新第三紀以降の厚い堆積物に覆われている上にほとんどは海底であることから、未発見の伏在活断層が存在する可能性もある・大友は東北日本(北海道を除く)の中生代以前の基盤構造と現在の活断層系の方向が明確に斜交することを指摘し、第三紀以降の伸張テクトニクス構造の逆断層運動への逆転と活断層の関係を論じた・高橋ほかと人見ほかの講演では、「東北日本西縁断層帯」の活動史と断層岩を報告した・岡村・倉本は、シングルチャンネル音波探査断面にパランスセクション法を適用して深部構造を推定する試みを紹介し、石田は石油公団が所有する膨大な試錐・探査データの全貌を紹介するとともに、新潟周辺部の地質構造

を詳しく論じた.興味深いのは,最も活動的でプレート境界の候補と考えられる「赤塚・小千谷線」が北東・南西方向に地表断層としては連続しないことである(石田).河内・大木は,新潟地震に伴う地塊の傾動を解析し,日本海東縁地震帯が信濃川地震帯に連続する可能性を指摘して,地震サイクルと褶曲構造からプレート境界の収れん速度を見積もった.大木・徐は,自噴泉の詳細な温度測定結果と電気探査結果などに基づいて,ジオプレッシャー熱水系と伏在断層・歴史地震・地すべりの関係を論じた.ジオプレッシャー熱水異常地帯が地震発生帯である可能性が高く,今後地下探査結果などとの対比が望まれる.

小休止をはさんで、小林は関東山地北縁部の地質構造と地震活動 を論じ、奥村は詳細な活断層調査およびトレンチ掘削調査結果に基 づいて糸静線のセグメンテーションと最新の活動史を論じた、地域 を極東ロシアに移して、A.I. Kozhurin は極東ロシアから中国北東 部の広い地域の主要活断層を現地での写真などを交えてまとめた. 同氏のまとめは、極東地域で提唱されているプレートモデルと一致 しない部分があり、今後、地震活動とプレートモデルとの比較検討 が望まれる. Kozhurin (ロシア科学アカデミー・地質研究所)は 20年近くカムチャッカおよびチェルスキー山地の活断層調査を続 けてきた中堅研究者であり、今年の7月始めまで学振・長期招へい 研究員として地震研に滞在の予定である・極東地方に関して情報交 換・共同研究を希望する方は、同氏まで(kozhurin@eri.utokyo.ac.jp ). 小嶋は,美濃帯と極東シホテアリン山地のサマルカ テレーンを対比するとともに,美濃帯と飛騨外縁帯との境界など, 基盤中の地質境界は活断層とは一致しないことを指摘した、山北は 日本列島と極東シホテアリン山地を対比して、日本海の拡大と中央 構造線などの曲がりを復元して、中央構造線から棚倉破砕帯と畑川 破砕帯を経てパルチザンスク断層とシホテアリン中央断層へと続く 白亜紀の巨大な左横すべり断層系を復元した、

初日の個々の発表内容は大変興味深かったが、日本列島と極東地域という広大な地域を詳しく網羅することはできなかった。しかし、東北日本の地震テクトニクスを理解するためには、北東アジアの地震テクトニクスを地質構造発達史を含めて検討する必要性があることを感じた、フォッサマグナ・日本海東縁プレート境界も、単一の断層からなる明白なプレート境界ではない、このプレート境界域と周辺地域は、今年5月の合同学会でのシンボジウムで引き続き議論される予定である。最終的には、これらの議論を発展させて、現状をまとめた特集号の出版が望まれる。

2日目は,三次元断層,西南日本の地質構造と地震テクトニクス,断層岩と断層のレオロジー,地質構造と地震テクトニクスにまつわる一般的な問題が議論された.山路は,応力と断層系の関係を述べたアンダーソン理論が一般的な三次元歪場における地殻の変形を説明できないことを強調した.そしてアンダーソン理論に対する上位互換理論として,三軸歪みのもとで活動する断層系をいかに理解するかという研究の現状をまとめた.日本列島の活断層系は,このような視点から見直すべきである.

早坂は,地調発行の日本列島の地質図 (1/100万) に東大出版会発行「新編・日本の活断層」の活断層データを重ねて示し,西南日本の活断層の多くは基盤中の主要な地質境界が再活動したものではないこと,地質構成によって活断層の発達様式が異なることを指摘

した.高木は,中央構造線が東方の棚倉構造線と西方の大分-熊本構造線に延長するモデルを提案した(山北は,棚倉構造線と畑川破砕帯に分岐させてシホテアリアン山地へ延長させた).長谷川は,四国の中央構造線付近の地質を地すべりの影響を含めて再解釈し,和泉層群分布域の右横ずれ活断層が領家帯と三波川帯の境界断層の地表延長部である説を提唱した.松岡は四国西部・秩父テレーンの地帯構造区分と構造発達史に関する最新の知見を紹介し,大塚は美濃帯東部の地質と活断層の関係を検討してブロック構造モデルを提唱し,ブロック間の相対変位量を見積もった.林ほかは,六甲・淡路断層系の最新の活動と断層岩についての調査結果を報告し,最近「都市圏活断層図」では活断層ではないと判断された大月断層・五助橋断層・芦屋断層が活断層であることを示した.竹内ほかは,科技庁・地震フロンティア研究の一貫としておこなわれた茂住断層横断掘削プロジェクトの概要を紹介し,坑道内での同断層の産状を報告した.

今回のシンポジウムでは,断層深部の問題はごく簡単に取り上げた.宮下ほかは最近発見された四国西部・八幡浜の大島変成岩中のかなり大規模なシュードタキライトを報告した 藤本ほかと田中は,物質を扱う地質科学の利点を生かして,断層深部の構成物質・変形機構・物質収支を明らかにして,物質科学的視点から地震の発生機構にせまるべきであると主張した・嶋本は,断層の研究を地震現象の理解に結びつけるには断層内部で実際に起こっている変形と流体移動などのプロセスを実験室で再現するために装置を開発する必要があることを強調して,最近開発中のガス圧式変形試験機の概要を紹介した・金川は,最近オーストラリア国立大学でおこなった高温熱水条件下における摩擦実験の結果を紹介し,水が断層内プロセスと断層の力学的性質に大きな影響を与えることを示した・また,森下から幌満かんらん岩体中のシュードタキライト様岩についての要旨の投稿があった(要旨集に掲載)・

本研究委員会では,断層深部の問題に関しては,「断層の実体とレオロジー的性質」をまとめた特集号と,日本列島でこれまで断層岩の研究がなされた断層をまとめた「断層と断層岩のカタログ」を刊行する準備を進めている.

最後の総括的な討論で,金折は中国地方西部で2つの主要断層系を認定し,地震モーメントの平均開放速度から内陸地震の危険度評価を試みた.佃は中部日本~近畿地方の活断層と歴史地震に関する長年の成果をまとめ,地震の活動期を認定するとともに,活断層がどのように連鎖的に地震を発生しているかを示した.塚原は本州・四国の地殻応力分布と断層の関係についてまとめ,これまでの地殻応力の研究成果を総合して,地殻応力の変化が地震発生の長期予測に利用できる可能性を示唆した.伊藤は北海道の地質と反射法探査結果をまとめ,日高周辺の大変興味深い地殻全断面を提唱するとともに,地表の活断層だけで地震の発生を推定することの危険性を指摘した.脇田は地質調査所で作成した地質編纂図をまとめ,とくに最近の地質情報のデジタル化について編纂の方法とデータの利用法について紹介した.本研究委員会で基盤地質構造図と活構造についてまとめることになれば,地調の経験は大変参考になると感じた.

最後に、小松(本研究委員会委員長)は地質学と地震テクトニクスの問題を包括的に論じ、活断層は基盤の地質構造とはほとんど関係がないこと、表層と深部の変形様式は違うことなどを指摘し、日本列島の大規模波曲構造の形成において深部のデコルマンと衝上断層が重要であることを提唱するとともに、現在のテクトニクス場においていかなる地質大構造が形成されつつあるのかを明らかにするこが重要であることを論じた。

### 浮き彫りとなった研究課題

本シンポジウム,およびその後に早坂康隆・大友幸子・林 愛明 と嶋本でおこなった検討会の結果,以下の問題が浮き彫りになった

(1) 古い地質境界はほとんど活動していない. いつくかの例外を除いて,主要ナップ境界などの古い地質構造境界

は活断層で切断されている.このことは,大変重要で,反射法探査結果などから,単純に活断層の深部への延長方向(物質境界としての断層ではなく,活動的な断層の深部への延長方向)を推定することが危険であることを意味している.つまり,構造探査では地質体の物質境界が水平に近いものが強調されて検出される可能性が高いけれども,その境界が活動している断層だという根拠には全くならない.むしろ,地表における活断層と地質境界の関係から類推すると,両者は無関係である可能性が高いことになる.反射法探査結果の解釈には,地質と地質構造発達史と活断層に基づく総合的な判断が必要である.その他,活動的な断層の深部への延長方向を探るには,微小地震発生ゾーンの地質学的位置と傾斜,中~大地震の震源解と余震分布などの検討も必要である.私自身は,デコルマのような水平に近い地震発生ゾーンが得られている例を知らない.

(2) 活断層はブロック構造を作るほどには成長していないのでは ないか?

2,3の例外を除いて,活断層は一部で合体しながらも,全体としてはブロック構造を作るほど連続性はよくないのではないかという印象を受ける.今後は,活断層と同定できる地質断層が,ブロック構造を作るほど連続しているかどうかを,より詳細な地質図(または地質調査)で確認する必要がある.ブロック構造を作っている時といない時とでは,断層系のモデル化の方法がまるで違ってくる.ブロック構造を作っていないとすると,断層がない部分の地殻の変形機構はどうなっているのか?この問題は,「活断層の変位速度が地殻変動の歪速度より一桁小さいのではないか」という古くからの議論とも関連している.また,地殻の変形をモデル化し,地殻変動のデータを解釈するためには,まず断層系を明らかにする必要がある.地質学者は,地殻の変形過程の実体に関するイメージを提供するべきであろう.

(3) 現在進行中のテクトニクスの実体と波曲構造の形成機構.

断層系の運動学的モデルを確立するには、断層の形成時期・活動 史・変位速度・総変位量だけでなく、断層系の動きを少なくとも第 三紀以降のテクトニクスの中で位置づけるべきである。基盤の地質 構造発達史とネオテクトニクスを結ぶ架け橋が必要である。活断層 の総変位も総じて大きくはないという印象を受けるし、下部地殻の 変成岩も露出していないことから、私自身は、波曲構造を説明する ために小松によって提唱された日高山地のようなデコルマ・衝上断 層モデルには疑問をもっている。構造地質学の原点に立ち返って、 断層の挙動も含めて進行中のテクトニクスをモデル化する努力が必要である。

### 研究委員会への登録と今後の活動

「地質学と地震」研究委員会は、兵庫県南部地震後に、地震予知と地震災害軽減のために地質学と地質学会は何をなすべきかを検討するために、日本地質学会に設置された(委員長:小松正幸)、本委員会は、名前から受ける印象のように堅苦しいものではない、地質学の立場から地震に関心をもつ人達が情報ネットを作り、情報交換と、研究の現状のまとめ、萌芽的研究を模索するのが主な活動である。委員会の目標は、新世紀の始め頃に研究の現状をまとめた特集号を出版し、将来の研究課題を提言することである。日常の情報交換は、愛媛大学が管理のegrg@sci.ehime-u.ac.jpを通じておこなっている("egrg"は、"earthquake geology research group"の略)、ネットへの登録希望者は、(1)氏名(ローマ字氏名)、(2)所属機関と支障がなければ身分、(3)新郵便番号と住所、(4)メールアドレス、電話番号、ファックス番号、(5)地質学会会員かどうか、を本研究委員会・事務局までお知らせ下さい。

研究委員会が当初掲げた検討課題は、(1)断層と断層内プロセス(とくに断層深部の問題)、(2)地質大構造と地震テクトニクス、(3)活断層と定量的地震動予測、(4)被害地震直後の緊急調査であった。(1)と(2)については、今年5月の合同学会で、以下のシンポジウムが予定されている。

「フォッサマグナ・日本海東緑・極東ロシアの地質大構造と地震テクトニクス」(短縮セッション名:地質大構造/テクトニクス)

【世話人:伊藤谷生・奥村晃史・倉本真一・石田聖・嶋本利彦】

「活断層の動きを捉える 地震震源域の物理・化学・物質科学的解明」(短縮セッション名:活断層深部物性)

【世話人:飯尾能久・安藤雅孝・平原和朗・伊藤久男・竹内章・藤本光一郎・田中秀実】

また、今年秋に開催される日本地質学会(於:信州大学)においても、「断層岩」と「日本列島の地震テクトニクス」に関するシンポジウムが準備されている。「地震動」と「被害調査」の問題は人手不足で検討が遅れており、それらの問題に関心をおもちの方々の委員会への参加を切望する状況である。

「地質学と地震」研究委員会・事務局 嶋本利彦(東京大学地震研究所,文責)

メール: shima@eri.u-tokyo.ac.jp, Fax. 03-5802-3391

.....

### 報告

地震研究所シンポジウム

日本列島の地質大構造と地震テクトニクス

日 時: 1997年12月18・19日(木・金)

場 所:東大・地震研(第1会議室)

世話人:伊藤谷生,小松正幸,塚原弘昭,早坂康隆,嶋本利彦シンポジウムの目的:日本列島の地質大構造に関するデータをまとめ,活断層と対比することによって地質学的にどの部分が内陸大地震を起こしているかを明らかにする.断層系のモデルを提唱し,地震テクトニクスの体系化に努める.

### プログラム

【12月18日(木)】

13:00~15:40 **(午後前半)**, 座長: 奥村晃史

シンポの趣旨と連絡……嶋本利彦

最近の地震の地質学的背景

鹿児島県北西部で起こった地震(1997年3月,5月)と北薩屈曲... 村田明広

山口県北部地震の地質学的位置 (短報) ……早坂 康隆・三浦勝美東北日本・日本海東縁・フォッサマグナ・極東ロシア関係

東北日本南部の基盤構造と活断層......大友幸子

新潟県北東部五頭花崗岩体に分布する脆性断層系の発達過程

......高橋美穂・正田直也・豊島剛志・小林健太・人見香奈子

東北日本の地質構造および活断層からみた東北日本西縁断層帯......

人見香奈子・豊島剛志・小林健太・高橋美穂

日本海東縁のシングルチャンネル音波探査断面による深部地質構造 の推定……岡村行信・倉本真一

石油探鉱データセットは地質構造解釈にどこまで使えるか? 基礎試錐と基礎物理探査の現状 ……石田 聖

ジオプレッシャー熱水の異常温度分布から検出された日本海東縁部の活断層系......大木婧衛・徐 輝竜

1964年新潟地震による地塊の傾動と信濃川地震帯のテクトニクス

.....河内一男・大木靖衛

15:55~18:10 (午後後半), 座長:早坂康隆

関東山地北縁部の地質大構造と地震活動との関係……小林健太

糸魚川 − 静岡構造線の最近の活動とその地質的背景について ……奥村晃史

Major active faults and seismotectonics of Far East Russia..... A.I. Kozhurin

東アジアのジュラ紀付加体の大構造と応力場の変遷:美濃帯と極東ロシアを例として......小嶋 智

日本列島 - シホテアリンの白亜紀左横すべり断層系の復元.....山北 職

総合討論......奥村晃史・早坂康隆・嶋本利彦

【12月19日(金)】

9:00~11:50 (午前), 座長:伊藤谷生

断層系の挙動の解析

断層系とテクトニクス:アンチアンダーソン理論……山路 敦 西南日本の地質大構造と地震テクトニクス

西南日本の構造発達史と活断層......早坂康隆

中央構造線の東方延長と西方延長.....高木秀雄

四国における中央構造線活断層系の地下構造......長谷川修一

四国西部の南部秩父テレーン.....松岡 篤

付加体の構造からみた活断層の変位 美濃帯東部の例......大塚 勉 六甲-淡路断層系の運動像と第四紀後期の活動性....... 林 愛明・重 富素子・丸山 正・宮田隆夫

活断層を掘り抜く:茂住断層横断坑道調査速報......竹内 章・伊藤谷生・田中秀美・西川有司・迫垣内 薫・岡田洋一

13:00~14:10 (午後前半), 座長:塚原弘昭

断層岩と断層のレオロジー

機の紹介.....嶋本利彦

四国西部,八幡浜大島変成岩のマイロナイト化作用とシュードタキライト……宮下由香里・小松正幸・米虫 聡

地表から震源深度に至る断層内物質の物質分布及び物質収支の実証 地震予測研究への震源物質解析からの視点.....物質地震学グル ープ(世話人:田中秀実,講演者:藤本光一郎)

物質地震学のめざす方向……田中秀実・物質地震学研究グループ 断層のレオロジーの研究を担う機器開発:製作中の高温ガス圧試験

地震断層の力学的特性に対する圧力溶解の影響:熱水条件の摩擦実験による検討......金川久一

14:20~17:00 (午後後半), 座長:藤本光一郎

地質大構造と地震テクトニクス (全体に関わる問題)

中国地方西部の活断層系と危険度評価......金折裕司

近畿・中部地域の活断層系の挙動 歴史地震・地震断層調査からの 考察...... 佃 栄吉

本州・四国の地殻応力分布と地質大構造,地震テクトニクス ……塚原弘昭

日高衝突帯の深部地下構造と衝突帯最前縁のアクティブテクトニクス......伊藤谷生

広域地質編纂とそのデジタル化......脇田浩二

日本列島の基盤地質と活断層系.....小松正幸

総合討論……小松正幸・伊藤谷生・塚原弘昭・早坂康隆・嶋本利彦 講演要旨のみの投稿

幌満かんらん岩体の特異な蛇紋岩の起源 地震活動で形成された蛇 紋岩……森下知晃

### 第7回環境地質学シンポジウムの総括

1997年12月1日,2日の両日,東京「北とびあ」において,日本情報地質学会および日本鉱物学会と共催で,上記シンポジウムを開催した。このシンポジウムは,地質環境を相手とする研究者,技術者やそれに関係する人々の講演および討論から成り立っており,関係学会員以外にも広く門戸を開いている。両日の参加者はおよそ200名,講演数は77題であった。講演はその内容から,あらかじめ11のセッションに分類され,各セッションごとに討論時間を設けた。今回も含めたセッション名の変遷からも判ることであるが,環境地質領域は従来の地質学の枠にとらわれないで柔軟に対応してきた。しかも,各領域の内容は年毎に深みを増している

各セッションの座長がまとめた,担当セッションの講演・討論の概要,それらの分野の現状認識および展望などを掲載し,今後の舞としたい。

また,第8回シンポジウムは本年11月に大阪で開催する予定である.各位の参加を期待している.

なお,今回の論文集購入希望の方は,学会事務局まで申し込んで戴きたい(414p.,定価4,000円 郵送料別途 )

### <地質汚染>

本セッションでは、14編の論文が発表された.このうち、有機 塩素化合物による地質汚染に関するものが11論文であった.これ らはさらに、地質汚染調査に関する論文とその浄化に関する論文に わけられる.

地質汚染調査については、堆積相解析の手法を地質汚染の「場」 の把握に応用した事例,人為的な地下水位の変動に伴って地質汚染 が拡散した事例のほか、いわゆる「君津式表層汚染調査法」に関す る論文がいくつか発表された、さまざまな地質状況(洪積台地のほ か,扇状地や沖積低地)で,上記の調査法の適用事例が報告され, その有効性や調査時の問題点が議論された、しかしながら、有機塩 素化合物による地質汚染調査の初期調査としては、「君津式」を代 表とする簡便な地下空気汚染調査法を適用して、測定密度の高い調 査を実施し、正確なホットスポットの把握を行うことの重要性が指 摘された、また、この調査によって地質汚染地点を絞り込み、ボー リングを含む詳細な汚染調査を実施して、地質汚染の実態を把握す ることの重要性が認識された.このこととともに,前述した地質状 況の把握や地下水位の変動状況など、空間的・時間的な観点も加え た地質汚染の状況把握が必要であろう 地質汚染の浄化については, 地下への空気圧入, 地下空気の吸引, 地下水揚水といったさまざま な方法についての発表がなされた、これらの論文では、精密な地質 汚染調査に基づいた浄化対策を実施すれば、地下水汚染は解決でき るとの指摘が多かった.

このほかの3論文は、北海道旭川地域の地下水位変動にともなう水質変動事例、静岡平野西方の硝酸性窒素による地下水汚染の状況、ベトナムNga Son-Hai Phong 沿岸地域(ハノイ市の南東海岸部)の浅海域における海水と海底堆積物の重金属汚染に関する論文であった。これらはいずれも、地域地質に相当するようなケーススタディであるが、とりわけ、最後の論文はベトナム国立大学のMai Trong Nhuan 博士が来日されての発表で、海外のフィールドに関する「生」の報告として印象深かった。

地質汚染は,現在,社会的注目度の高い分野であり,総じて熱のこもった発表が多かった.今後は,多数の地質汚染に関する事例報告が発表されることを望むとともに,より活発な討論が行われることを期待する.

(深見浩司・間中理哉)

### <微生物と地質汚染浄化>

本セッションでは5編の発表が行われた. 汚水の新しい浄化法に関して1編, 室内溶出試験について1編, 深部地下水の微生物調査が1編, メタン資化細菌による浄化に関する研究が2編である.

小泉は,力キ殻を利用することにより,化学薬品を使用しないで 汚水を浄化する方法について報告した.カキ殻に住みついている有 機物汚泥を補食する微生物群を乾燥状態にして仮死させ,これを汚 水に戻して蘇生させて,有機物を餌として取り込むことで水を浄化するという提案である.福田&平野は,掘削ズリにパクテリア存在の下,降雨が浸透し重金属を溶出させるという自然環境を室内で再現した通水溶出試験を行い,長期的な溶出状況を観測した.パクテリアによる酸化反応が始まるまでに約8ヶ月を要したことが報告され,重金属溶出による危険性を判断する場合,通水溶出試験の期間を十分とる必要があることを指摘した.青木らは,釜石鉱山における深部地下水中のパクテリア分析を行い,酸化菌に比較して還元菌が圧倒的に多いことから,水質が還元的な環境であることを明らかにした.また,硫酸塩還元細菌の活性領域から地下水の酸化還元電位(Eh)を推定する試みを報告した.

トリクロロエチレン(TCE)汚染地層をメタン資化細菌を用いて 浄化するための研究が2編報告された、難波らは、汚染サイトの観 測で重要な項目であるメタン資化細菌の計数方法について報告した、竹内らは、TCE汚染サイトの環境の把握と分解実験について 得られた結果を報告した、Biostimulationによる浄化処理は、地下 水にメタンや栄養塩などを供給して、内在性のメタン資化細菌の増殖を促し、それらが持つ酸化酵素によってTCEを分解させる方法 である、これは、低濃度のTCE汚染に対して低コストで浄化処理 を行えるという特徴があり、今後の発展が望まれる。

以上,微生物と地質汚染浄化について,来年も多くの報告がなされることを期待したい.

(青木和弘・福間 進)

### <廃棄物最終処分場とその対策>

本セッションでは7編の発表が行われた.そのうちで,最終処分場の安定化と試験方法に関するものが4編と多かった.それらは,(1)最終処分場の物質収支(2)建設系廃棄物の有害性試験法(3)最終処分場の強制的ガス抜き等対策井の設置手法と地質環境対策効果について(4)焼却灰・汚染地質中の有害無機成分の固定処理の基礎的研究の4つの報告であった.

また,処分場の閉鎖について(最終処分場の閉鎖に関する基礎的 手法について),廃棄物による汚染について(中間処理施設跡地の 地質汚染調査と対策),処分場の立地適正について(最終処分場と 地質学的パリアについて)の報告が,それぞれ1編づつ発表された.

現在のように,処分場が安定型処分場,管理型処分場,遮断型処分場にわけられたのは,東京都江戸川区で六価クロムによる地質汚染が発生し,社会問題になったのがきっかけであった.当時の管理型処分場は20年たち,BOD濃度も減っているから閉鎖してよいではないかという考え方があり,閉鎖までには30年は必要だという意見もある。

処分場の跡地利用は大切であるが,焼却灰の中には重金属が濃縮され,ダイオキシンも含まれている.処分場からの浸出水のなかの

ダイオキシン濃度は,まだ測定されていない.重金属やダイオキシン等の物質が処分場内でどのような挙動を示すか,時間経過とともにどのように安定化するのか等のメカニズムが解明されてはじめて,より安全な処分場管理ができ,より信頼できる閉鎖条件が作られる.このためには処分場に関する,より多くの基礎研究の積み重ねが必要であろう.

今回の発表は,これらの問題にせまる基礎研究であった.

(福間 進・青木和弘)

### <地質環境の計測・測定>

本セッションでは次の6題が発表された.

吉田充夫「空中浮遊塵の磁気的性質と大気汚染モニタリングの試み」では、粘着テープの大気曝露によりサンプリングされた塵埃の磁気的性質から、大気の汚染状況を評価することが提案され、実測データも発表された。根岸義光(発表者:石田聖)ら「土壌ガス地化学探査へのリモートセンシングデータの適用」、津賀公ら「小型ケロジェン分析計を用いた油汚染検知」、石田聖ら「"前世代型"溶存微量ガス分析装置による地質環境計測」の3題は、元来石油等の化石燃料資源探査を目的としてきた技術を地質環境の調査に応用するための試み、および実測結果の発表であった・中丸宣志ら「ガス検知管を用いた溶存ひ素測定法の検討」では、水中および地質中のひ素を前処理により抽出して、既存のアルシン用検知管を用いて検出する方法が試みられた。広瀬彰一ら「硝酸体窒素簡易測定法の適用性について」では、簡易測定法であるパックテストによる測定値と、JIS法分析との比較検討が行われ、共存物質が妨害する場合の補正法も示された。

以上の発表を概観すると、より高性能・高感度を目指す方向性と、より簡易・安価を目指す方向性との対比が際だっているようにみえる.しかしながら、両者は相反するものではなく相補的なものであることが発表後の討論でも確認されている.そして、目的に応じた分析精度の見極めを事前に的確に行うことの重要性が強調された.ハイ・ロ・ミックスなる軍事用語があるが、我々の分野でも使える概念ではないだろうか.また、「ハイ」「ロー」両者が共通して目指すものが、いずれも現場分析であるということも明確になったように感じられた.吉田のパキスタンにおける測定、あるいは根岸(石田)らの中国における測定などのようなグローバルな展開も今後ますます重要性を増すことが予想されるため、「現場分析」は極めて重要なキ・ワ・ドとなろう、最後に、関連の深いく地質汚染>のセッションと重なってしまったのは少々残念であったことをつけ加えておこう.

(吉田充夫・中丸宣志)

### <法地学・環境行政>

本セッションでは,江藤は「刑事事件捜査における砂粒の地質学的研究の一例」,酒井ほかは「水源の相違と飲料水利用費用について 地下水資源と表流水源の場合〔千葉県内の事例から〕」,小荒井ほかは「日本の地震活動 地震被害からみた地域別の特徴 」の刊行について,鈴木は「建設残土の埋立処分と残土条例」の4編が発表された.江藤は,遺棄された死体に付着した砂粒の性質や由来を精査し,その付着現場(事件現場)を特定した例を報告した.酒井ほかは,飲料水源としての地下水と表流水の費用比較を行って,地下水水源が安価であることを報告した.小荒井ほかは,政府の地震調査研究推進本部の地震調査委員会がまとめた演題とした政府刊行物の特徴とねらいを報告した.鈴木は,地質汚染の原因となる残土処理に対処すべく,有害物質の排除を規定した全国初の制定となる君津市条例を紹介しその背景も報告した.

総合討論では、地質学が単なる研究対象だけではなく、司法や行政機関でも重要な役割を負わされていることが確認された.

(鈴木喜計・岡野英樹)

#### < 残土資源とその有効利用 >

近年,汚染された残土の埋立による地質汚染が問題となり,新聞記事等で取り上げられる機会が多くなってきた.

このような状況で本セッションでは、香村ほか「残土層調査への電気探査の適用について」、楠田ほか「残土埋立地の六価クロム汚染例とその調査」、岡野ほか「汚染地質中の重金属の吸着固定化について」の3編が発表された。

香村ほかは、埋立が終了した残士処分地で電気探査による電気比抵抗の測定をおこない、地表探査により地表から残土層の分布を捉えることが可能であることを報告した・楠田ほかは、地質環境に対する残土の係わる諸問題からはじまり、六価クロム汚染の調査を機に残土における地質汚染調査のあり方について報告した・それによれば、残土層内の堆積機構・透水層単元を明らかにするとともに、汚染物質の挙動を把握した上での対策が重要とのことである・岡野ほかは、天然素材を利用した遮水技術からの応用として、汚染された地質中の重金属を対象に固定化すれば、土木工事において発生した汚染残土を埋戻し土として利用可能であることを報告した・

残土は、土木工事等で発生する「発生土」であって有効利用を進めれば商品価値を持ちうる資材なのである. もちろん地質環境への汚染の心配のない安全な残土が対象になるのであるから、今後、これらの研究が寄与することを期待したい.

(鈴木喜計・岡野英樹)

### <水文地質環境>

このセッションは,古くて新しい問題から構成されており,発表テ・マは,地下水位変動と湧泉(4件),地下水涵養(1件),地盤沈下と地下水位変動(2件),地下水盆管理のためのデータベース(1件)の計8件であった。本セッションのこれまでの発表件数は,多い時で10件(1992年第2回)であったが,ここ2年間は4件と少なくなっており,今回件数が元に戻りつつあることは非常に喜ばしいことである。以下に発表内容を簡単に整理し,討議の内容についてまとめ,報告する。

佐々木ほかは、降雨と地下水位変動との相関について報告すると ともに、循環モデルを提示した、富樫ほかは、湧泉の湧出機構(湧 泉群の形成)が帯水層の分布だけではなく,基盤の地質ならびに地 質構造と帯水層との相互関係が大きく関与していることを報告し た、富樫は、都市における湧泉保全の具体例を示し、保全、管理の タイプから3つに分類した.さらに湧泉が人々に有効に利用される ことの必要性を指摘した、香川ほかは、下総台地の雨水の涵養と宙 水の水位変動について詳細な観測結果を報告した、丸谷ほかは、砂 利採取に伴う地下水影響に関する調査計画,ならびに事前の状況把 握について報告した、香川ほかは、千葉県における地盤沈下と経年 地下水位変動について報告し,揚水量の正確な把握が必要であるこ とを指摘した、古野ほかは、関東における地盤沈下と経年地下水位 変動について報告し、地下水利用に係る監視体制充実の必要性を指 摘した、藤崎は、パソコン・レベルにおける地下水位・水質のデー タベース化の例を示した、またデータベースを利用したシミュレー ションへの発展性について述べた、発表全体を通した印象として、 現場を詳しく見て実際に生じている現象を詳細に把握しようとする 方向性が強く感じられた。

発表で定性的なモデルによる現象の説明がいくつか提示されたのに対し、定量化の方向でモデル(シミュレーション、データベースなど)を構築する可能性について討議された、不飽和浸透、特にパイプ、亀裂などPreferential Flowの効果を考慮する困難さを始めとするモデルのもつ危うさを指摘する意見や、現地観測をまだまだ積み上げる必要があるのではないか等の意見が提出された、一方、種々の人為的な開発や資源利用のためには、何らかの方法でモデル化を行わなければ先へ進めないという視点等が指摘された。これら対立するような意見が提示されたが、どちらも水文地質環境をよく見ながら有効な利用を図ろうとする点は一致していると思われる、このようにモデル化およびその利用にかかわる利点、危うさについ

て,積極的に話し合う場が得られ,非常に有益であったと思う.短い時間ではあったが,回を重ねながらこれらの問題について検討を続けていくことが望ましいと考える.

(富樫 均・丸谷 薫)

### <地すべり・斜面崩壊>

本セッションでは、井口 隆らの「1997年5月に起きた八幡平澄川地すべりの特徴と地すべり地形分布図」、佐藤照子らの「1997年7月10日針原川土石流災害の被害と土地環境」、森脇 寛らの「針原川土石流の運動と流動化のメカニズム」、保谷 勲らの「地すべりのミクロなメカニズム NaCl 溶液が粘土鉱物に及ぼす作用」、および田結庄良昭らによる「神戸市東部、鶴甲付近の斜面崩壊地域の花崗岩の性質」の5編の研究発表が行なわれた、以下に発表の概要を記す

井口らは1997年5月に起きた鹿角市澄川地すべりに関し、これが 既存の地すべりの再滑動であること、その背後の巨大地すべり地形 内に生じた二次滑りであることを「地すべり地形分布図」に基づい て報告した、また地すべりの変形状態や堆積物の分布状況から、澄 川地すべりはSqueeze型の運動をしたCap Rock タイプの地すべり であるとした. 佐藤らは1997年7月10日に鹿児島県出水市針原川 で起きた土石流による被災地の災害土地環境について報告した、発 表では被災地を被災状況に基づき3つに地域区分し、それと地形区 分など自然条件との関係について論じると共に、被災地においてど のような住まい方をしてきたのかなどの社会条件について歴史的変 遷もふまえて分析した. 森脇らは前講演者と同じ針原川土石流につ いて、現地調査に基づいて流動過程の数値シミュレーションを行な った. 針原川土石流は山腹崩壊に起因する土石流であるが, 崩壊発 生斜面の勾配が緩いこと、運動計算により求められた動摩擦係数が 0.144と小さいことなどから、崩壊時に流動化して渓流に流れ込み、 高速で流下したと報告した、保谷らは石川県花坂地すべりのすべり 面付近の粘土鉱物と地下水の分析を行ない, すべり面が NaCl に起 因する高い導電率を示すこと、下層粘土の膨潤性が高いことなどを 明らかにし、地下水中のNaCIの増大が粘土粒子の凝集やスメクタ イトの層間陽イオン交換による空隙の増大が地層を不安定化させた というミクロなメカニズムを推定した.田結庄らは兵庫県南部地震 によって発生した六甲山地の斜面崩壊が磁鉄鉱系の花崗岩地域に多 発すること、これらの磁鉄鉱が花崗岩の熱水変質に伴って黒雲母か ら生じてることを明らかにし、地震時の斜面崩壊発生には花崗岩の 性質という地質的要因も大きな要素であることを報告した.

(井口 隆・田結庄良昭)

### <地震地質および地殻変動>

このセッションでは、17題の講演がおこなわれた.それらの内容は、講演順に、(1)地震調査研究推進本部(総理府に設置)による活断層調査の現状、評価結果と問題点、(2)最終間氷期に形成した海成段丘の高度を指標に求めた新潟県本州沿岸地域の地殻変動速度,(3)地殻変動速度と上部更新統の層序から推定した新潟県高田平野の地質構造と活断層、(4)1987年千葉県東方沖地震の前後の期間における千葉県東京湾沿岸地域の水準点変動、(5)古地震による富山平野の液状化地点と被害の分布、それらと地形・地質との関係、(6)濃尾平野の活構造と自然災害との関係および活断層の物理探査手法、(7)神奈川県温泉地学研究所が取り組んできた地震予知研究の歩み、現状と今後の展望、(8)下総台地の牛尾枡遺跡で発見された縄文時代中期の住居跡を切る断層、(9)神戸市長田区で実施されたGS-K4のコアに含まれる火山ガラスの分析結果、(10)阪神・淡路大

震災の際に、家屋の倒壊などで生じた西宮市と芦屋市の道路通行障害と震度や微地形との関係,(11)兵庫県南部地震によるコンテナの移動と貝類の打ち上げ現象に着目したポートアイランドの変位,(12)野島断層などの変位量の解析にもとづいた上部地殻の成層構造,起震断層と地表断層の関係,(13)地震探査と微動探査による中国雲南省麗江盆地の地盤構造と1996年麗江地震の被害分布との関係,(14)谷を埋めた盛土地で実施した短周期微動観測結果と盛土層基底面の形状との関係,(15)千葉県で進められている強震動モニタリングシステムの開発状況、構成,機能と活用,(16)千葉県強震観測網による1989年から1995年にかけての観測データの解析結果,(17)K-NETなどのデータによる房総半島周辺で発生した地震の最大加速度値と表層地質との関係。であった。

講演終了後の討論では、前半は、参加者からの「地震観測システム構築や観測データの利用に縦割り行政の弊害が現れていないか」との問いかけに対して、「弊害がみられるものが多いが、自治体によってはうまくいっている」、「国と県、県と市でそれぞれ役割をもち、機能している」、「「大一NETでは可能な限り共有化を進め、弊害を除くようにした」、「行政では環境と防災に課が分かれているが、一本化すべきものである」などの意見がだされた、後半は、「活断層とのつきあい方」をめぐって、「活断層は地震の啓蒙に有効である」、「活断層と地震の前兆現象の発表はどのようにおこなうのが適切か」、「現状では、具体的な地名がでる委員会は非公開である」、「パニックを防ぐために、地学教育の水準をあげることが重要」、「防災教育と環境教育は一体化すべきである」、「防災に地質の専門家をおくべき」などの考えが述べられた、

(仲川隆夫・楠田 隆)

#### <地球環境の変遷と環境問題>

本セッションでは5編の発表講演が行われた.この中の1編は,ベトナムハノイ大学, Maiのハイホン地域ジオハザードの紹介も含まれた.

三田村が発表した天満層の問題は、関東地方での下部沖積層であ る七号地層と同様な対比上の問題を含んでおり、年代測定データを 加味して、対比精度を向上させた、今後年代測定データを更に補填 し、天満層の層序確定が高精度で行われることを希望したい、楠田 の房総半島の砒素の報告は、砒素濃度の高い場所が偏りを見せてい ると言う一次報告である、高濃度の地域が沖積低地部に偏っている 点は、大変興味がある点である、自然現象か人工改変によるのか今 後の研究成果を待ちたい、井内の海跡湖の底質成分の変遷を過去の 海水面変動に伴う環境変化と結び付けた点は、興味深い、地球温暖 化に伴う海水面の上昇への防御としての閉鎖性水域の発生が水質に どの様に影響するかと言う点で、このような研究事例の蓄積は、重 要と考える、研究サイトの選定も含め、総合的な判断が、必要と考 える、青木の富栄養化防止については、河川の水環境を総合的に且 つ、細部にわたって把握し、富栄養化のメカニズムを論理的に展開 している。また、メカニズムの仮説を検証するため、室内試験を行 っている.その点で,大変努力の後が読みとれる謙虚な論文である. Mai のベトナムハイホン周辺のジオハザードの紹介は,地質,活構 造,地震環境,地盤や地形変状とかなり多方面に及ぶものであり, このような、ジオハザードを十分把握した上での地質環境悪化への 最も合理的な対応策について検討しようとする姿勢には、大変共鳴 を受けた、ここで、生じている地盤変状について、人工改変による 影響度合いが一層明確にされ、自然環境にやさしい地域開発を望み たい.

(井内美郎・馬場干児)

## 専門部会記事

以下は,去る10月11,12日の福岡大会の折に九州 大学において開催された,専門部会によるランチョン の報告記事です.

### 層序部会

(10月11日)

会場が講演会場と異なっていたために,移動を必要とし,弁当の みでお茶が無く食べにくかった.会場のスクリーンの上げ方が分か らなく,黒板を使用できるまで待たなければならなかった.

参加者:赤羽貞幸・秋葉文雄・江藤哲人・芳賀正和・長谷川四郎・ 久富邦彦・星 博幸・入月俊明・新妻信明・能條 歩・嵯峨山積・ 斉藤 直

新たに発足した部会の初顔合わせであるので,参加者の自己紹介 の後,部会組織についての説明と検討しなければならない事項の説 明があり,代表者・幹事の選出を行った。基本的には現行のままと

代表者:新妻信明

行事幹事:高橋雅紀・秋葉文雄

編集幹事:柳沢幸夫 各賞推薦幹事:江藤哲人 連絡幹事:新妻信明

の構成で来年度まで継続することとした.選出方法は,今後検討することとした

シンポジウムの企画としては、広域テフラの追跡の年代が古くまで溯ることができるようになり、化石層序も詳細になってきたので、このような内容を盛り込めるシンポジウムが考えられる。また、このような内容に限定すれば秋の年会のセッションでも行えるので対処することとした。

ランチョン終了後,連絡幹事を星 博幸 (hoshi@auecc.aichiedu.ac.jp) 氏に依頼することとなった.

### 地域地質専門部会

(10月12日)

参加者:20名.はじめに天野一男(茨城大学)より,本専門部会設置の経緯について説明があった.その後,論文賞推薦の窓口と専門部会の幹事を決定した.大部分の時間は本部会のあり方について意見の自由な交換を行った.

- 1.本年度より論文賞は各専門部会からも推薦できることになったので,本部会でも推薦を募ることにした.推薦論文がある場合には10月末日までに滝田良基氏(ニュージェック)に連絡することとした.
- 2. 斎藤 眞氏(地質調査所)を行事委員に選出した. なお,昨年度は小坂和夫氏(日大)に行事委員を担当いただいた.
- 3.本専門部会はその性格上,特定のグループが主体となることが無いので,多くの会員からの意見を集約しつつ運営することが重要と考え,部会のあり方や活動について自由な意見交換をした.出た意見の内,主要なものを下に列挙する.
- (1) 本専門部会の守備範囲を地球外惑星にまで広げたらどうか、特に月ロケットによる月面探査も近々計画されていることを考えると,地質学会としてもこれに積極的に参加するべきである.本部会が受け皿の一つとなったらどうか.
- (2) 毎年の学術大会ごとに,開催場所にちなんだ特徴的な地域地質シンポジウムを計画する.
- (3) 各種の土木工事等に伴って,すばらしい人工露頭ができるが,

これらの情報を本部会が中心となってまとめたらどうか、そのためには人的ネットワークを組むことが重要となろう、また、ホームページ等を積極的に利用することも考えたらどうか、

- (4) 層序部会等との住み分けを考える必要がある.そのためには 個人護演について分野分けなど工夫することも必要ではないか.
- (5) 年会とは独立に各地で巡検を企画する.その際,大学の野外 実習の単位に出来るような工夫もしたらどうか.
- (6) さまざまな所で企画される一般市民向けの普及講演や各種イベント等に積極的に協力したらどうか、例えば九州大会の「九州からのぞいた地球の謎」のような企画の地質学会側の受け皿となること、一般向け巡検や化石鑑定会等も企画できるのではないか、
- (7) これからはますます地質学の普及教育が大切になるから,本部会に普及教育担当幹事をもうけてはどうか.
- (8) 本部会への登録を全国規模で積極的に勧めるべきである.支部との関係を緊密にすることも重要な課題である.活動が停滞している支部の再建のきっかけも作りたい.
- (9) 中古生代の地質について,あらたな観点からシンポジウムを 企画したい.

本部会は地質学会の最も根幹ともなるべき部会であることを考えると、全ての会員が自由に参加できる体制を作ることが大切である、 多くの会員の本部会への登録と意見の集約をお願いしたい、

(天野一男 記)





### 関東支部

## 関東支部第9回地質汚染(土壌を 含めた地層汚染・地下空気汚染・ 地下水汚染)技術研修会報告

昨年4月に水質汚濁防止法が一部改正され,地下水汚染が判明し, 汚染原因者が確定されると,知事名で浄化命令がだされることになっていいるものの,依然として地質環境はよくならないというのが現状である.というのも,地質汚染の調査手法・浄化対策があまり知られていない,やり方がわからないからであろう.関東支部ではこのような悩みを少しでも解消しようと,平成元年から千葉県の楡井さん,鈴木さんたちの協力で地質汚染調査・対策技術研修会を行うことで取り組んできた.今回でもう9回目を迎えた研修会で,地質コンサルタント会社に所属する人や化学分析,プラント製造などの業種の方々が地質汚染の機構や調査の流れ,浄化対策の方法など実地研修をしながら体験し,400人を越える研修生が巣立っていった.

表記研修会は平成9年10月27日(月)~10月30日(木)3泊4日の日程で,千葉県君津市のサンピア君津を中心に久留里地区の汚染現場を実習地にして行われた.研修内容は以下の通りである.

1日目

開講式,地質学基礎講座,地質汚染基礎講座,地質汚染の現状, 懇親会

2日目

環境監査と地質汚染リスク,千葉県の地質汚染対策の現状,地質 汚染調査技法 ,久留里市場汚染現場の汚染機構と浄化,地質汚 染簡易測定法,久留里市場汚染現場見学と実習,地層の連続と不 連続

3日目

土壌の見方と機能,現場分析とラボ分析,地質汚染調査技法 ,ボーリングコア観察の記載と分析実習,地下水の流れ方,地下水流動とシミュレーション

4日目

地質汚染浄化とモニタリング,残土が及ぼす地質環境リスク,内 箕輪地質汚染汚染現場の調査と現地見学,閉講式

参加者は34名で内女性1名である.

研修最終日には青木支部長より修了証書を全員に渡した。

例年通り,研修会名簿いちばんの方に,研修会の感想を寄せても らったのでここに紹介します.

### 君津研修を終えて

田中恵子

まだ学生の身でありながら,第一線で活躍されている先輩方と肩を並べて研修を受けさせてもらえるなんて,恐縮の至りと思っていたのになんと受講番号いちばんということで皆さんを代表して感想文を書くことになるなんて,恐縮を通り越して心苦しさも感じています.「思ったことを書けばいいよ」との今回お姉さん的な存在だった檜山さんの温かいお言葉の通り素直な気持ちで書かせて頂きます。

10月27日開講式もそこそこに全員スーツ姿のまま,品田先生の講義で3泊4日の君津研修はスタートしました.まず,教室で出迎えてくれた分厚いテキストに驚かされ,4日間でこれを終えるつもりなのだろうかと改めて厳しい研修だと言われたことを思い出しました.先生方はスライド等を使い地層の基礎から素人の私などでも分かるように丁寧に説明して下さいました.けれどやはり教えることがあまりにも多すぎるのか,ほとんどの先生が「時間が足りない」と言っておられました.

でも、そこは泊まり込みの研修と言うこともあって、自己紹介がてらの初日に始まり、連日の飲み会で講義中に分からなかったところや先生方の現場での体験などを酒とつまみを囲みつつ皆で話し合い、もう2日目からはすっかり仲良く話をできていたように思います。

講義の中で現地実習があり、バスで移動して汚染の簡易分析法やボーリングコア分析で実際の現場での仕事を見せてもらうというものがありました。私も、ボーリングバーというものを使わせてもらい、実際にやってみたのだけれど、とにかく重い、結局最後まで穴にさすことができなくて、やはりこういう仕事は女には無理なのだろうかと落ち込んでいると鈴木先生が「こんな肉体労働は数をこなすのは大変なのだから作業員を雇えばいい」という神のような一言で単純な私は"なんだ、そうか"なんてあっさりと立ち直ってしまいました。それにしても調査のための器具やその使い方、始めてみるものばかりでただ見とれているばかりでした。

特に、3日目の実習でコアチェックは実際に土を見て触ってチェックシートに記入するというものだけれど、日頃土を踏みつづけるだけの私はシートに書くことなんてものの数分で終わってしまい、それでもなんとか空白を埋めようと悪戦苦闘していると、先生の書かれたお手本のようなものを見せられて圧巻、真っ白であったはずのその紙にこれでもかというくらい隙間なく地層の状態が書かれているのです。職人技と言うものがあるけれど、まさしくこれもその一つだと思いました。

研修で学んだ地質調査のことを知らない人に説明してあげられる ほどまだ理解はしていないと思います。でも,私たちに教えてくれ た先生方の地質汚染に対する熱意だけは,はっきりと感じとったも のの一つにあげられると思います。研修でいろいろな方と知り合え ていろんな話をしあえて,大変うれしく思います。また出会う機会 があれば,そのころには地質のことについてでも語れる自分になっ ていたいと思います。

本研修会を進めるにあたり講師の先生方を初め、君津市環境部の方々にはご多忙中にもかかわらず原稿や、現場を提供して頂くなどいろいろご配慮を賜った.また、ガステック(株)より研修会で使用する検知管、吸引器を、テクノアース(株)からはボーリングバーなどの機器の提供を受けた.また、サンピア君津さんには施設をお借りするなど協力を賜った.ここに紙面を借りて厚くお礼を申し上げる.

.....

### 関東支部総会と巡検のお知らせ

関東支部総会が5月19日(火)13:00から北とびあ「つつじホール」で行われます。また、総会をはさんで、講演会も行います、詳細については3月号でお知らせいたします。5月~6月に火山灰巡検(大磯丘陵)、シーケンス層序学巡検(茨城県潮来町)を企画しております。これらについても3月号でお知らせする予定です。



### 会員の声

### 「地質学会の民主主義を守る会(準備会)」に思う

周藤賢治

さる1月30日に,友人で地質学会の会員でもあるA氏から,1通の速達が届けられました.封筒の中には「地質学会の民主主義を守る会(準備会)」(以後,「準備会」とよぶことにします)が1月27日に発行した「5000人のニュースNo.1」なる冊子(B5判8ページ)がありました(かぎ括弧は筆者).A氏の手紙には,こんなものが郵送されてきたが,どう思うかという趣旨のことが書いてありました.

この冊子は、世話人一同(倉林三郎、金井克明、斎藤尚人、堀口万吉、保科 裕、松本俊幸、吉田 尚の各氏)による「私たちのうったえ」(1ページ)、藤田至則氏による論説「1995年6月以来の地質学会の異常運営を憂える」(2~3ペ・ジ)、倉林三郎氏と金井克明氏の連名による論説「執行体制整備委員会の危険な動き」(4~5ペ・ジ)のほかに、資料(日本地質学会の運営・法人化 その経過と問題点)と「ねらわれている会長権限復活」という文章が掲載されていました。

「私たちのうったえ」には、「準備会」の目 的が次のように書かれてあります.『...これ まで、日本地質学会は、「会員のための民主 主義を重視する姿勢を守ってきた」と、私た ちは考えています、ところが、ここ数年の間 に,会則が守られなかったり,会員の立場を 尊重しない学会の運営が、しばしば、起こっ ています. 学会は, 会員のために, そして, 会員の意見と力を重視して運営されるべきで はないでしょうか、『5000人のニュース』は, 5000人を越す会員の多くの方々に「学会で 起こったこと、あるいは、起こっている様々 なできごと」をお知らせするとともに、「学 会の民主主義を守り、学会の民主主義を進め る力」になっていただきたいと思い、地質学 会の現状を憂える有志が集まり、作成いたし ました、どうぞ、私たちの訴えをお読みいた だき、ご意見やご協力など頂きたいと思いま す.』.2ページ以降には,執行委員会や評議 員会の運営が民主主義的でないこと、会則に 違反していることが多いことなどが書かれて あります。

私は、この冊子にひととおり目をとおし終えたときに、執行委員会や評議員会は、多くの会員の意志から離れ、独善的で、何かとんでもないことを意図しているのではないか、とういう錯覚におちいりかけました。というのは、冊子全体が執行委員会や評議員会の運

営に対するあまりにも一方的な見解で占められていたからです.しかしその直後に,私の気持は,このような「準備会」は地質学会会員のあいだに存在すべきでなく,また,存在してはならないというということを多くの会員に訴えるべきだ,という強い決意めいたものに変化しました.その理由を述べるには,執行委員会や評議員会に対する私の評価や,地質学会のあり方についての私の考えを述べておく必要があります.

現在,地球環境の維持,自然災害の防止と軽減,エネルギー問題などの,日本だけでなく世界中が直面している大きな課題で,地質学の役割が問われています。それにもかかわらず,わが国においては地質学が軽視される傾向にあり,教育,研究,企業のあらゆる分野において地質学と関連分野の地位は低下しつつあります。このような状況のなかで,最近の地質学会はどのように対処してきたでしょうか。

私は、地質学会は現状に対して大きな危機 感をいだき、学会の活性化をはかるべく、活 動の多様化と学会の改革のために,努力を積 み重ねてきていると思います、評議員会や執 行委員会は, その先導的役割を果たしている と思っています. 私がすぐ思い起こすことの できるものに,地質学雑誌の100巻(1994年) からの質・量の両面における充実と、編集委 員会の拡充・充実,地質学雑誌のニュースの 充実(1998年からは独立した冊子として発 刊),地質学会が中心となって発刊した Island Arc の充実と発展,多様な課題の研究 委員会の組織と活動の展開,各分野の発展を 図るために設けられた専門部会の活動,地質 学会学術講演会の改革と発展などがありま す. とりわけ,研究委員会の一つとしての第 一次地質基準策定委員会および地質学普及教 育実行委員会の活発な活動などめざましいも のがあります.また,法人化に向けて広く会 員から意見を聞いたり、理解を得るための努 力,多くの会員が運営に参画することを図る ための執行体制の改革などを続けていると思 います。

これらの改革は,3名の事務員の協力にささえられた執行委員会や評議員会の努力の積み重ねと,会員の理解によってなしとげられてきたものと思います.このような執行委員会や評議員会の努力の結果が,多くの会員のあいだに率直に受け入れられていることは,

昨年10月に九州大学で開催された,地質学会第104年学術大会に1200名を越える会員が参加していることや,地質学雑誌への投稿が大変多くなっていることなどにあらわれていると思います.地質学会の1会員としての私は,このような改革にほとんど貢献していないので,大変に肩身の狭い思いですが,改革の内容をさらによいものにできるとすれば,それは,私も含めて,多くの会員が地質学会の活動の多様化と学会の改革について関心をもち,行動し,発言することではないでしょうか.

地質学会は,様々な職種や階層の,5000 名に達する会員から成り立っています。会員 が地質学会のなかで発言をする機会はいくつ もあると思います。会員による選挙で選ばれ た評議員をとおしてするのも一つの方法と思いますし,総会において発言するのもまた, 一つの方法であると思います。問題によって は夜間小集会で集中的に議論することも,こ れまでに行われてきました・評議員会や執行 委員会の立場は,会員の多様な意見をくみあ げ,学会の活性化と発展という一致点で努力 することにあると思います。これが地質学会 に確立している運営面におけるル・ルである し,また,方法でもあると思います。

「準備会」は,執行委員会や評議員会の運 営を一方的に批判した文章を掲載した冊子 を、これに賛同しそうな会員に配布し、同じ 考えの仲間,つまりある特定の考えをもった 会員の集団をつくろうとしているかのように みうけられます. しかし, 地質学会の構成員 の多様性や,地質学会にはその目的を達成す るためのきちんとしたルールが確立している ことからして、このような会をつくることは まちがっていると私は思います、地質学会で の発言(冊子で述べていることも含めて)は, 特定の集団をつくりながら行うのではなく、 多くの会員と同じ立場 (会員は一人一人異な るということ)に立って行うのが原則ではな いでしょうか.「準備会」のような会の結成 が横行すれば、これに反対の立場の会ができ るかもしれません、それこそ地質学会の破滅 につながりかねません、そのような事態にで もなれば,現在,地質学会がめざしている改 革は到底なしとげることはできないと思いま す. 私にはこの「準備会」なるものが正気の 沙汰とは思われません、冷静な行動を望むも のです.

### 学会記事

## 1997年度第3回定例評議員会議事抄録

日 時: 1997年12月20日(土) 12:30~ 18:00

場 所:北とびあ 802会議室

出席者:秋山雅彦会長,小松正幸・坂 幸恭 副会長,斎藤常正評議員会議長 足立久男,赤羽久忠,赤羽貞幸,秋 葉文雄,天野一男,板谷徹丸,飯川 健勝,上砂正一,氏家良博,大木靖 衛,川辺孝幸,君波和雄,木村 学, 熊井久雄(代 上砂),公文富士夫 (代 君波),小井土由光,小泉 格, 小林和宏, 小玉喜三郎, 斎藤常正, 斎藤靖二,坂本隆彦(代 堀川), 酒井治孝(代 斎藤(靖)), 柴崎直 明, 嶋本利彦, 田崎和江, 田結庄良 昭,平朝彦,高橋正樹,高須晃, 高安克己, 滝田良基, 角田史雄, 徳 橋秀一,那須孝悌,中田節也,新妻 信明, 楡井 久, 野村 哲, 濱本拓 志,久富邦彦,平社定夫,堀川秀夫,

丸山茂徳,八尾昭(代 矢野),

矢野孝雄, 芳野 極(代 濱本)各

評議員). 石田吉明,保科 裕,小

泉 潔,島村雅英(傍聴)水野篤行

(事務局)

冒頭に秋山雅彦会長より開会の挨拶があった後,斎藤常正評議員会議長から傍聴者4会員の紹介,「10月の臨時評議員会で地質学会の執行体制整備に関する審議が行われなかったことに対して52名の会員(連名を含む)から評議員会議長および執行体制整備委員長宛に要望書が送付されたこと」の紹介があった。さらに,本評議員会の議題として,執行体制整備の問題が議題の6として挙げられているが,これを議題の冒頭に移すよう議題の順序を一部変更したいとの発言があり,了承された、次いで,本年度臨時評議員会(10月)議事抄録を原案を一部修正して承認したとの報告があった。

角田史雄評議員から,臨時評議員会の後, 評議員会議長名で「執行体制整備に関するア ンケート」が各評議員に対して送付された手 続きについて発言があった.

#### 報告事項

- 1. 執行委員会報告
- (1) 第一庶務委員会

天野一男第一庶務委員長より配布資料に基づき,次の報告があった.

- 1) 次の転載許可を行った.
  - (1) (財)千葉県史料研究財団に対して, 地質学雑誌102巻3号, p.266, 第4図

- ほか,計7件の図を「千葉県の自然誌 (全2巻)」へ転載(7月7日付け).
- (2) 同上に対して,地質学雑誌98巻, p.245,第13図を同上誌へ転載(7月8 日付け)。
- (3) 同上に対して,地質学論集35号, p.41,図9を同上誌へ転載(7月14日 付け).
- (4) (財)地震予知総合研究振興会地震調査研究センターに対して,地質学論集35号の口絵写真を「日本の地震活動の地域特徴」(地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会報告書)へ転載(7月1日付け).
- (5) 1997年秋田県鹿角市澄川温泉裏山地すべり災害,秋田大学調査・研究班丸山孝彦代表に対して,日本地質学会第101年学術大会「見学案内書」(1994),p.215,図27(雨宮ほか)を,「1997(平成9)年秋田県鹿角市澄川温泉裏地すべり災害の調査研究(秋田大学発行,非売品)へ転載(9月1日付け).
- (6) (財) 地震予知総合研究振興会地震調査研究センターに対して,地質学論集35号の口絵を「日本の地震活動(増し刷り) へ転載(10月2日付け).
- (7) (株) 大林組東京本社に対して,地質 学論集7号, p.106~108,第6~9図 を「季刊大林」12号,「海浜」へ転載 (10月21日).
- (8) (社)地盤工学会に対して,地質学論 集7号,p.257,第10図,p.261,第19 図を「ジオテクノート,7,東京の地 盤」(同工学会刊)へ転載(10月27日 付け).
- (9) 庄司 浩氏に対して,故羽田野誠一氏(元会員)の著作,日本地質学会第 81年学術大会講演要旨ほか,2篇を 「羽田野誠一論集」へ転載(11月27日 付け).
- 2) 次の共催あるいは協賛等を承諾した.
  - (1) 日本応用地質学会,講習会「地質・ 地盤と地質災害」(11月27日)の協賛 (8月25日付け).
  - (2) 第1回国際土壌・地下水環境ワークショップ, IWGER'98 (98年1月20~21日)の後援(10月21日付け).
  - (3) 第35回理工学における同位元素研究発表会(98年6月29日~7月1日) の共催(11月4日付け).
- 3) 次の研究助成等の推薦依頼・募集があった.( ) は締切日
  - (1) 平成9年度(第19回)沖縄研究奨励 賞候補者(9月30日).
  - (2) 朝日賞(9月2日).

- (3) 平成9年度東レ科学技術賞,東レ科学技術研究助成候補者(10月9日).
- (4) (財)日本科学協会平成10年度笹川 科学研究助成候補者(10月末).
- (5) 1998年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」受賞候補者,研究助成候補者(11月30日).
- (6) (財)昭和聖徳記念財団の学術研究助成(12月17日).
- (7) (財)環境調査センター・日刊工業新 聞社主催,平成10年度「環境賞」(98 年1月10日).
- (8) スミソニアン・フェローシップ (1998年度) の公募 (98年1月15日).
- (9) 第11回アサヒ・フェローシップ (1998年度)の公募(98年2月28日).
- 4) 日本地理学会より6月14日付けで,「地理学連合(仮称)準備会」設立にあたって参加の呼びかけが寄せられた.第1回準備会が福岡大会と重なるため欠席とするが,同準備会に関する諸資料は送付してもらい,今後の検討の材料としたい旨の返書を送った.
- 5) 地球環境科学関連学会協議会将来構想 検討委員会より6月30日付けで,同協議 会が正式に発足するにあたり,参加登録 の呼びかけと担当委員の登録の依頼があった.従来新妻行事委員長が将来構想検 討委員会に参加してきたので,とりあえ ず同委員長を登録し,しばらく推移を見 ていくこととした.
- 6) 日本学術会議より7月18日付けで, 「第17期日本学術会議会員として推薦すべき者が決定された」との通知があった. 地質科学関係は次の通りである.地質学研連:斎藤常正 鉱物学研連:青木謙一郎地質科学総合研連:鎮西清高
- 7) 平成9年度日産学術研究助成に対して 次の3件を8月27日付けで推薦した.熊 代(岡崎)浩子:陸域・沿岸域堆積物を もちいた環境変動の高精度面的解析(一般);横川美和:北大西洋西縁における 深海堆積物の堆積過程の高解像度復元 (奨励);長谷川 卓:地球表層のマス・ パランスの長期的変動に関する研究(奨 励).
- 8) 高須 晃会員より11月11日付けで,「岡山県大佐町の蛇紋岩(大佐山岩体)中のプロックとして含まれるひすい輝石岩とコスモクロアの学術的に貴重な2露頭の保全について大佐町宛に地質学会から要望書を提出して欲しい」との申し入れがあり,審議の上要望書提出を了承した.
- 9) リーフレット「大地の痛みを感じよう」 の韓国語版発行の要望について環境地質

研究委員会より11月10日付けで申し入れがあり、作業と印刷費は同研究委員会の負担とし、日本地質学会発行とする条件で承認した、印刷部数2,000~3,000,98年3月~4月発行の計画、

- 10) 福岡大会の際に10月10日12:45~ 14:10にアクロス福岡において,関東支部・関西支部・西日本支部からの参加を得て支部懇談会を開催した(東北・北海道支部は文書参加).支部再編成,支部補助金,支部会員への連絡に対する地質学雑誌ニュース欄の活用,今後の支部活動の意義と内容,地方の地学会と支部との連携などについて意見交換が行われた。
- 11)「国際科学掘削計画への我が国の参加 について」の要望書を9月2日に科学技 術庁研究開発局長宛,工業技術院長宛に 提出,また10月17日に文部省学術国際 局長宛に提出した.
- 12) 第35回理工学における同位元素研究 発表会の共催にあたり,運営委員派遣の 依頼があり,上岡 晃会員に委員を依頼 した。
- 13) 海上保安庁主催の第24回海洋地名打合せ会(11月25日)への出席依頼があり,水野篤行事務局長に出席を依頼した。
- (2) 第二庶務委員会

丸山茂徳第二庶務委員長より配布資料に基 づき,次の報告があった.

1) 地質学論集の売上状況 (1997年11月 末現在)

	No.31 (1988)			No.34 (1990)		No.36 (1990)
1500	1000	1100	1000	1000	1500	1000
1364	778	931	763	815	973	891
No.37 (1992)	No.38 (1992)	No.39 (1992)	No.40 (1993)		No.42 (1993)	No.43 (1994)
1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
769	774	642	628	709	718	742
No.44 (1995)	No.45 (1995)	No.46 (1996)		No.48 (1997)		
1000	1500	1000	1000	1000		
458	1154	499	256	442		

- 1 号数の下の()中は発行年度
- 2 第1段は発行部数
- 3 第2段は総売上部数
  - 2) 地質学論集の刊行と編集について
    - (1) 第48号 岡田博有ほか編:「Cretaceous Environmental Change in East and South Asia (IGCP350)—Contribution from Japan」. 6月末に刊行された.
    - (2) 下記論集の最終刊行計画が提出された.

新妻信明ほか編: 21世紀を担う地質 学(97年度第2回定例評議員会企画 承認)

狩野謙一ほか編: 21世紀の構造地質 学に向けて(96年度第3回定例評議 員会で企画承認)

岡田博有ほか編: 地震と地盤災害 兵 庫県南部地震の教訓(同上 企画承 図)

#### (3) 会計委員会

滝田良基会計委員長より配布資料に基づき,次の報告があった。

1) 1997年度6月~11月決算報告と1997 年度収支決算の見込みについて

次回評議員会で1997年度収支決算に関する最終報告を行う.予算案作成に関連して、財政状況は極めて悪化しており、財政問題について会計委員会のみでは対応できないので、評議員会のもとに「財政問題検討委員会」を設置して、早急に対策をたてることを提案する(議題参照).

- 2) 文部省より7月24日付けで,平成9年 度科研費補助金(研究成果公開促進費) (学術定期刊行物)の交付決定通知(292 万円)があった。
- 3) 平成10年度同上補助金の申請を12月 1日付けで提出した(要求額: 5,154千円).
- 4) 平成10年度同上「公開発表(B)」の申 請を12月5日付けで下記の内容で提出した。

主催:日本地質学会 開催責任者:秋山雅彦 学術講演会「地球の不思議にせまる」9月26日(土),松本市 (1)信州の活断層と地震(信州大:塚原弘昭) (2)隕石から見た生命の起源(筑波大:下山晃).

- 5) 1998年度の広告掲載について編集委員会との協議結果に基づき、広業社と折衝し、下記の条件で同社に依頼することとした。広告は原則として「ニュース誌」に移す、地質学雑誌については表3のみを広告に充てる。
  - ・地質学雑誌:表3 年間を通じてモノカラー広告掲載
  - ・日本地質学会ニュース:表2,表3, 本文後付け年間を通じてモノカラー広 告掲載:表4 偶数月のみモノカラー 広告掲載:
- 6) 早坂康隆会員より,白鳳丸研究航海の ため「国際交流助成費」の申請(15万円)があり,支出を承認した.
- 7) 会計面から見た地質学会の現状と課題 について検討し、結果を「日本地質学会 の財政状況に関心を」の記事としてまと め、地質学雑誌103巻8号に掲載した。
- 8) パソコン会計処理についてさらに検討を進めパソコン会計ソフトの勘定科目, 今後の決算書・予算書の項目等の整理を 行った。
- 9) 1998年度予算案について 1997年度の収支実績と決算見込みに 基づき,予算案を作成した.(議題へ)
- (5) **会員委員会** 中田節也会員委員長より配布資料に基づ

き,次の報告があった.

#### 1) 会員の動静(11月末現在)

	贊助	名誉	正会員	院生	学生	合計
1997. 5.31	55	36	4664	484	42	5281
1997.11.30	56	35	4678	589	59	5417
増・減	+1	- 1	+14	+105	+17	+136

2) 次の入会承認を行った(敬称略). 計137名

贊助会員(1):大成基礎設計株式会社 (7.22)

正 会 員(38):細谷健介,原田一雄, 藤本光一郎,石井陽子,菊池輝行,大河原 正文,伊藤克己,中嶋貴紀,石坂岳士(以 上7.22). 小林雅弘,飯島康夫,山津宙行, 增田幸治,阿部康則(以上9.8).萬福真美, 中村美香,渡邊了孔,近藤達敏,岩岡 洋, 山口博光,河野隆重,竹野恵美,林 裕幸, 土志田 潔,三宅 誠,森本嘉幸(以上 10.22). 寺尾大介,秦 好利(以上11.12). 柳 信一郎,伊藤宣幸,矢野晴彦,近藤征 二, 岡井大八, 吉原和彦(以上12.10). 院生会員(83): 宇佐見和子, 石村豊穂, 中西のぶ江,小亀 出,後藤真一,坂倉範 彦,前原恒佑,高柳幸央,山口 勝,伊藤 純一,姉川学利,高橋亮雄,藤沢康宏,溜 池俊彦, 西谷正史, 松村吉教, 内野隆之, 中野鉄也,坂井三郎,河潟俊吾,森田宣史, Kyi khin, 柴田俊彦, 福島大輔, 多里英, 山田茂昭,熊井教寿,平塚美友紀,伊藤秀 樹, Javad Izadyar, 本田親寿, 松山尚典, 足立佳子,小林靖広,中山智香子,梅澤貴 司,高橋英子, Venkatesh Raghavan,阿 部龍巳,池田百代,簗瀬洋一郎,伊藤光, 安井光大,阿部志保,青矢睦月,杵島正洋, 湯浅 忠,山崎 雅史,上田仁志,大西智 恵美セリア,田中保孝,杉本 学,廣瀬浩 司,藤井宏明,清水、徹,川井稔子,小島 央彦,高橋智宏,田中尚,青木歩,松 本和也, 俵 健二, 四ヶ浦 弘, 篠塚未暁, 斎藤大地,山崎 誠,喜多佐由里, Ze-Jun Zhang (以上7.22), 重信有里,熊 安 隆,津島淳生,石川千穂,小松原純子, 池見洋明,樋口 靖, Lu Zhiqiang, 今内 摂雄, Kadarusman Ade (以上9.8). 有坂 春彦,堂山大助,中川希人,片山健市,石 **阿 純,山本由弦(以上10.22).一関 敏,** 前島丈明,伊藤寬之(以上12.10).

学生会員(15): 高島 静,鈴木久美子,納谷友規,小先省三,松岡広也,三浦 亮(以上7.22). 蘭部美穂子,嶋田一勝,遠藤美知(以上9.8). 安東 努,富田直人,吉原 靖(以上10.22). 飯盛弘基(以上11.12). 近藤孝司(以上12.10).

3) 逝去者(敬称略) 計9名

名誉会員(1): 立見辰雄(97.10.17)

正会員(8):鈴木陽雄(97.7.23),佐藤良昭(97.8.24),今井弘樹(1996年?),中川衷三(97.9.17),甲藤次郎(97.9.19),津田秀郎(97.10.25),中村萬次郎(97.3.21),小関攻(97.11.13).

4) 次の退会承認を行った(敬称略). 計42名 正会員(40):林 道子,松本 正文,伊藤正樹,坂本祥広,和久紀生, 坂井利啓,井口源一,今吉秋則,竹内真 司(以上7.22).木原宏一(以上10.22). 加藤 勲,藤井宏惇,佐島誠一,高山夏 子,大賀英生,木村慎治,佐々木 学, 生出慶司,山崎理子,須崎俊秋,伊藤 清,牧島邦夫,大橋恒夫,飯笹幸吉,細 田 襄,荒井 靖,森 一郎,道家太郎, 沢村孝之助,菊谷真子,佐藤昭一,寺島 美南子,鞠子 正,富岡 聡,田中宏之, 吉田武雄,宮田金秋,菊川 猛(以上 12.10).院生会員(1):岩本正人(以 上11.12)

学生会員(1): 村井禎宏(以上7.22)

- 5) 1994~1997年度の4年度にわたる会 費未納会員が79名であり、会則第6条に より除籍候補者となる.(氏名について は議題の項を参照)(議題へ)
- 6) 次回 (1998年)発行の会員名簿の記 載事項について

標記について執行委員会での議論も踏まえて検討を続けている・将来的には出身大学や卒業年は掲載しない方向が健全と考えるが,次回は希望者に限り掲載しない処置としたい・判についてはA5が持ち運びに便利との意見が出されている・氏名のアルファベット表記については,来年度施行は無理と考えられるが,葉書調査でデータを集めるなどして,できる限り入力作業を進めるようにする・これについては,集まった分のみを掲載してもよいのではないかとの意見が執行委員会で出されている・

名簿掲載事項:1 氏名(あいうえお順),2 出身大学と卒業年,3 所属,4 所属の住所・電話番号・ファクス番号,5 自宅の住所・電話番号・ファクス番号,6 研究分野番号,7 名誉会員の同上資料,8 贊助会員の同上資料,9 その他(入会案内書,会則,投稿規定,関係諸機関名と連絡先)(以上のうち,2,4,5については原則的には掲載するが本人の希望があれば非掲載とする。自宅住所非掲載の場合には勤務先を掲載する)電子メールアドレスは巻末に一覧として載せる方がよいかもしれない。学会賞受賞者,歴代会長,副会長名の一覧は掲載しない。

#### 7) 名誉会員の推薦について

今年度名誉会員候補者について,計 21名,うち内規による候補者18名,支 部長推薦による候補者3名を決定し,第 3回定例評議員会に諮ることとした. (議題へ)

なお,今後に向けて次の2点について 検討した.今後の問題については財政問題とあわせて検討する必要がある.

(1) 会員以外の名誉会員について:非会員の候補については本学会との関わり

が明瞭な者(学会に具体的にどのように 貢献したか)に限るなど、今後学会に直 接関係のないものがむやみに多く推薦さ れる事態は防ぐべきである、また、推薦 洩れについては、次回から執行委員会が 推薦するべきである。

(2) 名誉会員の将来的な数について:会員データと評議員データを調べると,内規による候補者が今後平成10年以降,4名,8名,3名,4名の増加となる.その他の推薦を含め,平均寿命80才と仮定すると,10年後の名誉会員数は109.5名と予想される(5,300名の会員に対して約21%)

#### (6) 編集委員会

徳橋秀一編集委員長より配布資料に基づき,次の報告があった。

1) 地質学雑誌の編集状況 (12月10日現在)

103-12 論説 3 短報 3 (校正中) 104-1 論説 4 短報 4 (入稿済み) 手持ち論文 論説 8 短報 4 香藤中論文 55

投稿数 (1997年) 論説 (和文 59,英文 13) 総説 (和文 2,英文 1) 短報 (和文 22,英文 6) 討論 (和文 1) ノート (和文 1) 合計 106 (昨年比 - 11) 口絵 20 査読中論文 46

#### 2) 地質学雑誌編集委員会報告

- ・10月臨時評議員会で承認された投稿 規定の一部変更が1月より正式に発効 する.その主な内容については,これ まで地質学雑誌の10,11,12月号の 「編集委員会より」でいずれも箇条書 きにして紹介するなど,周知・広報に 努めてきた.
- ・1月号に、修正された投稿規定、投稿整理カードが掲載されるのに併せて、編集委員会で夏前に議論してきた「投稿の手引き(投稿へのワンポイント・アドバイス・シリーズ)」の修正・改訂版も投稿者の便宜を考え、本誌の巻末に一括して掲載する。ただし、引用文献の略記法については今回は除く

高橋正樹副編集委員長より配布資料に基づき,次の報告があった.

1)「地質学雑誌」と「日本地質学会ニュース」との分離・発行について

臨時評議員会(10月)における決定の後,11月10日に「ニュース情報誌編集体制等検討ワーキンググループ」の会合を開催し,分離後のニュース誌の編集に関する意見交換を行った(内容については次項参照)。また,「ニュース誌」を「日本地質学会ニュース」とすること、表紙上での表記を「日本地質学会News」とすることとした。規模については,これまでの実績ページ数に印刷経費の点も考慮し,分離後の「地質学雑誌」を基本的には1号につき平均76ページ立て,「日本地質学会ニュース」を24/32ペー

ジ立てとすることにした.広告については,「地質学雑誌」では表3のみを充て,「ニュース誌」では表2,表3,表4(偶数月のみ),本文後付けを充てる.

2)「日本地質学会ニュース」の内容について(「ニュース情報誌編集体制等ワーキンググループ報告」)

11月10日にワーキンググループ会合を行い,ニュース誌の充実の具体的内容と編集体制について活発な意見交換を行った.編集体制の方向については,次のような結論となった.

- 1) 現在の編集委員会とは独立したニュース情報誌編集委員会を設置し,執行委員会あるいは執行委員長のもとにおく.ただし,なるべく早い機会に正式の広報委員会のようなものを設置し,その下に編集委員会をおくのが望まし
- 2) 編集委員長は執行委員あるいは評議 員でなくともなれるようにする.
- 3) 各階層担当の編集委員をおき,ニュース情報の収集・集約に努める.

ニュース誌発行・編集に関して現在の 運営細則との関連について質問があり, それに対して高橋副編集委員長より,現 在進行中の執行体制整備委員会の検討・ 答申内容との関連があり,その状況によ り全般的に実施か,あるいは部分的に実 施ということとなる,との説明があった.

#### (7) 行事委員会

新妻信明行事委員長より配布資料に基づき,次の報告があった。

- 1) 第104年年会(1997年,福岡大会; 10.10~12) について:参加者合計1,200 名余り.一般講演513件,ポスター発表 116件,シンポジウム9件(講演93件) で,円滑に進行,終了した.とくに福岡 市とアジアとの関係の点で、国際シンポ ジウムの開催(東シナ海の起源と発達), 朝鮮半島での地質見学旅行の実施、創立 50 周年の韓国地質学会会長の招聘を行 い,日韓両国の交流促進を図ることを目 指した、また、地域社会への研究成果の 還元,普及の観点から市民講演会(九州 からのぞいた地球の謎)を開催(西日本 支部主催,平成9年度文部省科研費,研 究成果公開発表(B)の助成による), さ らに工業技術院地質調査所・福岡市立少 年科学文化会館・日本地質学会の共催 で、展示と実習(知っていますかあなた の大地 地質学が探る九州島)を実施し
- 2) 第105年総会・シンポジウム(1998年) について:学習院において1998年3月 28日(土)・29日(日)に開催する.開 催予告を地質学雑誌103巻11号に掲載した.1月に行事委員会を行い,プログラム等を決定する.
- 3) 第105年会(1998年)について:松本

(9月25日~27日予定)において開催 (準備委員長:秋山雅彦). 一般発表のセ ッション名・コンピーナーの公募を1月 号に掲載する.3月29日に新旧合同の行 事委員会を開催、プログラム等の大枠、 準備スケジュール等を決める予定.9月 26日(土)に松本市中央公民館におい て、一般市民対象の学術講演会「地球の 不思議にせまる」を次の2テーマで開催 する . (1) 信州の活断層と地震(信州 大:塚原弘昭) (2)隕石から見た生命 起源(筑波大:下山 晃) 12月5日付 けで文部省に対して,平成10年度科研 費補助金「研究成果公開発表(B)」の計 画調書を提出した (要求額:1,100千 円).

#### (8) 国際交流委員会

嶋本利彦国際交流委員長より配布資料に基づき,次の報告があった。

第104年年会(福岡大会)にあたり,韓国 地質学会長を招聘したほか,韓国巡検,シン ポジウム等の国際交流を行った(行事委員会 報告参昭)

#### 2. 研究委員会報告

#### (1) 地学教育研究委員会

堀川秀夫委員より配布資料に基づき,本年 6月20日に行われた委員会の内容について要 旨次の報告があった。

- 1) 3学会合同セミナー(東京湾の環境 過去・現在・未来)の開催(6月22日, 日).
- 2) 学校科目「地学」関連学会連絡協議会では,現在お互いに交流して知り合っている段階.この次の教育課程改正に焦点を絞って対応を考えている.
- 3) 中教審続報 21世紀を展望したわが 国の教育改革の在り方について 中央教 育審議会審議のまとめ(その2)を中心 として,地学に関する教育の現状につい て自由討論した.
- 4) 災害時派遣について秋田県地すべり災害を中心として,他学会を含め学会の対応について討議した
- 5) 長野小谷村災害調査の経験を中心として,災害時派遣について地質学会としての今後の対応策について討論.学会事務局(またはセンター)が中心となって,情報集め,調査概要の連絡,諸問い合わせをするようにしてはどうか.

#### (2) 南極地質研究委員会

本吉洋一委員より下記の報告が提出され、資料として配布された。

- 1. 福岡大会で夜間小集会を下記の内容により10月11日に開催した.
  - 右塚英男氏(本年3月帰国)より第 38次隊調査報告(エンダービーランド,リーセルラルセン山の地質).
  - 2) 第39次隊 (97年11月出発)の小山 内康人氏より調査計画の説明.
  - 3) 将来計画について石塚英男氏より, 今後の南極観測の予定, 第40次隊の

隊員募集と協力の依頼,10月13~14 日の国際シンポジウム,10月15~16 日の南極地学シンポジウム等の案内.

- 2.第39次観測隊(小山内康人・豊島剛志・大和田正明・角替敏昭・外田智千)は11月14日に出発,現在調査予定地のエンダービーランドに向かっている.トナー島に約2ヶ月滞在し,オーストラリアからの交換科学者Warwick Crowe氏とともに詳細な地質調査を行う予定である。
- 3.12月12日極地研で,第23回南極地質 研究委員会を開催する.

#### (3) 環境地質研究委員会

**楡井 久委員から配布資料に基づき,次の報告があった**.

- 1.シンポジウムの開催
  - 1997.9.16 「地質汚染 最終処分場の閉 鎖条件について 」北とびあ 関東支 部と共催

**講演件数** 5 **参加者 約**120**名**.

1997.12.1 ~ 12.2 「第7回環境地質学シンポジウム」 北とびあ 日本情報地質学会・日本鉱物学会と共催.講演件数 76 参加者 約160名.

#### 2. 普及計画

- ・リーフレット「台地のいたみを感じよ う」の韓国語版を作成中.
- ・地質環境に関する総合的なリーフレットの草稿を作成中.
- 上総堀り自噴井の記念碑建立実行委員会の設立に参加し,具体案を企画立案中。
- 3.来年の4~5月に地質環境診断士(仮称) の講座を開議予定.

## (4) 女性地球科学者の未来を考える研究委員

田崎和江委員より配布資料に基づき,次の 報告があった.

- 福岡大会において夜間小集会を行った。
   1998年にパイオマット巡検(東北)を 計画している。
- 2) 1998年度地球惑星科学関連学会の折に保育所を設置して欲しいとの要望が出されている.現在,他の学会の会員も含めて,場所・金額・条件・希望人数などの情報交換を行っている.学会からの補助を得たいとの希望も出されている.
  - 2)に対する地質学会の支援体制について、新妻行事委員長との間で質疑応答があり、本委員会として合同大会に対して提案することが了承され、そのために1月23日までに行事委員会宛提案書を送付してもらうこととなった。また、1998年秋の信州大会に対しても要望を提出してもらえば行事委員会として検討することとにた

#### (5) 第一次地質基準策定委員会

新妻信明委員長より配布資料「第一次地質 基準案(中間報告)」に基づいて次の報告が あった.

本年度5月に第1回委員会を開催して以来, ほぼ毎月1回の委員会を開いて「第一次地質 基準,の策定について検討を進めてきた そ の結果、別紙の「第一次地質基準案」をまと めたので,中間報告として提出する.来年1 年間でさらに検討して最終報告をまとめるの で専門部会その他から意見を出して欲しいと の要望があった. 本基準案 (中間報告書)は 概要説明1枚と,各地質体区分と地質特性に ついて策定されている地質基準の概要説明1 枚と調査法一覧表1枚ずつ、計19枚からなっ ている。地質体区分・地質特性、それぞれの 担当委員は次の通り.1)正常堆積物(皆 川・早川),2)沖積層(物倉),3)付加体堆 積物(酒井),4)火山および火山岩(山元・ 井出),5)深成岩(滝田),6)变成岩(服部), 7) 断裂(宇田),8) 重力崩壊および崩壊堆 積物,9)地質汚染(上砂).詳細については 別途地質学会ニュ・ス上で紹介する.

#### (6) ヒマラヤ地質研究委員会

在田一則委員より配布資料として,来年春までの活動計画について下記の報告が提出された

- 1.現在ヒマララヤ/チベット地域をフィールドにしている人たちとこの地域の地球科学に関心を持っている人たちに情報交換として,在田からNamaste Newsをe-mailで流しているが,今後mailing listをつくり,双方向の情報交換をより充実させる。
- 2. 来春の地質学会総会の折にヒマラヤ地 質研究会およびヒマラヤ地質研究セミナ ーを開催する.
- 3.来年4月にペシャワール(パキスタン) で開催される第13回 Himalaya-Karakorum-Tibet Inter-national Workshopの宣伝および参加を関係者に働き かける。

#### (7) テクトニクス研究委員会

木村 学委員よりとくに報告事項はないと述べられた.

(8) 地質学と地震研究委員会

嶋本利彦委員よりとくに報告事項はないと 述べられた

### (9) 地層名命名規約策定委員会

天野一男委員長より,国際対応,ならびに それを考慮した委員構成を考え,委員の依頼 交渉中であること,来年1月より具体的な活動に入る予定との報告があった.

#### (10) 研究企画委員会

木村 学委員長より福岡大会時に開催された委員会の内容に関して地質学雑誌に近く掲載されるとの報告があった.

#### (11) 事業計画委員会

坂 幸恭委員長より配布資料に基づいて, 本年4月以降現在までの委員会の活動経過・ 内容に関する報告(諸学会に対するアンケートの発送,回答の整理,法人に関する「Q& A」の地質学雑誌上への掲載等)があった. 報告の詳細は地質学雑誌103巻12号に掲載し てある.

#### (12) 執行体制整備委員会

小松正幸委員長より検討結果として「地質学会の執行体制整備に関する中間報告」報告が配布資料として提出され、併せて10月の臨時評議員会の後で斎藤常正評議員会議長名で評議員に対して送られた「執行体制整備に関するアンケート」の回答の予備的整理結果が資料として配布された、報告は議題において併せて行うとの発言があった。(議題へ)

#### 3. 日本学術会議報告

斎藤常正学術会議会員より配布資料に基づいて、次の報告があった。

- 1.第127回総会が10月21日~24日に開催された.第17期活動計画案を審議して活動計画書を作成した.第17期の重点活動課題は「教育・環境問題」であると位置付け,その審議のための特別委員会を設置した.この活動計画書の全文は,月刊誌「学術の動向」,第2巻,第12号(1997年12月1日発行)に掲載されている。
- 2.第4部(理学)会が10月22日に開催された.研連の見直しの議論の場として,第4部長から「理学総合連絡会議」を設立してはどうかという提案があった.会議は,第4部関係研連および専門委員会の委員長と第4部長,副部長,幹事関係がされる.会の目的は,第4部会,に関係する理学関係諸学会とのボトムアップの連絡チャネルの構築で,研連の見をはかって,「勧告」,「要望」など,外部に対する意見発信機能の活用をはかる場とする.この件については,今後第4部会で継続的に議論することとなった.

### 4. 各研究連絡委員会報告

#### (1) 地質学研連

斎藤常正研連委員長より配布資料に基づき,12月1日に開催された第17期第1回会議に関する次の報告があった。

- 1. 研連委員長と幹事2名の互選を行った. 委員長 斎藤常正. 幹事 天野一男・木 村 堂
- 2. 日本情報学会から9月24日付けで申し 込みのあったシンポジウム「地球情報の 特性と処理」(10月30日開催)の地質研 連との共催を事後承認した.
- 3.第16期研連からの申し送り事項を審議した、とくに地質研連は、IUGS(国際地質科学連合)の国内対応機関として活動してきており、今期も"Japanese National Committee of Geology"としの活動の継続を確認した、今期最後の2000年には、第31回万国地質学会がブラジルのリオデジャネイロで、8月6~17日に開催されることが予定されている。
- 4.第16期研連付置の小委員会として活動 してきた「地質年代小委員会」(兼岡一郎委員長)から,第17期における存続

希望が提出されており、継続を承認した.なお,「堆積学小委員会」については連絡はないが,世話人が連絡をとり,希望があれば継続を承認することとした.

- 5. 研連見直しの場として第4部長から提案のあった「理学総合連絡会議」(学術会議報告参照)の設立の提案について文書が回覧され内容の説明があった.この件については、今後の第4部の審議を見守ることにした。
- 6.第17期地質研連の活動の一つとして, 「地質学の現状と展望」のような研究の 現状と将来への展望を評価したポジショ ン・ペーパーを作成することを議論した。
- 2) 鉱物学研連・鉱床学専門委員会合同会議 高須 晃鉱物学研連委員より配布資料に基 づいて,第17期第1回会議(1997年10月31 日,13:30~16:00)に関する次の報告があった。

議事に先立ち、研連委員長・専門委員長、幹事を次のように選出した。

鉱物学研連 委員長 末野重穂 幹事 藤野清志 (書記)・河村雄行.

鉱床学専門委員会 委員長 島崎英彦.幹事 松枝大治.

#### [報告事項]

- 惑星科学専門委員会への鉱物研連からの委員の推薦 鉱物研連から北村雅夫氏を推薦。
- 2. 第17期学術会議発足の報告
  - 1) 第126回学術会議総会 会長・副会 長.第4部長・同副部長・幹事の決 定.
  - 2) 第127回学術会議報告 斎藤常正学 術会議会員による報告参照.
  - 3) 第4部会 研連の見直しについて第 4部では1年位様子をみて取り組もう ということになった.学会員の割に研 連の数が多すぎるとやり玉に挙がって いるのが生物学,地質学,鉱物学,地 球物理学関係である.
  - 4) 第17期から専門委員会が研連なみ に格上げになった。
- 3. 前期の鉱物研連の活動の報告
- 1)研連の見直しについての検討.2) 「地球惑星物質科学の現状と展望」の冊子の作成.3)IMA日本開催に向けての取り組み.4)「地質科学関係学協会」問題の経緯と取り組み.

### {審議事項}

- 1.議事録の迅速化を計るために電子メールを活用することとした。
- 2. 平成10年度の海外での国際会議への代表派遣について、IMA(国際鉱物学連合) の総会を対象とすることにし、派遣希望 者に今後申し出てもらい、研連委員長が とりまとめることになった。
- 3. 専門委員会の昇格化,研連の見直しに ついて質疑応答があった.

#### (3) 鉱物学研連

高須 晃研連委員より配布資料に基づき, 第17期第1回委員会(1997年10月31日 15:00~17:00)に関してとくに審議事項に ついて次の報告があった.

- 1. 平成10年度代表派遣会議の推薦 IMA総会を対象とすることとしたが, 派遣者をまだ決められないので,派遣者 氏名未定として出すことになった.
- 2.IMAの各種委員会の国内委員の選定 候補者をあげ、今後委員長が選定のと りまとめを行うことになった。
- 3. 研連の見直し

過去の経緯が紹介され,若干の議論がなされた。

#### 4. 今期の課題

IMAを2006年に日本で開催しようとの取り組み状況が紹介されたが、研連としてどう取り組むかについては今後の検討課題とすることになった.

次回委員会を平成10年2月27日(金) とすることとした。

#### (4) 鉱物学研連鉱床学専門委員会

石渡 明専門委員会委員より第17期第1回 委員会(1997年10月31日15:00~17:00) に関する,概要次の報告が提出され,資料と して配布された、審議内容は次の通りであ

- 1.鉱床学専門委員会として,鉱物学研連 の対外報告「地球惑星物質科学の現状と 展望」のような対外報告をつくってはど うか,との提案があり,討論が行われ た
- 本専門委員会推薦のIMA 委員が次のように交代することとなった. Inclusion in minerals 田口幸洋氏, Ore minerals 林 謙一郎氏.
- IAGOD (International Association on the Genesis of Ore Deposits) への加盟 については現在個人が対応しているが, 国として加盟することが望ましく,検討 中との報告が島崎委員長からあった。
- (5) 地球化学・宇宙化学研連

矢内柱三研連委員より第17期第1回委員会 (1997年11月13日13:30~16:30) に関する 報告が提出され,資料として配布された.お もな内容は次の通りである. 議事に先立ち, 委員長・幹事等を次のように選出した.

委員長 野津憲治 幹事 青木謙一郎・田 中 剛・宮本正道

青木謙一郎学術会議会員から学術会議に関する報告があった後,研連見直し問題について自由な意見交換を行った.学術会議では第4部の研連を,A 主として素粒子・物質・材料,B 主として生命,C 主として宇宙・地球,D 領域横断学術の4つの大枠にまとめることが承認されているが,実質的には推薦研連をそのまま残し,非推薦研連を再編成したものとされる.本研連は元素の循環や化学プロセスが中心になると思われるが,第4部は国際対応を重視していることから,IAGC

での対応は,本研連の持つポイントの一つであろう.これに関連して関係分野で国際会議を開くことが望まれる,などの発言があった.

本委員会の今期の活動方針については次回 から検討を始めることとなった.

次回(第17期第2回)は1998年2月20日 (金)に開催することとなった。

#### (6) 海洋科学研連

平 朝彦研連委員よりまだ委員会が開催されていないとの報告があった.

#### (7) 国際学術協力事業研連

土 隆一IGCP専門委員会委員長より第17 期第1回委員会(1997年11月20日)に関す る次の報告提出され,資料として配布され た.

- 1) 第17期は第16期に引き続き、IGCP、 DELP、STEP、WCRPの4専門委員会で構 成されることになり、委員長にWCRP の住 正明委員を選出した。
- 2) 今期は第16期にまとめた研連報告 「国際学術協力事業推進の実態と問題点 について」に基づき、それをさらに発展 させた活動をすることとした。
- 3) STEPを廃止し、STPP(太陽地球系物 理学プロジェクト)専門委とすること、 およびDELPをILP(国際リソスフェア 計画)に名称変更したいとの提案がなされ、審議の結果了承した。

#### (8) 古生物学研連

井本伸広研連委員より第17期第1回委員会 (1997年12月8日)に関する次の報告が提出 され,資料として配布された。

- 委員長に池谷仙之委員,幹事に小笠原 憲四郎・平野弘道委員を選出した。
- 2) 第16期森 啓委員長からの申し送り 事項を確認し,今期の活動方針を検討した。
- 3)「研連の見直し」についての第1常置 委員会での検討状況が斎藤常正委員から 紹介され、意見交換を行った。
- 4) 地質科学関係学協会連絡協議会の設立 については、今後の地質科学総合研連で の検討の推移を見守ることとした。
- 5) サイエンス・ミュージアム小委員会の 動向とナチュラルヒストリー・ミュージ アム構想について意見交換を行った.
- 6) 古生物タイプ標本のデータベース構築 について情報と意見の交換を行った.
- 7) 今期の活動として「研連の見直し」への対応,ナチュラルヒストリー・ミュージアム構想の具体化,古生物タイプ標本のデータベース構築等に重点をおくことが確認された.
- 8) 次回委員会は平成10年3月10日に開催の予定.

#### (9) 地質科学総合研連

斎藤常正学術会議会員より,第17期第1回会議が12月22日に開催される予定との報告があった。

(10) IGCP **専門委員会** 

土 隆一委員長より第16期第9回委員会 (1997年9月19日)に関する次の報告が提出 され、資料として配布された。

- 1.来年度からはじまる5年計画の新しい IGCPプロジェクトの提案として次の3 件が提出され,審議の結果,IGCP本部 に推薦することとした。
  - (1) **波田重熙 (神戸大学):** Geodynamics of Gondwanaland-derived Terranes in Fastern Asia
  - (2) **佐々恭二 (京都大学):** Landslide Hazard Assesment and Cultural Heritage
  - (3) 小笠原憲四郎(筑波大学): Cenozoic Events and Paleoenvironments in the Pacific
- 2.IGCP特別シンポジウム「アジア太平洋 地域の形成と地球環境」を、IGCP-379「カルスト過程と炭素循環」および IGCP-384「インパクトと地球外球粒」 の協力により、平成10年1月24日に神 戸大学において実施することとした。

#### 5. 各種委員会報告

#### (1) 科研費問題検討小委員会

八尾 昭委員長 (欠席)より次の報告が文書で寄せられ,資料として配布された。

メンパーが新たになったため、電子メールを利用して従来の活動経過を整理して各委員に報告した.同時に,これまでの検討課題であった(A)科研費審査委員候補の選出,(B)科研費をとりまく現状の認識と分析,(C)科研費問題への短期的対処と中・長期的展望の構築,の3点をあげ、新小委員会で何を検討するべきかを議論している。

#### (2) The Island Arc 編集委員会

徳橋The Island Arc 編集事務局長より配布 資料により、次の報告があった。

- 1.10月9日の臨時評議員会での承認以後, 新しい講読料支払い方式によるThe Island Arcの申込み(更新・再講読・新 規講読)は、12月8日現在で299通であ
- 2.11月11日午前, Blackwell社 Melbourne支社の Managing Editor, Katie Julian氏と地質学会事務局(水野事務局長)との間で,新しい講読料支払い方式に関連した話し合いがもたれ,同日午後,The Island Arc編集委員会(小川編集委員長,徳橋編集事務局長)との間で編集問題に関する話し合いがもたれた.
- 3.11月14日付けで, The Island Arc関連4 学会(日本第四紀学会,日本岩石鉱物鉱 床学会,日本古生物学会,資源地質学会) 会長宛にEditorial Advisory Board の推薦 (継続もしくは新規推薦)をお願いした. 12月8日現在,日本岩石鉱物鉱床学会, 日本古生物学会より推薦の返事がきている。
- (3) 地質学普及教育実行委員会 高橋正樹委員長より配布資料に基づき,次

の報告があった。

- 1.生涯教育・普及啓発WG,研修技術講習会WG,学校教育WGごとに検討を進めてきた
- 2. 生涯教育・普及啓発WG (幹事:神戸 信和・三田直樹)では,とくに国立公園 地質パンフレット (仮称)の作成につい て環境庁の関係課との折衝も含めて検討 を進め、具体的な対象地域とおおよその 作成順,執筆候補者,様式(リーフレッ ト形式)と記述内容等の案を煮つめつつ ある、また、(財)国立公園協会の「平成 10年度自然公園快適環境づくり助成事 業」に対して、評議員会の了承が得られ たならば試験版の作成のための助成申請 を行うことを準備中である。また,一 般・学生・院生向けの基礎的野外地質学 のテキストとして、基礎地質学講座の刊 行を準備中であり、出版社との具体的交 渉が進行中である. そのほか, 科学技術 館との提携による展示等,国立科学博物 館における地質学会との共催による普及 講座の開催、全国博物館の地質学会会員 の活動との連携等、さまざまな項目につ いて検討を進めている. さらに, 現在科 学技術庁の主導のもとに科学技術番組専 用の放送システムの設立に向けて計画が 進行中であり、本WGとしては、その実 現に向けて科学技術庁長官宛に「科学技 術番組専用の放送メディア設立について の要望」を地質学会として提出してもら うよう本評議員会の了承をお願いした 11.
- 3. 研修技術講習会WG(幹事:上砂正一, 向山 栄)では,東京地質調査業協会会 長を招いて討議し,とくに関連企業の地 質技術者の新人教育・再教育,学生の教 育のために地質学会と同協会の共催によ る研修会等を近い将来に開催していく方 向で,両者間で検討,協議を積極的に進 めることとした.(10月臨時評議員会報 告).
- 4.学校教育WG(幹事:高橋 修,阿部 国広)では,学校科目「地学」連絡協議 会での討議課題との関連で中学校理科教 科書のレビユーを行い,関連して小中学 校の理科担当の現職教員に対する系統的 な地学教育の必要性,体系的な副読本 (参考書)の作成の必要性,学校教育に おける博物館の利用,「国立公園パンフ レット」の学校教育面からの必要性など について議論を行ってきた.とくに副読 本の作成についてはできる限り早い機会 に作成した方がよいとの認識に立って, その具体化を検討中である.
- 5.以上の3つのWGのこの間の活動の副産物として,2で述べた要望書のほか,以下の3つの出版計画が進行中なので,あらためて報告するとともに本評議員会の了承をお願いしたい、これらの出版物は現在のリーフレットのように地質学会

編の形での出版を目指しているが,原則 として地質学会に財政的負担をかけない 方向で進めるつもりである.

- (1) 国立公園地質パンフレット (普及啓発WG)
- (2) 基礎地質学講座(同上)
- (3) 理科教育地質学副読本(学校教育 WG)

討論の上,要望書の提出,出版計画について了承された.なお,基礎地質学講座については,出版社との間で具体的出版作業に入ることが了承された.

(4) インターネット運営委員会

天野一男委員長より次の報告が寄せられ た。

ホームページを学術情報センターに開設した.近く書き込みをはじめる予定である.内容が整い次第これまでの試験版を廃止する.もし間に合えば地質学会ニュース1998年1号に案内を掲載する.

#### 6. 各賞選考委員会報告

小泉 格委員長より選考の経過について説明があり、詳細については「議題」にまわすとの報告があった.(議題へ)

- 7. 外部関連委員会報告
- (1) 学校科目「地学」関連学会連絡協議会に

水野篤行委員から配布資料に基づいて次の報告があった。

7月11日(第10回),10月17日(第11回) に開催され,それぞれ平社・水野委員が出席 した.

第10回協議会では,日本測地学会・日本 岩石鉱物鉱床学会における取り組み状況の報 告があったほか,自然災害・環境についてど こでどのように教えるか,地学の内容につい て大きく自然をとらえる方略が考えられない か,などについて意見交換された.

第11回協議会では、地学教育に関する各学会間の情報交換のシステムについて、各学会の状況の紹介と意見交換があり、次回にさらに検討を行うこととした。また、中学校理科2分野の教科書のレビューを東京書籍の教科書をサンプルとして行った。この問題については、科学の概念を教える上にどのような方式がよいかという観点から次回にさらに検討する。次回(98.1.14)には、そのほか本協議会の今後の方向について検討を行う予定である。

(2) 自然史学会連合について

斎藤靖二委員より,報告事項はとくにない との連絡があった.

(3) 地球惑星関連学会連絡会について

新妻信明委員より,1998年3月の合同大会の詳しい案内が地質学雑誌103巻12号の地質学会ニュースに掲載予定であるとの報告があった。

### 議題

#### 1. 地質学会の執行体制整備について

小松正幸執行体制整備委員会委員長より, 討議資料として事前配付された「地質学会の 執行体制整備に関する中間答申」をまとめる に至った経過について次の報告が行われた.

10月臨時評議員会において中間まとめを報告して討議を行い、その結果に基づいて本定例評議員会で中間答申を行う予定であったが、臨時評議員会では報告する時間をとれなかった。そのため、評議員会議長の判断で評議員に対するアンケートが送られ、32名の評議員から回答が寄せられ、多様な意見を得ることができた。これらの意見(予備的整理資料を評議員に資料として配付)分布を考慮して「中間まとめ」を再検討し、一部修正して本「中間答申」として報告する。

中間答申は、執行体制整備に関する5項目 [1.総会について,2.会長の位置付けについて,3.評議員会の構成と定数について,4.執行委員会について,5.各種委員会について]のそれぞれについて,「中間まとめ」とアンケート回答の意見分布の紹介,修正提案からなる.[これらの詳細については執行体制整備委員会の報告として日本地質学会ニュース1巻2号(1998年2月)に掲載予定なので省略1

個々の項目および全体的問題について活発な討論が行われた.主な内容は次の通りである。

「総会」の期日についてはアンケートの結果では春,秋ほぼ同数であり,全会員にアンケートを出すことが小松委員長から提案された.一方,地質関連学会の大会の開催期日を考慮すべきである,とくに地球惑星連合合同大会は年々参加者を増やしており,地球科学全般の立場から連合との連携に,また同大会に配慮すべきである,他関連学会としては地質学会が先に決めてくれた方がよいとの発言があった.

「会長の位置付け」についてはアンケートの結果では、会長・副会長を評議員とすることに賛成16、反対 9、その他3であった。アンケート結果を考慮して、会長・副会長を評議員会のメンバーとするが、執行委員 ・評議員会議長は従来のように会長・副会長を除く評議員から選出するという提案がなされた。これに対して、会長・副会長は全体の代表という立場を考慮して評議員会の議決には加わらない方がよいとの発言もあった。

「評議員会の構成と定数について」においては、とくに支部枠を設けることに関して発言があり、支部の現状に基づいて支部枠を設けるならば支部の現状の整理が必要、当面支部長連絡会議を通じて支部の活動を執行委員会に反映させれば充分であろう、しかし長期的には別途検討をしていくことにしてはどうか、などの発言があった。また、評議員の多選禁止条項を設けるべきである。との発言も

あった。

「執行委員会について」および「各種委員会について」においては、執行体制を原案のように、執行委員会のもとにいくつかの部(あるいは部会)を設け、個々の委員会(現在の常置委員会に相当する)を関係する場合、全体的な運営が円滑に行われるかどうか、部会長の権限・任務はどうなるのか、現状に照らして具体的に詰めていくべきである、等の質問・意見が出された、事務局長については、執行委員会の推薦によって評議員会が承認し、会長が委嘱するという原案に賛意の発言があった。

「全体的な問題」については、今回出され た中間答申と議論の内容を今後のスケジュー ルを含めて会員に対して広報することが必 要、現在の段階ではまだアンケートを出せる 状況にない,会則・運営細則改正の検討が必 要、執行体制整備に関するある形が得られて から会員にアンケートを出す, 少なくとも当 初予定された本年度中に結論を出すことは無 理で、さらに多くの意見をききながら慎重に 検討を進めるべきである、等のさまざまな意 見が多く出された、最後に、秋山会長から、 今年度1年間の時限とされている執行体制整 備委員会として今後第4回定例評議員会まで さらに検討を進め、とくに会則・運営細則と の対応,委員会等の検討等,残されている問 題を詰めてもらい、同評議員会で最終答申、 その結果来年度の新委員会に引き継ぐことに なろう、との発言があった、また、小松委員 長から、中間答申の大枠が認められたと考え られるので、その方向で会則・運営細則の検 討を含めて細部を検討した上,第4回定例評 議員会に最終答申を提出したい,との提案が 示され, 了承された.

2. 日本地質学会各賞受賞候補者の選考について

小泉 格各賞選考委員長より選考委員会における選考の経過説明があった後,配布資料に基づいて,下記の各賞受賞候補者が提案され,審議の結果原案通り了承された.なお,本議題に関しては斎藤常正評議員議長が受賞候補者の一人となっているので,大木靖衛評議員が議長代理を務めた.

#### 日本地質学会賞(1件)

斎藤常正 (東北大学)「化石層序学によるプレートテクトニクスの証明」

#### 論文賞(1件)

丸山茂徳(東京工業大学)「Pacific-type orogeny revised: Miyashiro-type orogeny proposed」: The Island Arc, 6/1.

### 研究奨励賞(1件)

星 博幸(愛知教育大学)・高橋雅紀 (地質調査所)「Paleomagnetic constraints on the extent of tectonic blocks and the location of their kinematic boundaries: implications for Miocene intra-arc deformation in Northeast Japan」: 地質学雑誌 103/6.

#### 小藤賞(1件)

東田和弘(名古屋大学院生)・小池敏夫 (横浜国立大学)「岐阜県上宝村・重ヶ 根地域から産出したオルドビス紀コノ ドント化石について」:地質学雑誌 103/2

#### 日本地質学会国際賞(1件)

W.G. Ernst (米国スタンフォード大学教授)「三波川変成帯の研究と日本列島のテクトニクス」

とくに国際賞を中心として討論があり、そ のなかで、国際賞のみならず、他の賞も対象 とした基金を設け、評議員会のもとに基金を 募金する母体を作ってはどうかとの提案があ り,多数の賛成が得られた.とくに国際賞に ついては,招待旅費,顕彰方式・内容等の詳 細が未定であり、早急に決める必要がある、 将来的な展望を含めてこれらの問題を検討す るために,会長を委員長とする委員会を設け ることとし、人選を秋山会長に一任した、そ の結果、秋山会長から、検討委員会の構成を 会長,副会長(2名),第二庶務委員長,国 際交 流委員長,研究企画委員長とすること が提案され、了承された、なお、秋山会長か ら、基金の募金にあたって地質学会の自主的 努力が必要であるとの観点から評議員各位に 寄付をお願いすることもあり得る、と述べら n.t

#### 3. 地質学論集の最終刊行計画について

滝田会計委員長より配布資料に基づき,下記3件の地質学論集の刊行が提案され,合い見積りの結果それぞれ,審議の結果,最低見積額を提出した印刷社(下記の[]内)に印刷を依頼するということで,原案通り,刊行が了承された.

- ・新妻信明ほか編: 21世紀を担う地質学 (略称: 21世紀)(総ページ: 238p.) [創文印刷工業株式会社]
- ・狩野謙一ほか編: 21世紀の構造地質学 にむけて(略称:構造地質)(総ページ: 283p.)[株式会社イセブ]
- ・岡田博有ほか編:地震と地盤災害 1995年兵庫県南部地震の教訓 (略称:地盤災害)(総ページ:171p.,カラー口絵,カラー写真あり)[(企)昭和堂]

#### 4. 会員の除籍について

中田節也会員委員長から,会則第6条により1994-1997年度の4年間にわたる会費未納の78名の下記会員の除籍が提案され,原案通り了承された.

正会員:明石 勤,阿部雅彦,阿部昌浩,有川眞伸,碇京子,市川寛,一毛陽二郎,一ノ瀬正已,糸井理樹,伊藤卓,伊藤敏彦,井ノ上幸造,井上 良,井上雅博,岩崎純規,越後格之,大矢浩史,奥井明彦,小瀬昭一,小田島高之,懸川重雄,勝間秀樹,金井敏正,金子良仁,河戸克志,岸 允,古田土俊夫,

小林隆志,定近礼子,佐藤久夫,佐藤万寿美,鈴木哲夫,鈴木美佐緒,高塚 潔,高橋 正,高橋俊正,立 岡昌彦,田邊智司,塚原俊一,鳥飼成美,鳥越隆弘,中村 薫,永田高弘,奈村英之,南波鑑四郎,服部龍司,長谷川淳,林 敏朗,林 正貴,馬場利文,福岡久,藤井統邦,藤岡一俊,舟橋正俊,前田浩之, 松尾広昭,松下典史,水上香奈江,宫川秀樹,宫本 亮,望月康広,守屋俊治,結城智也,吉井恭子,李 仁鉉,J.C. Aichison,C. Avecilla G., Moutte M.J.,姜 志勲,全銀瑛,崔 善奎.

院生会員:安藤葉子,伊藤真洋,張延, 三河内岳、Yousif M. Ahmed

#### 5. 名誉会員の推薦について

中田節也会員委員長から,下記の,内規による候補者18名,支部長推薦候補者3名を名 普会員として推薦したいとの提案があり,審 議の上,原案通り了承された.

内規による候補者:魚住 悟,宇留野勝敏, 木崎甲子郎,黒田吉益,柴田松太郎,下 山俊夫,武田裕幸,千地万造,中川久夫, 奈須紀幸,橋本光男,羽鳥謙三,端山好 和,藤田至則,古川和代,星野通平,三 梨 昴,山岸猪久馬.

支部長推薦による候補者: 亀井節夫 (元会員), 新井房夫, 小野寺 透.

#### 6.1998年度予算について

滝田良基会計委員長より、1997年度収支 実績、収支決算見込みに基づいて立案した暫 定的な予算案について説明と提案があり、審 議の上、原案を了承した、なお、この予算 (総額94,821,000円)は1997年度決算見込み における1998年度への繰り越し見込み額 16,021,000円を含むもので、確定的なもので はない、最終的にはあらためて第4回定例評 議員会に提案することとなっている、また、 1999年度への繰り越し額がさらに減少する 見込みであり、財政が危機的状況にあること を示しているとの説明があった。

そして同会計委員長から,値上げや活動全般を含めた長期的視野からの抜本的対策を早急に講ずる必要があり,会員に対して至急財政白書を示すとともに,その具体的な案の早急な策定を目的とした「財政問題検討委員会」を設けることが提案された.この提案について討論の結果,野村 哲評議員を委員長として会計委員経験者ほか適当な会員からなる同委員会をつくることを決め,第4回定例評議員会までに結論を出してもらうこととなった.なお,委員の人選については野村委員長に一任することとした.

- 7. 第105年 (1998年) 総会議事について 新妻信明行事委員長より標記につき下記の 次第とすることが提案され,了承された.
- (1) 開会
- (2) 議長選出

(3) 報告事項

1997年度事業経過報告 役員選挙結果報告 日本学術会議報告

(4) 承認を求める事項

評議員会議決事項

1997 年度決算・財産目録および会 計監査結果報告

- (5) 学会賞等各賞授与
- (6) 審議事項

名誉会員の推薦について 1998年度の事業計画および予算案 について

- (7) その他
- (8) 閉会

#### 8. その他

1) 今後の総会・年会の開催期日と場所について

新妻信明行事委員長より標記について次 の提案があり,了承された.

- ・第106年総会・年会(1999年): 年会に ついては名古屋(秋)で開催する方向で 名古屋大学で検討中である.総会につい ては早稲田大学(春)に依頼したい.
- ・第107年総会・年会 (2000年): 秋田を 年会開催地の第1候補とする.
- ・第108年総会・年会 (2001年): 金沢を 年会開催地の第一候補としたい.
- 3) 今後の評議員会の日程(案)について 斎藤靖二執行委員長から標記について次 の提案があり、了承された。
- 1997年度第4回定例評議員会: 1998年3月27日(金)午後 北とびあ 901会議室 12:30~18:00.
- 1998 年度第1 回定例評議員会: 1998 年3 月28日(土) 12:00~13:00 学習院
- ・1998年度第2回定例評議員会:1998年6 月20日(土)[評議員会後に会場予約折 衝の結果,早稲田大学国際会議場で開催 することとなった 事務局]
- 4) その他
- ・嶋本利彦評議員が中心となって行っている評議員間のEメイルネットについて質問があり、討論の結果、メールアドレス非保持者(4~5名)に対してはファクス連絡を行い、討論の場としては使用しないという条件で、評議員会の公式のネットとし、連絡に使用するということとした。
- ・本年9月の松本大会の折に臨時評議員会を行うことの必要性について討論され, もし開催するとすれば9月24日(会場は 準備済み)となるが,開催するかどうか については,次回定例評議員会で決定す ることとした。

### 執行委員会だより

第11回~第13回執行委員会の概要をお知らせします、第11回・第12回執行委員会の報告事項・審議事項についてはおもな項目名のみを記します、詳しくは,別に掲載の1997年度第3回定例評議員会議事抄録をご参照ください。

#### 第11回執行委員会

1997年12月10日(水)13時30分~20時に学会事務局で行われ,出席者は斎藤靖二・徳橋秀一・高橋正樹・滝田良基・新妻信明・嶋本利彦・中田節也執行委員,水野篤行事務局長でした。

地質学論集の最終刊行計画について

1998 (会計)年度 (1998年1月~12月) の会誌上の広告について

1997 (会計)年度と1998 (会計)年度の, それぞれ収支決算・予算案について

会員名簿 (1998年発行) の掲載事項について

名誉会員の推薦について

日本地質学会ニュ - スの編集体制等検討 ワ - キンググル - プの第1回会合報告

#### 第12回執行委員会

1997年12月20日10時~12時,午後の第3 回定例評議員会の前に,王子の「北とびあ」 で行われました.出席者は,秋山雅彦会長, 小松正幸・坂 幸恭副会長,斎藤常正評議員 会議長,斎藤靖二・天野一男・丸山茂徳・滝 田良基・中田節也・徳橋秀一・高橋正樹・新 妻信明・嶋本利彦執行委員,水野篤行事務局 長でした.

第3回定例評議員会の議事進行について 「科学技術番組放送」の実現に関する要望

#### 書の提出について

#### 第13回執行委員会

1998年1月21日13時30分~18時30分に 地質学会事務局で行われました.出席者は斎藤靖二・天野一男・丸山茂徳・徳橋秀一・高 橋正樹・新妻信明・嶋本利彦委員,水野篤行 事務局長でした.おもな報告・審議事項は次 のとおりです

会計委員会から1997(会計)年度の収支 決算報告が提出され,次年度事業準備金が 21,442,942円と確定,当初見込みを大きく上 まわることがわかりました.これに基づいて 第3回定例評議員会で承認された1998年度予 算案を修正し,第4回定例評議員会に修正案 を提案した上,次回総会に諮ることとしまし た

The Island Arcの講読申込みが336件となりました.なお,地質学会が同誌を扱う際の取扱い手数料についてBlackwell Science社と折衝を行ってきましたが,同社から学会が取り扱う金額の7%としたいとの申し入れがあり,討議の上,これを了承しました.

1月14日に開催された学校科目「地学」 関連学会連絡協議会に平社定夫・水野篤行両 委員が出席,その概要の報告がありました。 また,他分野で教育用語集作成を検討中との 紹介があり,「学校地学」においても用語集 の作成を検討してはどうかという意見が出され,具体的な進め方について意見交換が行われました

第3回定例評議員会の了承に基づき,会長 名の要望書「科学技術番組専用の放送メデイ ア設立実現についての要望」を本年1月14日 付けで,科学技術庁長官宛提出したとの報告

#### がありました。

本年初めて授与対象となる「国際賞」の名称をどうするか,受賞者に対する必要経費をどうするか等について議論があり,第3回定例評議員会で設置された「各賞基金検討委員会」(委員長:秋山会長)に検討を依頼することとなりました.委員会が外部に協力が 必要である・例えば評議員から1口5千円程度で募金すべきであるとの意見があることが紹介され,意見交換の上,執行委員会としてこの考え方を了承し,さらに会員有志からの募金活動も積極的に進めるべきとの結論となりました・

本年1月からの日本地質学会ニュ・ス(以下ニュ・ス誌と記す)の地質学雑誌からの分離・発行に際し、ニュ・ス誌の頒布価格や別刷をどうするか等について討議し、次のように扱うこととなりました。

- (1) 会員には地質学雑誌とニュ・ス誌の両者を無償配布する
- (2) 非会員には原則として両者を合わせて 有償配布する(従来の雑誌の価格と同じく 1,600円).ニュ・ス誌のみを購入する場合に は、1冊800円で有償配布する。
- (3) ニュ ス誌については著者別の別刷は作成しない、必要な場合には別冊を購入してもらうこととする、購入については、10部、30部、50部以上の3段階とする、それぞれの価格は次のとおり、10部:5,000円(1冊500円)30部:9,000円(1冊300円)50部:10,000円(1冊200円)(それ以上の場合は、1冊200円の割合で10部単位とする)

#### 1997年度第4回定例評議員会・1998年度第1回定例評議員会のお知らせ

標記評議員会を下記のように,3月27日(金),28日(土)に開催いたします。傍聴希望の方は3月9日(月)までに執行委員会宛,氏名・連絡先を記入した申請書をご提出ください。

1997年度第4回定例評議員会

日 時: 1998年3月27日(金)12:30~18:00

場 所:北とびあ 901会議室

1998年度第1回定例評議員会

日 時: 1998年3月28日(土) 12:00~13:00

場所:学習院大学 西4号館

### 日本地質学会ホームページ開設のおしらせ



●English is <u>Here</u> ●NEWI 新着情報

<u> 地質学会とは?</u> | 運営組織 | 地質学雑誌

The Island Arc | カレンダー | トピックス | 研究室紹介 公募情報 | 科研費情報 | 事務局だより | 研究助成金 | 法人化

●関係する学会・研究機関・官公庁・企業

●日本地質学会 〒101 東京都千代田区鍛冶町1-10-4 丸石ビル TEL: 03-3252-7242 FAX: 03-5256-5676 E-mail: geosocjp@ra2.so-net.or.jp

●インターネット運営委員

② 文部省学術情報センター学協会のホームページへ戻る。

今まで、日本地質学会のホームページの試作版を公表し、会員からのご意見をうかがいながら内容を検討してきました。その経験をふまえ、このたび正式のホームページを文部省学術情報センターに開設いたしました。URLは、http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/です。新鮮な情報を発信してゆきたいと思います。このホームページは地質学会会員への情報提供の場であるばかりでなく、地質学会の社会へのメッセージの発信場所でもあります。

このホームページはインターネット運営委員会によって維持管理されています。それぞれの委員が担当ページを決めて管理しています。委員名と担当ページは下記の通りです。それぞれのページについてのご意見は、担当委員ないしは委員長宛にメールでおよせ下さい。より充実したホームページ作成の参考にいたします。一部に工事中のページがありますが、おいおい充実させてゆきます。なお、ホームページへの掲載希望記事は委員長にメールでお送り下さい。インターネット運営委員会において採否を決定します。

[インターネット運営委員会委員一覧 (アルファベット順)および担当ページ 1

\*はその委員が責任者であることを示します.

天野一男 < kam@mito.ipc.ibaraki.ac.jp>: 委員長・全体構成・地質学会とは?\*・ 運営組織・科研費情報\*・法人化\*・英語版

濱本拓志<takuji@flower.gs.niigata-u.ac.jp>:新着情報\*・研究室紹介\*・公募情報\*.

Martin Andrew<martin@mito.ipc.ibaraki.ac.jp>: 英語版.

宮下由香里 <yukari@gsi.go.jp>:地質学雑誌\*・カレンダー\*.

水野篤行<geosocjp@ra2.so-net.or.jp>:事務局だより\*・地質学会とは?・運営組織.

斎藤靖二<y·saito@kahakusv.kahaku.go.jp>: 地質学会とは?・運営組織・研究助成金\*・法人化.

徳橋秀一<toku@gsj.go.jp>:地質学雑誌, The Island Arc, カレンダー.

渡部直喜<jibanken@cc.niigata-u.ac.jp>:全体構成\*・英語版\*・地質学会とは?・運営組織\*.

渡部芳夫<nabe@gsj.go.jp>: The Island Arc\*

(文責 天野一男)

## 編集後記

今回は植村会員が, イギリス地質学会の大 組織改革のお話しを書いて下さいました、保 守的だったイギリス地質学会も,ついに 1990年代になって18世紀以来の大改革をせ まられたということです. 一方, アメリカ合 衆国では、最近になって地質調査所の大リス トラが断行されました、わが国でも、地質調 査所の独立法人化や,大改革が日程に上って いるとの話しを伺いました.世界的にみても, 地質学は今や大きな歴史の曲がり角に来てい るようです、この危機を何とか乗り切らない と、地質学の明日はないという意味では、日 本地質学会にとっても対岸の火事とはいって いられないのが現状だと思います、正直いっ て、これから先どうしたらよいのか頭を抱え 込んでしまうような状況といえないこともあ りません・しかし「俺たちに明日はない」な

どといってかっこうをつけていても,何も解決できません.過去の栄光を追って,後ろばかり向いているわけにはいかないのです.できることから一歩ずつ,より良い方向に改革を続けながら,ひたすら前を見つめて前進していくほかはない.そんな感想を持ちました.

ニュース誌が届きいろいろなご感想をいただきました.「学会の活発な活動の情報が詰め込まれてい、本誌に比肩の意義を覚えます」と感想をいただきました.また,立派になったことで.財政危機が叫ばれているのに,こんなものを作ってどうするつもりだと思われた方もあるかもしれません.本誌とニュース誌をわけるにあたっての費用はこれまでの印刷費の枠内に抑えてあります.用紙も上質紙ですが,地質学雑誌と同じ紙を使った方がか

えって安くつくそうなのです.地質学会も財政危機ですから,これからは費用をできるだけ削る経営努力をしていかなくてはなりません.昨年暮れの評議員会で財政問題検討委員会が作られました.現在,野村 哲委員長の下,財政問題を鋭意検討中です.結果が出たら,このニュース誌で随時紹介していきたいと考えております.貴重な会費で作られているニュース誌です.是非,会員のみなさまの手で,内容豊富なものに育て上げていって頂きたいと思います.積極的な御投稿をお待ちしております.

ニュース担当

高橋正樹・牧野泰彦・渡部芳夫

(文責:高橋)

#### 「お詫びと訂正]

日本地質学会 News 第1号14ページの「新版地質図・報告書類」で紹介されました"20万分の1地質図幅「宮崎」"の見出しに,謝って「地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)」という記載が入っていましたことを、お詫びして訂正いたします。

# The Island Arc

### The Island Arcだより

春の異動の季節が近づいてきました. The Island Arcを購読されている方,購読を新しく申し込まれた方で引っ越しなどされる方は,本号の「The Island Arc新規購読・送付先住所等変更届け用紙」を必ず学会事務局までお送りください.Blackwell Science社には,本用紙を基に届けます.また,1998年(Vol. 7)からのThe Island Arcの新規購読も引き続き受け付けておりますので,同用紙を使って学会事務局までお申し込みください.

なお、新規購読を申し込まれる場合は、まず郵便局備え付けの振込用紙を使って、「日本地質学会の0140-8-28067」までお支払いください.この場合、通信欄にThe Island Arc1998 年購読料と振込金額の趣旨を必ず明記してください.なお、せっかく購読料を振り込まれても、上記の新規購読申込み用紙を学会まで提出していただかないと雑誌はお手元に届きません.雑誌の発送は従来通り海外から行われますので、本申込用紙を通して送付先の住所等を英語でお知らせいただくことになっています.Blackwell Science 社に送られるThe Island Arc の送付先リストは、この申込用紙を使って行われます.したがって、購読料の振込と上記の申込用紙の提出は、必ずセットでお願いします.面倒なようにみえますが、一度手続きをしていただきますと、翌年からは、特に購読中止の連絡がない限り、学会の会費請求の際に自動的に購読料も上乗せされる購読自動継続扱いとなりますので、これまでのように毎年手続きをする手間が省けます.

また、大学、博物館、会社等での機関購読(institutional subscription)もThe Island Arcの財政基盤強化と普及に大きな効果を発しますので、皆様の積極的なご協力をお願いします。その際は、出版社のBlackwell Science 社に直接あるいは出版物取り扱い業者を通してお申し込みください。昨年の10月号巻末の「The Island Arc購読・支払方法の変更について」の欄に、購読料、連絡方法等紹介しておりますので、ご参照ください。

なお,昨年(1997年)以前の雑誌(バックナンバー)の購入を希望される場合は,1月号の本欄でもお伝えしていますように,必ず郵便振替「アイランドアーク編集委員会 00310-8-1321」に振り込んでください.昨年の7月号綴じ込みの振込用紙を使っていただいてもけっこうです.決して,上記の学会宛の振込口座には振り込まないようにしてください.学会が扱っているのは,1998年(Vol. 7)からのThe Island Arcの購読料です.なお,バックナンバーの在庫は,大体最近のものに限られていますので,購入が可能かどうか,事前に必ず下記のThe Island Arc編集事務局まで確かめてから,振り込むようにしてください.この場合も通信欄に,振り込みの目的(内容)と連絡方法(電話番号など)等を必ず明記してください.

1月末現在での地質学会に申し込まれた1998年(Vol. 7)の 購読者数は,339名となっています.皆様のご協力に深く感謝 いたします、Vol.7の第1号 (Issue 1) は,3月末にお手元に届く予定です.なお,これまでに申込用紙を出されたにもかかわらず,まだお支払いをしていない方がおられましたら,至急お支払いをお願いします.一方,購読料を振り込んだのだけれども,申込用紙を出されていない方がおられましたら,至急学会まで上記の申込用紙をお送りください.そうしないと,上述した理由により,せっかくのThe Island Arcがお手元に届きません.あくまでセットでお願いします.

昨年5月号の本欄で、1997年度第4回定例評議員会(1997年4月3日)において、筆頭著者が地質学会の会員の場合、日本地質学会論文賞の受賞対象にThe Island Arcの論文も対象になることが決まったとお知らせしましたが、昨年12月20日に開催された1997年度第3回定例評議員会において、本年度の論文賞としてThe Island ArcのVol.6、Issue 1(1997年3月号)に掲載された丸山茂徳氏(東京工業大学)の"Pacific-type orogeny revisited: Miyashiro-type orogeny proposed"が各賞選考委員会での審議を経て推薦され、承認されました(本号の同評議員会議事録をご参照ください)、正式には、3月28日の総会での承認を経る必要がありますが、The Island Arcからの論文賞第一号ということになります。これを機会に、購読はもちろんのこと、投稿にも一層の弾みがつくことが期待されます。皆様の積極的な投稿をお待ちしております。いずれにしても、The Island Arc編集委員会としては大変めでたいことです。

最近,地質学会のホームページが開設され,その中に,The Island Arcのページもありますので,そちらもご参照ください

dk なお,論文の投稿や雑誌の編集上のことでお聞きになりたいときは編集委員長まで,その他のいろいろな問い合わせ・ご意見・苦情等につきましては,気軽に編集事務局長までお知らせください.出張等で長期不在の場合もありますので,後者の場合は,宛先を連名でお送りくだされば幸いです.

### The Island Arc編集委員長

**小川勇二郎(筑波大学**, TEL: 0298-53-4307, Fax: 51-9764,

E-mail: yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp )

巽 **好幸(京都大学**, TEL: 0977-22-0713, FAX: 22-0965,

E-mail: tatsumi@bep.vgs.kyoto-u.ac.jp )

#### The Island Arc編集事務局長

**徳橋秀一(地質調査所, TEL: 0298-54-3676, Fax: 54-3666,** 

E-mail: toku@gsj.go.jp)

渡部芳夫(地質調査所, TEL: 0298-54-3677, FAX: 54-3666,

E-mail: nabe@gsj.go.jp)

## The Island Arc

## 新規購読申込み・送付先住所等変更届け用紙

1.. 2. いずれかの番号に○をつけてください!

1. The Island Arc [1998年Vol.7~] の購読を申し込みます。 [年間購読料]

正会員・名誉会員:8.000円;学生・院生会員:6.000円(新設定)

郵便局の振込用紙にて「日本地質学会 00140-8-28067」まで,購読料をお支払いの上,本用紙をお送りください.なお,1999年[Vol.8]以降は自動継続となり,購読料は学会会費と一緒に納入していただくことになります.詳しくは,本号 [98年2月号] の 「The Island Arc だより」をご参照ください.

2. The Island Arc 送付先住所等の変更を届け出ます.

<主な変更内容>(以下の項目で該当するものを○で囲ってください)

- (1) 所属先, (2) 自宅住所, (3) 送付先住所, (4) 氏名(姓),
- (5) その他:

1,2 0 9 1000-20 11 0	<u> PaDにこaD人 \ /こさい。</u>	変更のある場合は、変更後の内容を書いてくださ
記入年月日:_		月日
氏名:		<u> </u>
		7桁番号,機関独自の番号がある場合はその番号)
TEL	FAX	E-mail :
<i>自宅住所:〒</i>	(7桁	番号)
TEL.	FAX	E-mail:
会員の種別: 1. I 4. 当	学生会員(学生及びこれ	3. 院生会員(院生及びこれに準ずる人)
	3. 日	1本古生物学会 4. 資源地質学会
<英語表記(送	:付先宛名)>(i	重要!正確に書いてください.)
		(例:KURUMA, Torajiro)

本用紙は、地質学会事務局に届くようにしてください、郵便でもファックスでも結構です。 〒101 千代田区鍛冶町 1-10-4 丸石ビル 日本地質学会事務局 FAX.03-5256-5676, TEL.3252-7242 E-mail でも受け付けております。その場合、タイトルを「The Island Arc 新規購読もしくは変更届け」 とし、上記項目を明記の上、geosocip@ra2.so-net.or.jp (Geol.Soc.Japan)までご連絡ください。

例:Geological Society of Japan, Maruishi Bldg., 1-10-4 Kaji- cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0044, JAPAN

# Q & A 法人化 (5)

#### 事業計画委員会

今回は,Q&Aの締めくくりとして他学会における法人化の具体的な状況を説明します.他学会に対して行ったアン ケート調査結果については「Q&A(3)」(地質学雑誌,103巻10号)を参照してください。

聴き取り調査はどのような学会に対して行ったので **Ų**43 ≢か?

A43 地質科学に関連ある学協会,基礎科学の学会の中から規模 の大小を考慮に入れて,社団法人の6学会と法人化を準備中の1 学会を選び,事務局や担当理事・委員を訪問し,面談しました.

では、聴き取り調査の結果をお尋ねします、まず、 法人化のメリット、デメリットについてどうでしょ うか?

A44 最近法人化した学会,準備中の学会ではいずれもメリッ ト・デメリットに関する議論を行ったようですね.アンケ-ト調 査結果 [Q&A(3), A31] にも出ていましたが, 法人学会の場 合には,税制面での有利性,社会的発言権が大きくなったなどの 具体例が挙げられました. 例えば, 次のようなものです.

- ・事業・出版収入に対する税率(27%)が商法上の法人(37. 5%より優遇されている.
- ・寄付行為が非課税となる.・大規模な学術研究計画への公的 な承認が得やすくなった.
- ・他機関から研究を委託されるようになった.
- ・出版物などの普及活動資料を公に広く流通できるようになっ

一方では,主務官庁への報告が義務付けられる(理事会・評議 員会等の議事録の提出),主務官庁から随時事務的資料の提出要 請があり,それに対応しなければならない,毎年法務局への登記 が必要となる,そのほか会計規模8,000万円以上の場合には所轄 の税務署に収支決算の申告を要する,など手続き上非常に繁雑で あるようです.規模が大きくなく,事務局員が非常に少ない学会 では事務処理が大変になったという声もありました.これはデメ リットということになろうかと思います.しかし,かえって書類 整備・管理などがしっかりしてきたなどと評価しているところも あります.

**Q**45 <sub>すか?</sub>

法人になった学会に対する主務官庁の監督はどうで

A45 これまでどおり,学会誌に対する印刷補助金はあります. しかし,法人になったからといって,主務官庁から特別に補助金 が出るということはありません.金銭的な面はもちろん,学会の 活動そのものに対する干渉めいたものはなく,監督の内容は,も っぱら定款通りに運営が行われているかどうかという点にあるよ うです.そのようなことから,ある学会では,定款を策定する際 には, 学会の運営をしやすいように定款を作る必要があると言っ

ていました.

( )46 総会や年会の開催期日についてはどうですか?

A46 事業年度, とくに会計年度が学会により, 1月~12月, 4 月~3月と大別されます、それに応じて総会や年会の開催期日が 異なり、いくつかのパタ・ンに分けられます。前者の一つの例は、 年2回総会・大会を行っています、10月の総会で事業計画・予算 案を決め,3月の総会で事業・決算承認を行って,文部省に報告 するそうです(主務官庁に対して3月末までにその年度の事業報 告を行う必要があります). もう一つの例は, 同様に10月に総会 を行って予算案を審議し,3月に臨時総会を行って決算承認を行 うというものです.また,総会で3月の理事会に決算承認を付託 するという方式をとっている学会もあります.

 $()_{47}$  評議員や理事の選出方式についてはどうですか?

A47 理事の選出については、それぞれの学会で実状にあったや り方で行っているようですが、何れにせよ民法に従って「社団法 人の理事は総会で選任する」と定款にうたわれています、評議員 の選出についても様々ですが,多くの学会では会員の選挙による 選出方式をとっています.

**(**)<sub>48</sub>

そのほか何かありますか?

A48 ある学会を訪れた際,1996年9月に閣議決定された「公益 法人の設立許可及び指導監督基準」の運用指針のなかに「総会の 定足数を最低でも構成会員の過半数以上とする必要がある」とあ り、これが学術団体にも適用される可能性があるということでし た. もちろん委任状を含めての数ですが, とくに規模の大きい法 人学会では対応が財政的に大変だろうと思います. ちなみに日本 地質学会の現会員数の場合ですと,これが適用されると総会の定 足数は約2600となります.日本工学会ではこの問題について主 務官庁の文部省と折衝し,また多数の学協会に対して広くアン ケ・ト調査を行いました.今後,どのように推移していくか,見 守る必要があります.

ところで、『事務局ネットワ - ク』というのがあっ て、最近「学会の法人化問題」の特集号が出された 49 と聞きましたが,どのような内容ですか?

A49 『事務局ネットワ-ク』は「学協会サポ-トセンタ-」と

いう組織(学協会の事務局が加入している任意団体)が出してい る連絡紙です.その12号(1997年12月発行)に「学会の法人化 問題」特集記事が掲載されました.事業計画委員会として大きな 関心をもって読みました。すでに法人となっている学会、法人化 を検討中の学会,それぞれ1学会ずつの状況が記されているほか, 学協会サポートセンターが諸学協会に対して行った「法人化に関 するアンケート調査結果」,同センターが文部省学術情報課から 得た,「社団法人となるための最低必要要件」が掲載されていま

法人化された学会(94年に社団法人認可)の記事によれば, 任意団体のときに比べて事務量が増加した, 一方では, 社会的認 知を高めるための普及活動が活発化し,また資格授与ができるよ うになったことはメリットというべきである,と述べられていま

法人化検討中の学会の記事やアンケート調査結果を読むと,メ リット・デメリット論をはじめとして、どこでも地質学会の場合 と似たようなことが議論されているのだな、ということを感じま した.アンケート調査結果の一部を学協会サポートセンターの了 解を得て,資料として本文末に引用・掲載します.

文部省の「社団法人となるための最低必要要件」は以下の通り

です

- (1) 会員数が1,000名以上であること(学生会員を除く).
- (2) 基本財産が社団法人で2,000万円以上,財団法人で1億円 以上であること.
- (3) 任意団体として3年以上の活動をしていること.
- (4) 学会が唯一無二の性格を持ち,かつ全国規模であること.
- (5) 事務所があり専門の職員がいること.
- (6) 国民に対してその分野で普及啓蒙活動をしていること.
- (7) 海外情報発信を含めて幅広い活動をしていること.
- (8) 経理に関して公認会計士がいること.

上記の最低必要要件を日本地質学会に照らすとどう **し**50 でしょうか?

A50 (2)と(8)を除いては,何ら問題はありません(2)の基本財 産は,現在のところ基金として30万円です.すでにQ&A(4)の A39で述べましたように,この基金については,会費とは別に寄 付などで準備する必要があります (8)の公認会計士については, 他の学協会同様に外部委託で処理できるでしょう.

学協会サポートセンターによる。約50学会に対する 「法人化問題」アンケート調査結果(事務局ネットワ ーク, 12号からの抜粋・引用)

- Q 法人化して良かった点をお知らせ下さい.
  - a 社会的地位が確立した b 国際的立場で信用を得るのに 必要であった c 知名度・信用度のアップ d 事業展開 の拡張 e 課税免除, 公益活動の認知 f非課税措置が 受けられる/科研費補助金が受け易い g権利能力/税の 免除/特定公益法人化 h資格を出しているのでその社会 的認知が高まった。
- Q 法人化して面倒になった点をお書き下さい.
  - a 監督官庁への諸届け出 b 手続きの煩雑さ c 主務官 庁(2か所)への届け出,検査等が必要 d 会費の未納の 取り扱い、決算等監督官庁への報告 e 主務官庁との関係 f とくに感じていない.

- Q 総合的見地で法人化した利点をお書き下さい.
  - a 国の内外での学会の評価に貢献大と思う b会の活性化 cいろいろなことが官庁の指導により整備された d 社会的評価,公益的立場 eいろいろな面での立場が強 f 学会の位置付け g対外的に社会的信頼が得 くかる h法律により権利能力が与えられ社会的活動の主 i定款等諸規定により会員による 体となることができる 民主的運営が図られる。
- Q 法人化することの意義をどのようにお考えですか.
  - a意義などないと思う b寄付を受けやすくなるので、会 の発展に役立つ c 社会的地位の向上が期待される e 社会的信頼度の向上と責任が重くな 社会的に安定する f 社会的評価が得られる g社会的な面での評価が 違う/非課税措置が受けられる h対外的に認知されたこ i公的存在として認知されること/任意では単なるグ ループ,ボス化,活動の偏り等につながらないとも限らない.

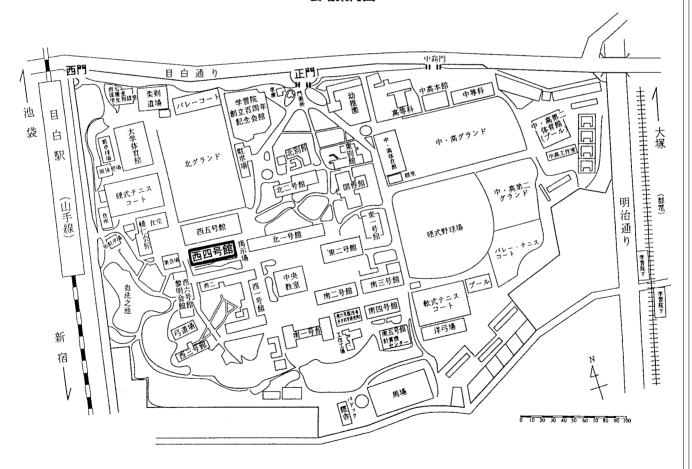
### 日本地質学会第105年総会・シンポジウムプログラム

期 日 3月28日(土)・29日(日)

会 場 学習院大学 西4号館(東京都豊島区目白1-5-1)

	会 場	午 前	午 後	夜間
3月28日	101 <b>教室</b>	特別講演 第105年総会	国際賞受賞記念講演 新しい島弧観の確立に向けて	
	かんぽヘルス プラ <b>ザ</b> 東京			懇親会
2 日 20 日	102 <b>教室</b>	地質学は斜面災害を予測でき るか	第四紀気候変動	
3月29日	201 <b>教室</b>	新しい造山運動論	領家帯と黒瀬川帯の諸問題	

#### <会場案内図>



#### \*学習院大学への交通

JR山手線「目白駅」下車徒歩3分.目白駅の出口は池袋寄りの1ヶ所です.

### 日本地質学会第105年総会議事

日本地質学会会長 秋 山 雅 彦

1998年2月1日

日本地質学会総会を次の議事により開催いたします。

3月28日(土) 10:15 12:00 会場 学習院大学西4号館101教室

- 1. 開会
- 2. 議長選出
- 3. 報告事項
  - 1997年度事業経過報告
  - 役員選挙結果報告
  - 日本学術会議報告
- 4. 承認を求める事項
  - 評議員会議決事項
  - 1997年度決算・財産目録および会計監査結果報告
- 5. 学会賞等各賞授与
- 6. 審議事項
  - 名誉会員の推薦について
  - 1998年度事業計画および予算案について
  - その他
- 7. その他
- 8. 閉会

#### 総会への委任状をお送りください.

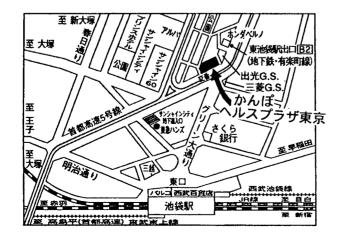
総会は正・院生・学生会員の合計数の15分の1以上(1997年12月現在の会員数では約350名)の参加がなければ議決することができません(会則第8条1.).できるだけ多くの会員の総会へのご出席をお願いいたします。総会に出席できない方は、とじ込みの委任状(切手不要)を3月26日までに届くようにお送りください。

### 懇 親 会

3月28日(土) 18:00 20:00

会場 かんぽヘルスプラザ東京(豊島区東池袋4-7-7)

原則として予約参加制です、1月のNews 誌に挟み込みの行事委員会用振替用紙で,お申込とご送金をお願いいたします。締切は3月18日です、まだ充分間に合いますので,大勢のご参加をお待ちいたしております。



#### 会場への交通

JR, **地下鉄, 西武池袋線**,

東武東上線「池袋駅」徒歩8分,

地下鉄有楽町線「東池袋駅」徒歩2分.

### 3月28日(土)

### 会場 西4号館101教室

### 特別講演

9:30-10:15

島弧・造山帯・大陸の進化 ......平 朝彦 (東大海洋研)

### 国際當受當記念講演

13:30-14:00

Metamorphism, preservation, and exhumation of ultra-high pressure subduction complexes ......Ernst, W. Gary (Stanford Univ. )

### シンポジウム

14:10-16:40

### 「新しい島弧観の確立にむけて」

世話人:木村 学(東大理)·佐藤比呂志(東大地震研)·平田 直(東大地震研)·池田安隆(東大理)·伊藤谷生(千葉大 理)

〈趣旨〉 兵庫県南部地震以降,地殻活動をモニターする観測体制が急速に整備されつつあり,日本列島における現在進行形のテクトニクス(アクティブテクトニクス)に関する膨大なデータが蓄積されてきている。また,一方,地球物理学者,地形学者そして地質学者との共同によって,島弧地殻活動・地殻の変形過程の解明を目的とした地殻構造探査が実施される段階に入った。本シンポジウムでは,これらの最新のデータを日本列島全域というスケールで見たとき,どのような「新しい島弧像」が浮かび上がってくるのかを今後の展望も含めて議論する。

主旨説明(14:10)......木村 学(東大)

< 14 : 15-14 : 55 >

第1部 日本列島テクトニクスの現在進行形

- 1. ひずむ日本列島................多田 尭ほか(国土地理院)
- 2. 地形からみる日本列島の変形......池田安隆(東大)

< 14 : 55-15 : 55 >

第2部 日本列島の地殻構造とテクトニクス

- 3. 地殻の微細構造と日本列島テクトニクス
- ......佐藤比呂志ほか(東大地震研)
- 4. 地殻構造・地震活動と日本列島テクトニクス

.....平田 直ほか(東大地震研)

5. 衝突帯の地殻構造とネオテクトニクス

......伊藤谷生ほか(千葉大)

< 15 : 55-16 : 40 >

第3部 総合討論:新しい島弧像のゆくへ 討論

### 3月29日(日)

### シンポジウム

9:30-12:00

### 会場 西4号館102教室

### 「地質学は斜面災害を予測できるか」

世話人:山岸宏光(北海道地下資調)·渡辺暉夫(北大理)· 千木良雅弘(京大防災研)

〈趣旨〉 最近の日本列島では、1996年2月の北海道豊浜トンネルの岩盤崩落、1996年12月の長野県蒲原沢の崩壊・土石流災害、1997年5月の秋田県八幡平澄川の地すべり災害、1997年7月の鹿児島県針原川の崩壊・土石流災害、そして、1997年8月の北海道第2白糸トンネルの岩盤崩落等々斜面災害が続発している、八幡平澄川地すべりや北海道第2白糸トンネルの岩盤崩落を除いて、多数の尊い人命を失った。

こうした斜面災害のトリガーは様々であるが、その素因として の地質構造や岩相などの重要性からみて、これらの災害を未然に 予知予測する一手法としての地質学の果たすべき役割は大きい.

このシンポジウムでは,これら斜面災害の予測に対して地質学 はどの程度貢献してきたのか,今後どうすればできるのかなど幅 広い討論を期待したい.

< 9:30-11:30 >

開会挨拶と趣旨説明 ......山岸宏光(北海道地下資調)

1. テクトニクスと岩石学の立場から

2.火山地域における斜面災害と地質要因

3. 堆積岩の斜面変動の地質学的予測

......横山俊治(オキココーポレーション)

< 11 : 30-12 : 00 >

総合討論

9:15-12:10

### 会場 西4号館201教室

### 「新しい造山運動論,太平洋型と衝突型, その現状と展望」

世話人: 丸山茂徳 (東工大)・ Parkinson, Chris (東工大)・ Sopaheluwakan, Jan (RDCG-LIPI, Bandung, Indonesia)

< 趣旨 > 本特別セッションの目的は,特別にインドネシア地域のテクトニクスに焦点をあてつつ,造山運動論の現状のレビューを行い,今後の方針を模索することにある.

\*本シンポジウムは英語で行われます.

Introduction (9:15-9:20)

1 . General Orogenic Processes

< 9:20-10:10 >

1) A review of orogeny: the current state of knowledge and

future perspectives.
2) Accretionary growth of continental margin between rifting
and collision: an aspect of Miyashiro-type orogeny.
Isozaki,Yukio (univ. Tokyo)
3) Modelling of Pacific-type orogeny
Iwamori, Hikaru ( Nagoya Univ.)
< 10 : 10-11 : 00 >
4 ) Collisional vs. Pacific-type orogeny and deep crustal processes.
Ernst,W. Gary (Stanford Univ., USA)
5) Surface wave tomographic imaging of the upper mantle
beneath the Philippine Sea Plate
Nakamura, Yasuyuki & Shibuya, Takuo ( Kyoto Univ. )
6) Compositional layering of the oceanic uppermost mantle:
seismological perspective.
Kato, Mamoru ( Kyoto Univ. )
Gaherty, James B. (Gerogia Tech.)
& Jordan, Thomas H. (MIT, USA)
2 . Indonesian Orogeny
< 11 : 00-11 : 50 >
1) Understanding the Indonesian orogeny : a basement geolo-
gy perspective
Sopaheluwakan, Jan (RDCG-LIPI, Bandung, Indonesia)
2) Paleo-tectonic reconstruction of central Indonesia: implica-
tions for the early history of continent-continent collisional oro-
gensParkinson, Chris ( Tokyo Inst. Tech. )
Wakita, Koji (Geol. Soc. Japan)
3) On–going orogeny in the outer arc of the Timor–Tanimbar
region, eastern Indonesia.
Kaneko, Yoshiyuki, Kadarusman, Ade
& Ishikawa Akira (Tokyo Inst. Tech.)
< 11:50-12:10 >
総合討論

13:00-16:00

## 会場 西4号館102教室

### 「第四紀気候変動 海,陸,氷床 そしてモデリング 」

世話人: 平 朝彦(東大海洋研)・小泉 格(北大) <趣旨 > 地球環境変動の本質を理解し将来予測に資するために,第四紀の気候変動研究は必須の課題である.近年,国際深海掘削計画(ODP),パイカル湖調査,南極やグリーンランドでの氷床掘削など,海,陸,氷床から詳細なデータが集められるようになった.その結果は第四紀気候変動や炭素循環の実態について大きな進歩をもたらしたものの,その要因の理解についてはさらに多くの問題と混乱を生み出している.本シンポでは,このような近年の進展と問題点をレビューすることを目的としている.シンポジウムでは出来るだけ多くの参加者にも理解していただけるように,問題の本質を平易な表現で議論できるように工夫する方針である.

< 13:00-14:00 >

主旨説明(13:00-13:05)

- 2.短周期気候変動イベントとは何か...........多田隆治(東大)

< 14:00-14:50 >

3. 湖・池沼堆積物に記された気候変動シグナル

......柏谷健二(金沢大)

4. 氷床コア 日本ドーム計画と今までの成果との比較

......藤井理行(極地研)

< 14 : 50-15 : 40 >

- 5.気候変動モデルの進歩と問題点
- ......山中康裕・阿部彩子(東大気候システム研究センター)
- 6. **大気**CO2**変動の原因はどこまで解ったか**

......田近英一(東大)

< 15 : 40-16 : 00 >

#### 総合討論

13:00-16:00

### 会場 西4号館201教室

### 「古領家帯と黒瀬川帯の諸問題 第1部:黒瀬川帯」

世話人:高木秀雄(早大教育)·磯崎行雄(東大総合)·武田賢治 (山口大教育)

〈趣旨〉 西南日本の構造発達史と、棚倉構造線を境界とした東北日本と西南日本の地体構造の関係を解明する上でネックとなる古領家帯と黒瀬川帯の諸問題に関する現時点でのまとめを行ない、議論の時間を充分にとって、今後その問題点の解明にむけての指針を固めることを目的とする。

春のシンポジウムでは黒瀬川帯に焦点を当てる.黒瀬川帯についてはクリッペ・モデル以降,地質学的,堆積学的,古生物学的に検討が進み,日本列島のみならず,東アジアとの関係を含めたテクトニクスが論じられてきている.この機会に,改めて黒瀬川帯構成岩類の起源と,黒瀬川帯が記録してきた地殻改変過程の2つにテーマを絞り,議論を深めるとともに秋の信州大でのセッション「第2部:古領家帯」に議論を繋げることを目的とする.

趣旨説明(13:00-13:05)......高木秀雄(早大教育)

< 13:05-14:00 >

1. 黒瀬川構成岩類の起源【座長:山北 聡】

#### 基調講演

1) 日本列島の古期岩類研究の意義と展望

#### コメント

- 2) 秩父地帯と黒瀬川地帯を構成する地質体とその起源
- ......波田重熙(神戸大教育センター)
- 3) 黒瀬川帯・南部北上帯における砕屑性クロムスピネルの産 出とその音義
- 4) 付加体地質の観点からみた秩父累帯の構造区分
- ......松岡 篤(新潟大理)・山北 聡(宮崎大教育)・ 榊原正幸(愛媛大理)・久田健一郎(筑波大)

< 14 : 00-14 : 55 >

2. 黒瀬川帯の地殻改変過程【座長:武田賢治】

#### 基調講演 < 14 · 55-15 · 10 > 5) 黒瀬川ナップと大野ケ原ナップ 黒瀬川クリッペ説と横す 休憩 べり断層運動 < 15 : 10-15 : 40 > ......山北 聡 (宮崎大教育)・大藤 茂 (富山大理)・ 3. 黒瀬川帯の古生物地理【座長:松岡 篤】 佐野賢二(ダイヤコンサルタント) 9) 飛彈外縁帯・南部北上帯・黒瀬川帯の地体構造についての コメント 6) 紀伊半島東部~中央部の黒瀬川地帯 古生物地理学的考察 .......田沢純一(新潟大理) ......加藤 潔(早大理工総研)・坂 幸恭(早大教育) コメント 7) 九州の黒瀬川構造帯中のジュラ紀~白亜紀堆積盆と堆積テ 10) 黒瀬川帯のシルルーデボン系の起源 クトニクス ......梅田真樹(大阪市大理)

8) 黒瀬川構造帯の地球物理像

......村上英記・吉倉紳一(高知大理)

< 15 : 40-16 : 00 >

総合討論

地質学雑誌12月号において公募しました松本大会のセッションは、皆様のご協力によって20件の申込がありました。1月24日の第3回行事委員会で検討しました結果、内容が重複する2つの提案は今後検討することとし、それを含めて19のセッションを採用することとしました。なお、お申し込みのあったセッションだけでは、全ての会員の発表分野をカバーすることはできませんので、更に20程度のセッションを立てることを各専門部会に依頼するとともに行事委員会でも検討しております。セッションの最終決定は、3月29日の第105年総会後に開催される次回行事委員会で行い、地質学雑誌ニュース4月号で皆様にお知らせする予定です。セッションへの申込み公示は5月号に掲載し、申し込みのが切は6月30日の予定です。

- 第105**年学術大会(松本大会 = 9月25 ~ 27日)のセッションについて** −

#### 招待講演について

松本大会においてはシンポジウムは開催せず,セッションのみの開催となります.学術大会を充実したものとするために,各セッションには招待講演を含めることができるようにいたしました.第3回行事委員会で招待講演について検討した結果,会場や開催日数に制限もあり,松本大会においては,以下の要領で実施することにしました.

- ・講演時間(質疑を含む)は,一般講演と同様15分とする.
- ・招待講演を行う会員は、その他に一般講演を申し込むことができる。
- ・招待講演の数はセッションの規模に比例し、半日規模で2件まで、1日規模では4件までとする.
- ・ポスター発表によるセッションについては、4件までとする、
- ・招待講演(ポスターも含む)には非会員の発表も認める.

地質学会活性化のために,行事委員会としては学術大会について,試行錯誤いたしております.会員各位にはご迷惑をおかけしておりますが,地質学会および会員各位の研究のより一層の発展のためにご理解とご協力をお願いいたします.

(行事委員長 新妻信明)